んな小さな出來事さへ私には遣瀬のないやうな思ひを唆つた。私は昂奮のために眩惑されて居た。然も私の感覺は妙に鋭敏に成つて居た。私は燕の囀る聲を聞いた。近くの池にある噴水の飛沫を耳にした。私は生命と時間とが遁げて行くやうに感じた。そして、其日三度目に日光と、花と、香氣と、凱旋した春のあらゆる鬧がしい笑ひとが説明することの能きない重たさを以て私の上に壓し懸つて來た。

『御覽なさい、私の柳の木を！』と、二人が池の近くへ行つた時、ヂュリャナが叫んだ。そして、私に恁れて居たのを罷めて、二三歩急ぎ足に近づいた。『まア此の大きく成つたこと！貴方記憶えて被坐しつて、これはほんの小さな芽生でしたのよ。』彼女は一瞬間何やら考へに沈んで默つて居た。それから全然違つた低い聲で言ひ出した。『私はあれから最一度これを見ましたのよ。貴方は私があの時ヴィラリラへ參つたことは恐らく御存じないでせうね。』

彼女は溜息を抑へることが能きなかつた。が、直に又彼女が自分の言葉に依つて二人の間に齎した陰影を追ひ散さうとでもするやうに、又自分の口から其言葉の苦い味を洗ひ去らうとでもするやうに、彼女は俯向いて、噴水の管の一つに口を宛てがひながら、少し許りの水を飲んだ。それから接吻をさせるやうに顔を私の方へ仰向けた。彼女の唇も頰も水に濡れて鮮やかな感じがした。最後に二人が離れて立つた時、互の眼は恍惚の同じ物語を繰り返した。ヂュリャナの顔に表れた感情は全然異常なもので、其時の私には薩張解らなかつた。が、其後に到つて私はそれを了解した。其時私は此の憐れな女が死と情熱との交り合つた思想に醉はされて居たことを、彼女が感覺の倦怠に身を委ねた時、心に死の誓ひをして居たことを知つた。私は今でも彼女が私の前に立つて居た姿をまざ〳〵と見ることが能きる。柳の長い流れるやうな卷髪に影らされた、あの時のあの神祕的な顔を何時迄も記憶えて居ることであらう。水の上の日光の閃きは透明な木の葉の網を貫いて、影と影との間に顫へたり、踊つたりして居た。反響は喧ましい水珠のさま〴〵な聲を混ぜ合せて、一つの深い單調な音にした。

周圍のあらゆる物が私の神經的な昂奮を增して行つた。

私達は默つて家の方へ歩いて行つた。私の感覺は緊張し切つて居た。私の心臟は烈しく鼓動した。私は心の中で『これが譫妄と云ふものぢやないか』と考へた位だ。彼女の昂奮と騷擾とも殆ど耐へられない程に成つたらしい。不意に足を停めて、

『あゝ神樣！神樣！』と、喘ぐやうに言つた。『最う耐らないわ！』

息も絶え〳〵に、半ば聲を咽喉に塞らせながら、彼女は私の片方の手を執つて、自分の心臟の上に置いた。『ね、解るでせう？』

私は着物の上から彼女の心臟の烈しい鼓動を感ずることが能きた。私は彼女の眼が垂れ下がる眼瞼の下に泳ぐのを見た。そして、彼女が其儘氣絶して仕舞ひはせぬかと恐れながら、彼女の腰に兩腕を周して、殆ど抱き上げるやうにしながら絲杉の根下まで連れて行つた。其處で二人は勞れ果てながら倚架の上に腰を落した。

二人の前には家が夢の中のやうに高く聳えて居た。

彼女は頭を私の肩の上に凭せ懸けた。『おゝツリヨ、これは最う敵はない！餘まり怖ろしい！ねえ貴方、私達は此儘死にはしないでせうか。』それから彼女は何の位の深さとも知れない魂の底から出るやうな陰氣な聲で附け加へた。『ねえ、貴方は二人一緒に死なうとは思はなくつて？』

それを聞いて、私の全身を貫いた不思議な戦動は、其言葉に一種の深い異常な感情――疑ひもなく柳の下の二人の接吻の後でヂュリヤナの顏を一變したと同じ感情が籠つて居ることを私に示顯した。が、再び私はそれを了解しなかつた。私が了解した總ては二人が一種の譫妄に依つて摑まれて居ること、そして夢の零圍氣の中に呼吸して居ることであつた。

家は夢の中のやうに二人の前に高く立つて居た。田舍めいた玄關の下に、あらゆる蛇腹とあらゆる凸出の上に、雨樋に添うて、窓枠や露臺の下に、あらゆる裂目や隅々の中に、燕が彼等の巢を喰つて居た。粘土の巢は、古いのも新しいものも蜜蜂の窩の

やうにごた〳〵と密接して、極めて僅少の餘地しか殘して置かなかつた。閉め切つて、誰も住んで居ないとは云へ、此家の周りには何一つ死んだ面影を有たなかつた。家は休息のない、活潑な、優しい生命に依つて生氣を與へられて居た。忠實な燕どもは彼等の輕快な飛翔と、囀りと、彼等のあらゆる優美とあらゆる愛とを以てそれを取捲いて居た。彼等の數團が箭を射るやうな疾さを以て、一瞬の間に散つたり、集つたり、樹々の梢を掠めたり、太陽の方へ昇つて行つたりして、撓まず空中に追駈けぐらをして居る間に、他の仕事が巣の中や周りに續行されて居た。母燕の中の或者は一瞬間巣の入口に縋つて棲つて居るかと思へば、他の者は黑光りに光る翼を平衡にして棲つて居る。又或者は小さな二叉の尻尾を外に殘したまゝ、半分程巣の中へ辷り込んで居る。白と黑とに分れた尻尾が黃色い粘土に對して活潑に動くのも可笑しい。又巣の中に居た者は、光澤のある胸の一部と朽葉色の咽喉とを見せながら、半分程外へ出て來た。或者は又其時まで見えずに居て、急に鋭い魂切るやうな音を立てながら、全速力で飛び出して行く。閉め切つた家を周るこれ等の活潑で樂しげな運動は、私達の以前の巣を取捲くこれ等の巣の生活は、總じて一つの美しい光景であつた、二人に取つては微妙な感動すべき奇蹟であつた。で、私達は少時の間發熱も昂奮も忘れたやうに、凝乎とそれを見詰めたまゝ腰掛けて居た。

私が此符呪を破る最初の者であつた。

『此處に鍵がある』と、私は立ち上りながら言つた。『私達は何を待つてるんだ？』

『いえ、ツリヨ、最う少し待つて下さい！』と、彼女はおづ〳〵懇願した。

『えゝ、私は矢張行つて戸を開けて來るよ。』斯う言つて、私は祭壇に近づく階段でもあるやうに三段の階段を上りながら、家の戸口へ近づいた。私が聖骨匣の蓋を開く篤信者のやうな身顫ひを覺えながら、將に鍵を廻さうとして居た時、私は背後にヂュリヤナの物音を聞いた。彼女は影のやうに足音を偸んで、こつそり私に隨いて來たのだ。私は思はず飛び上つた。

『お前だつたのか。』

『えゝ、私なの』と、彼女は搔き抱くやうに囁いた。そして、私は頰の上に彼女の息が懸かるのを感じた。私の傍に寄り添ひながら、彼女は嬌やかな兩臂が私の頸の下で喰ひ違ふやうに、私の頸の周りに兩腕を捲き着けた。

斯んなこつそりした行動や、私を驚かせたと云ふので彼女の子供らしい喜びを曝け出した含み笑ひや、斯んな恰好の抱擁や、總てこれ等の敏捷な嬌態が私に昔のヂュリヤナを、幸福な數年間の若々しい纏綿の伴侶を、長く垂れた辮髪の誘惑に充ちた女を、鮮やかな笑聲を、小娘らしい風姿を想ひ起させた。あの幸福の氣息が今や想出に充ちた家の閾の上で私を取捲いた。

『開けようね？』と、私は矢張鍵に手を懸けたまゝ訊いた。

『えゝ、お開けなさい』と、彼女は私を離さないで、殆ど私の耳の邊りへ唇を持つて來ながら答へた。

錠の穴へ差入れて鍵をがちや〳〵廻す音を聞くと、彼女は一層堅く私を抱き緊めた。斯うして私に靠かり搦み着きながら、どき〳〵する胸の鼓動を私に傳へた。燕どもは二人の頭の上を周つて叫びながら輪を畫いた。然も鍵の音は四邊が森と鎭まり返つてでも居るやうに、はつきりと聞えた。

『這入りませう』と、彼女は囁いた。『さ、這入りませう、〳〵。』

直き近くで、而も私の見られない所にある唇から聞えたあの聲、人間の聲であつて同時に神秘的な聲、耳許に熱い息がかゝりながら、然も直ちに私の魂にのみ囁かれたやうな優しい聲、他の如何なる聲もこれ程であつたとは思はれぬ程、女らしく且つ甘い聲――私は今でも其聲を聞く、恐らくは永久にそれを聞くであらう。

『這入りませう〳〵。』

私は戸を開け放した。そして、二人は一人の人間に溶け合ひでもしたやうに、閾を越えて這入つて行つた。

廣間は入口の戸の上の圓窓から射す明りに依つて照されて居た。一羽の燕が鋭い聲を立てながら二人の頭の上を飛んで行つた。吃驚して上を見ると、屋根の下の壁龕から一つの巣が下つて居た。窓の硝子が一枚破れて居て、燕は其穴から自由に出たり入つたりして居たのだ。

『さァ私は貴方のものよ、貴方のものよ、貴方のものよ』と。ヂュリヤナは矢張囁くやうな聲音で言つた。そして、私の頸に捲いた手を離さずに、ぐるりと滑つて廻りながら、私の胸の上に凭れるやうにした。そして、顔を私の顔の傍へ持上げた。

二人は長い接吻を交した。

『ねえ』と、私は到頭言ひ出した。『二階へ行かうぢやないか。私が抱いて行つて上げようか。』そして、私の感覺はぐら〳〵として居たけれど、なほ私の筋肉は一躍して階段を上に彼女を運んで行く位の力は十分あるやうな氣がした。

『いえ、私は一人で行きますよ』と、彼女は答へた。が、彼女の聲を聞いて、彼女の容子を見ると、如何しても彼女にそんな事が出來相には思はれなかつた。

私は花園でしたやうに、彼女の脊中へ手を廻して、一段づゝ梯子段を抱へて上つた。家中が、空の貝殻の中で聞えるやうな、あの深い、遠くから聞えて來る、ぢゞ〳〵と云ふ音に充ちて居るやうな氣がした。他の音は、外界の物音は一つも二人の耳に達しなかつた。

二階へ到着した時、私は正面の扉を開けなかつた。直に暗い廊下を右へ折れながら、物は言はずに、女の手を執つて引張つて行つた。彼女は聞いて居る私の方で苦しく成る程忙しなく喘ぎながら息を吐いて居た。そして、彼女の昂奮を私にも傳染させた。

『何處へ連れて被往しやるの？』と、彼女は喘ぐやうに訊いた。

『二人の部屋へさ』と、私は答へた。

廊下は暗くて殆ど何にも見えなかつた。只本能の導くがまゝに歩いて行つた。私は到頭扉の把手を見出した。私はそれを開けた。二人は這入つた。

九

午後の二時であつた。私達がヴィラリラへ着いてから最う三時間に垂んとした。私はカリストーを喚ぶために一瞬間ヂュリャナを一人で殘して置いた。老人は既に一度小午の盆を持つて來て、今度は格別驚かないで、一種人の好さゝうな揶揄の眼遣ひをしながら、二度目の苛立しい拒絶を受けて歸つた。

で、今ヂュリャナと私とは互に相對して、戀人同志のやうに、互の眼を見合つては微笑しながら卓子に着いて居た。卓子の上には、さま〳〵な冷たい食料が載せられてあつた——糖果だの、ビスケットだの、黄橙だの、白葡萄酒の一瓶だのと、バローク風(十八世紀の前半に流行つた裝飾)の天井や、輕い壁被けや、戸に描いた牧歌的な繪畫と共に、此部屋は四邊に一種奇怪で古風な華やかさ、前世紀の面影を具へて居た。開け放した露臺の扉を通して、和らかな日光が流れ込んで來た。空が長い乳白の雲で

蔽はれて居るのだ。そして、其の四角な枠の中に、根に薔薇の床と梢の周りに囀る燕の合唱とを有つた古い尊げた絲杉が聳えて居た。少し離れては優しく色づいた花の林が、ヴィラリラの光榮が横はつて居た。三重の匂ひ、ヴィラリラの四月の精は長い規則正しい吐息をして、靜かな空氣の中に擴がつて行く。

『貴方記憶えてらしつて——?』と、ヂュリャナは言つて居た。

何度も、何度も繰り返すのだ。『貴方記憶えてらしつて?』

二人の愛の最も遠い記憶が一つ〳〵彼女の唇に上つた。一寸した何かの事情から喚び起されるのであるが、それ等の記憶の誕生地に在つて、古馴染の周圍に取捲かれては、驚くべき鮮明と强度とを以て再生するのである。が、庭園に居た時一たび私を襲ひ來つたと同じ絶望的な憧憬、同じ生活に對する猛烈な渴望が、今や私をして殆どそれ等の回想に耐へざらしめた。そして、近い過去の惱ましい幽靈に對して、未來の誇張した幻影を確立するやうに私に迫つた。

『明日か、晩くとも二三日の間には、二人で又此處へ遣つて來ようね――二人だけで逗留するためにだよ。御覽よ、何一つ失く成つては居ないぢやないか、何一つ取去られた物はないんだよ。お前さへ好けりや、今夜二人が此處へ泊らうぢやないか。だが、お前は可厭かい！本當にお前は左樣する氣がないのかい。』

聲と、身振と、眼附とで、私は極力彼女を誘惑しようとした。二人の膝は卓子の下で緊着いて居た。が、彼女は只凝乎と私を見詰めて居るばかりで、返辭をしなかつた。

『二人が此のヴィラリラで泊る最初の晩を想像して御覽よ――これから出て行つてアヴェ・マリヤの鐘の鳴る頃まで戸外に居るんだよ。そして、窓の戸が一度にぱつと明るく成るのを見るんだね。あゝ、お前にも私の言ふ意味は解つてる筈だ。燈火が初めて此家に點くんだよ――二人の最初の晩だよ。それを考へて呉れ！今の今迄お前は只昔のことを想ひ出すだけであつた。只昔のことを。だが、お前の回想の一つとして、私には此日の一瞬時にも及ぶものがないんだよ。明日の一瞬間には猶更値しないだらうと思ふんだ。二人の未來に横はる幸福に就いてお前は些少でも疑ひを抱いて居るかい。私は嘗て今お前を愛して居る程お前を愛したことはないんだよ、ヂュリヤナ――斷じて、斷じてないんだよ。え、聽いてるか。私は嘗て今日程完全にお前の所有であつたことはないんだよ、ヂュリヤナ。私は悉皆お前に話すよ――お前が何んな奇蹟を私の上に及ぼしたか、それを解つて貰ふために、私が經て來た道筋を何も彼もお前に話すよ。あれ程さま〳〵な忌はしい事をして來た後で、私が如何して此樣な幸福を望むことが能きたらう。私は何も彼もお前に言ふよ。或瞬間に於て、私は自分の青年時代に、子供の時代に還つたやうな氣がした。私は其時代の樣に純潔で無垢な情愛に富んで、心の單純な氣がしたのだ。私は過去のことなぞ一つも想ひ出さなかつた。總て――總て私の考へはお前の領有する所であつた。私の感情はお前と連結して居た。花一つ、木の葉一枚見ても、私の魂の盃は溢れて出やうとした。それ程一杯に成つ

て居たのだ。そして、お前は斯んな事何にも知らずに居たのだ。何にも氣が附かずに居たのだ。私はお前に話したいことが山の樣に有る。何日か、あの土曜日に、私がかないいいなめもちの花を抱へてお前の部屋へ這入つて行つた時、私は若い戀人のやうにおづおづして羞かしがつて居た。が、心の中ぢや死ぬ位お前を兩腕に抱へたいと思つて居たのだよ。お前はそれに氣が附いて居たかい。あゝ、私は何も彼もお前に言はなくちや成らない——散々お前を笑はせて上げるよ。お前は何にも知らないんだ。一度か二度私は胸を波打たせながらこつそりお前の部屋へ這入つて行つた。そして、切めてはお前の寢床でも見たさに、凹間の帷幄を引いて見たものだよ——其寢床に觸つて、枕に顏を埋めたさに。又時々は家中が寢鎭まつた後で、こつそりお前の部屋の扉口まで忍んで行つて、凝乎とお前の寢息を窺つて居たこともある——』

『默つて、ツリヨ、默つて下さい』と、彼女は私の言葉が彼女を傷けでもしたやうに、懇願して言葉を挾んだ。それから又遽てゝ微笑しながら附け加へた。『ねえ、前にもお願ひして置いたでせう——そんな風に私を昂奮させて下さつては困りますよ。私は本當に弱く成つて居るんですから——憐れな、纖弱い女ですからね。貴方のやうに仰有ると、私はぐら〳〵として、自分で自分を制御することが能きなく成りますよ。御覽なさい、私は怖ろしく健康を損ねて居るでせう。魂も藻抜けの殼のやうに成つて……』

彼女は微かな蒼醒めた微笑を微笑した。彼女の眼瞼は稍赤味を帶びて重たげに見えた。が、其眼瞼の下には、兩眼が熱病のやうな情熱に燃えて、あの長い睫毛の影が和らげて居るにも拘らず、殆ど堪へられないやうな爛々たる光を以て絕えず私を見詰めて居た。彼女の態度や物越には、何と云つて私には精確に把捉することが出來なかつたけれども、何處やら不自然なところがあつた。何時彼女の顏はこんな不安らしい不思議な表情を取つたことがあらう？ 時々彼女の表情は複雜に、朦朧と成つて、終ひには謎のやうにも見え出した。『彼女の全心は渦を捲いて居るのだ』と、私は一人で考へ

た。『彼女は未だ如何いふことが起つたか判然掴むことが能きないのだ。彼女の内界は擾亂して居るに違ひない。人間の全存在が左様一瞬間に變つて仕舞ふ譯には行くまいからね。』此の不可思議な表情は私を惹附けて、層一層私の情熱を增大した。彼女の燃えるやうな凝視はあらゆる物を呑滅する火の様に私の骨の髓まで喰ひ入つた。

『お前は何にも喰べないやうだね』と、私は頭に上り懸けた情熱の狹霧を吹き拂はうと一生懸命に努めながら、彼女に言つた。

『貴方もでせう。』

『うむ、まア少許は飲むが可い。お前は此葡萄酒を知つてるかい。』

『えゝ知つて居ますわ。』

『記憶えて居る？』

二人は或戀の挿話を想ひ出したがために、昂奮して互に眼と眼を見合せた、其挿話の上には、彼女の特に愛して居た薄金色の葡萄酒の微妙な香が立ち迷つて居るのだ。

『では、一緒に飲まうぢやないか――二人の幸福のために！』

二人は盃を合せた。そして、私は一息に自分の盃を飲み乾した。が、彼女は不意に堪へ難い嫌惡の情にでも捕はれたやうに、一寸唇に觸れただけで止めた。

『如何したの？』

『私頂かれないの、ツリヨ。』

『何故飲めないのだ？』

『えゝ――でも、何卒强ひて下さいますな。一雫飲んでもぐら〳〵として仕舞ひ相なんですもの。』斯う言つた彼女の顏には死んだやうな蒼白さが擴がつて居た。

『心持でも惡いのかい、ヂュリヤナ。』

『えゝ少し。此處を出やうぢやありませんか――切めて露臺の上へ出ませうよ。』

私は彼女の背後へ腕を周した。『少し寢て休んで見ては如何だね？私が傍に隨いて居て上げるよ。』

『いえ、有難う。最う大分快く成りましたの。』

二人は絲杉の樹を前にした露臺の端まで歩いて行つた。そして、彼女は片方の手を私の肩にしたまゝ、鐵の欄干に凭れた。屋根の下の出ッ張から燕の巣が房に成つて垂れて居た。其中を燕どもは絶えず飛び廻つた。が、下の庭園の靜けさは底の知れぬ程深いものがあつて、絲杉の樹は二人の前にそよとも動かないで立つて居た。で、耳の傍の此の騒ぎと、翅の疾風と、これ等の囀りとは私を惱ませ、不快にした位であつた。其他の物は皆穏やかな光の中にだん〳〵鎮まつて、だん〳〵朦朧と成つて行くやうに見えた。そして、私は自分が此時と此寂莫との甘さを飲み乾すために、休息を、沈默と沈着との長い合間を必要とするやうな氣がした。

『今此邊りには一羽位夜鶯が鳴いて居さうなものだね』と、私は彼等の夕の唄の耐らぬ甘さを想ひ起しながら言つた。

『左樣ねえ、居ないでせうか。』

『あの鳥は夕方から懸けて鳴き始めるんだよ。お前はあの啼聲を最一度聽きたいとは思はないのかい。』

『でも、フェデリコは何時私達を連れに來るんでせう?』

『成るたけ晩く來て呉れる方が可いね。』

『えゝ、左樣——成るたけ晩くね、晩く!』と、彼女は私が嬉しさに身顫ひした程心からの熱度を以て叫んだ。

『お前も幸福なんだねえ?』と、私は彼女の眼の中に彼女の答へを索めながら訊いた。

『えゝ、幸福だわ』と、彼女は眼瞼を落しながら答へた。

『ちやア最う今は私がお前一人を愛して居ると云ふことも解つたらうね——私が永久にお前の所有だ、お前一人の所有だと云ふことも。』

『えゝ解つてよ。』

『で、お前は──お前は何の位愛して呉れるんだい？』
『貴方には迚もお解りに成らない程──左様よ、ツリョ！』
斯う言ひながら、彼女は欄干から離れて、あの何とも云はれない彼女に特有な動作の一つを以て私の胸に身を投げ掛けた。實際、其仕草には女が男に許すことの能きるあらゆる甘い委心身の情が含まれて居たのである。
『美しい、本當に美しい！。』
あゝ彼女の美しく見えたこと！さも〳〵倦げで、身を寄せ掛けたまゝ、溶けて行くかと思はれる程可愛らしい。彼女の顔は蒼白く光つて、解かれた髪の雲のやうな流れの中から出て居た。彼女の睫毛は頰の上に長い影を落して、ちろりと流眄を與へられるよりも、一層深く私の心を醉はせた。
『お前もだよ──お前だつて解らないよ。私の心に起つた狂人染みた考へをすつかりお前に聞かせたら！あゝ、私の幸福は自分ながら怖ろしい程大きいんだよ。私は寧そ此儘死んだ方が可いか知らと思ふ位だよ。』
『死んだ方が』と、彼女は蒼白い微笑を泛べながら靜に繰り返した。『ねえ、ツリョ！私は如何かすると死ぬかも知れませんよ──今に。』
『おゝ、チュリヤナ！』
彼女は私の顔に見入らうとして身を反した。『ねえ、もしッ』と、彼女は續けた。『私が若し急に──不意にですよ──死んで仕舞つたら、貴方如何成さるの？』
『馬鹿なことを！』
『例へば、明日にも私が死んだとしたら。』
『そんな事言ふもんぢやないよ。』
私は女の顔を兩手に挾んだ。…………、…………、…………、…………、…………、…………。…………、…………。…………、…………、…………『…………、…………』…………。

九

『明日、明日最一度此處へ來るんだ――それより晩くちや不可ない！』と、私は遣瀬なさに燃えながら言つた。そして、周圍の事物から一種の刺撃と誘惑とが私の中に入り込むのを感じた。『明日の晩は二人が此處で寢るんだよ。可いだらう、えゝ？』

『明日！』

『二人は新に生活を遣り直すんだよ――此家で、此庭園で、此の春の日光の眞中で――何一つ起らなかつたやうに、二人の愛を再び始めるんだよ――だん〳〵昔の抱擁に歸るんだよ。そして、一々の抱擁の中に二人が今迄丸で知らなかつたやうな新しい香味を見出すんだよ。二人は時を有つて居る――二人の前にあらゆる時を――』

『いえ、いえ、ツリヨ、未來のことは言つて下さるな！未來は不幸だと云ふことを御存じないのか。今日、今日――今日のことを考へて下さい、過ぎ行く此瞬間を――』

斯う言つて、……。

十

『確に馬の鈴が聞えたやうですよ』と、ヂュリヤナは立上りながら言つた。『フェデリコが着いたんでせう。』

二人は耳を欹てた。が、彼女は何か聞き違ひをしたのだ。

『でも、最う此處へ被入しやる時分ぢやありませんか』と、彼女が訊いた。

『あゝ、最う七時頃だらうね。』

『あゝ神様！』

二人は再び耳を澄した。馬車の近づくのを表示するやうな響は一つも聞えなかつた。

『貴方行つて見て被入しやると可いわ、ツリヨ。』

私は部屋を出て梯子段を降りて行つた。眼の前に霧が立つて、頭腦は一種の水蒸氣に曇らせられたやうな氣がしたので、私の歩調は稍ふら〳〵として居た。壁の中に切

込んである側戸を開けて、私は直ぐ傍の家に居るカリストーを喚んだ。私は馬車のことを彼に訊ねた。が、それは未だ眼に見える所には來て居ないと云ふのだ。

老人は私を引留めて話し込まうとした。

『ねえ、カリストーや、俺們は多分明日にも最一度此處へ遣つて來ようと思つてるんだよ。』

彼は嬉しさの餘り兩手を擧げた。

『本當に？』

『あゝ、本當だとも。其時は又幾許でも談話をする隙間があるからね。馬車が見えたら、直に來て知らせて呉れい。左樣なら、カリストー。』

私は彼の傍を去つて元の部屋へ戻つた。夕暮はだん〳〵降りて來た。燕の群はきらきら翅を光らせて、日の照る空中を飛び交ひながら、だん〳〵喧騒を增して來た。

『如何でした？』と、ヂュリヤナは帽子を被り掛けたまゝ、姿見鏡の前から振返つて訊いた。

『未だ丸切り見えないよ。』

『一寸私の顏を見て下さいまし——餘まり汚れて居ませんか。』

『そんな事はないよ。』

『だつて、斯んな顏をしてるんですもの。好く見て下さいましよ。』

實際、彼女の顏を見ると、柩の中から起上つたやうにも思はれた。大きな紫色の輪が彼女の眼を緣取つて居た。

『でも、私は未だ生きてるんですね』と、彼女は附け加へた。そして、努めて微笑して見せようとした。

『未だ心持が惡いかい。』

『いえ、ツリヨ。でも——如何いふ譯だか解りませんがね——何だか身體中がすつかり空洞に成つたやうな氣がするんですよ、頭も空虛なら、心臟も空虛、脈の中にも

血が流れて居ないやうな。私は悉皆貴方に上げて仕舞つたんですよ。ねえ、私は最う生きてると云ふほんの外見の外何にも殘つて居ないんですわ。』

彼女は斯う言ひながら不思議な微笑をして見せた。妙に影の暗い、何やら豫言でもして居るやうな微笑で、私は心の中に何とも片の附かない不安を惹起された。が、私は又法悅のために眩惑されもした。私の心の輪は閉塞されて、聰明は晦まされたやうに見えた。不吉な疑惑は一つも頭の中へ入つて來なかつた。それで居ながら、私は如何いふ譯とも判明した理由は知らないで、心配らしい穿鑿の眼で、凝乎と相手の顏を見詰めたものだ。

彼女は再び姿見鏡に向つて、ちやんと帽子を被つた。それから卓子の傍へ行つて、腕環と手套とを取上げた。

『私は最う支度が出來ましたよ』と、彼女は言つた。

彼女は何やら搜すやうな容子をしながら、四邊を見廻した。『私は蝙蝠傘を持つて來た筈ですがね、如何でしたらう？』

『あゝ、私も左樣思ふがね。』

『あゝッ——想ひ出しました、屹度お庭の倚架の上に遺れて來たんですよ。』

『二人で行つて搜して來ようか。』

『私勞れて居るんですもの。』

『ぢや、私が一人で行つて來るよ。』

『いえ、カリストーをお遣りに成れば可いわ。』

『私が行つて來るよ。それからお前に紫丁香花を二三本と、麝香薔薇の束を取つて來て上げようと思ふがね——如何だい？』

『いえ——花は最う澤山ですよ——』

『此處へ來て掛けてお坐よ、私が行つて來る間、ね。多分フェデリコは思つたより用事が手間取つたんだらうよ。』

私は彼女のために露臺の上に安樂椅子を曳き出した。彼女はがつくりとそれに腰を卸した。

『貴方下へ被往しやるなら』と、彼女は言つた。『カリストーの許に私の外套があるか見て來て下さいませんか。馬車の中に置いては來なかつた積りですからね。何だか少し寒いやうな氣がするのよ。』彼女は身顫ひした。

『露臺の戸を閉めて上げようか。』

『いえ〳〵、私は堪へられるだけ永くお庭が見て居たいの。今時分見ると本當に美しいのね。御覽なさいな、綺麗ぢやありませんか。』

金色の光線が此處彼處ぽんやりと庭園を照して居た。花咲く紫丁香花の木々の梢は大概濃い菫色で、低い小枝は灰色がゝつた青色に傾いて居た。そして、密生した花の團々が微風に吹かれて優しい漣を立てる時、玉蟲甲斐絹を見るやうな、さま〳〵に變る効果を生じた。泣くやうな柳の樹々は長い髪の毛を池の水に浸けて居た。水は眞珠貝に見るやうな虹色の光澤に光つて居た。そして、其の不動の光と、尾を引く柳の葉と、微に色づけられた花の林とは、暮れ行く日の最後の時間に於て、全然實在性のない、傳説めいた蠱惑の幻影を作り上げて居た。

二人は此恍惚の蠱の中に、少時の間默つて腰掛けて居た。理不盡な憂鬱が私の魂に侵入した――あらゆる人間の戀の底に隱れて居る朧げな不幸の感が私の中に波立つた。私の肉體の倦怠と感覺の弛緩とは、私が目前の此の理想的な光景に見恍れて居る間、一層重くろしく私の上に懸つて來るやうに見えた。私は餘りに嚴しい、又は餘りに長く引延ばされた快樂の罷んだ後では、是非とも起らねば成らぬ不快と、失望と、漠たる悔の念とに閉されて居た。私は苦しんだ。

『私は、斯うして眼を閉ぢて二度と開けなかつたなら好からうと思つてよ』と、ヂユリヤナは夢の中で語つて居るやうに言つた。それから身顫ひしながら附け加へた。『私寒く成つて來たわ、ツリヨ、早く行つて來て下さい。』

安樂椅子の脊に凭れながら、彼女は襲つて來た發作に抵抗でもするやうに、身を縮めた。彼女の顏、特に鼻孔の周りが、雪花石膏でも見るやうな鉛色の透明を帶びて來た。彼女も苦しんで居るのだ。

『お前は心持が惡いんだね、可哀相に！』と、私は斯うした彼女を見るのが辛いのと、又少しは怖氣立ちもして、彼女に言つた。

『私は只寒いだけなの。早く私の外套を取つて來て下さい、何卒――早くね――』

私はカリストーの許へ駈けて行つて、外套を手にして、直に戻つて來た。彼女は私に扶けられて急いでそれを着用した。それから彼女は最一度腰掛けて、兩手を袖の中へ埋めながら、『えゝ、大變暖かに成つてよ』と言つた。

『では、私が行つて蝙蝠傘を取つて來ようね。何處に遺れて來たんだつて？』

『いえ、貴方ちやなくつても可いのよ――構はないぢやありませんか。』

が、私は最一遍彼處へ、二人が最初に停つたあの古い石の腰掛の上へ、彼女があんなに烈しく泣いた所へ、彼女があの神聖な三つの言葉、『えゝ最つとでも』と囁いた所へ戻つて行きたいと云ふ、妙な思慕を持つて居た。あれは只感傷的な昂奮であつたか。あれは只新しい感覺に對する好奇心であつたか。あの時の庭園の不思議な光景に依つて私の上に懸けられた誘惑に過ぎなかつたか。

『直に歸つて來るよ』と、私は言つた。

私は降りて行つた。そして、露臺の下に來た時――『ヂュリヤナー！』と喚んで見た。

彼女は立つて下を見卸した。私の魂の眼の前に――極めてはつきりと――私は何時でもあの薄暮の中に立つて居る默した幽靈の幻影を見ることであらう。あの長い菫色の外套と、あの白い〳〵顏の死のやうな蒼白さに依つて一層高く見えた、あの身丈の高い、ほつそりした女の姿を。

それから彼女は再び引込んだ。或は寧ろ、私の受けた印象を其儘記載すれば、彼女は消えた。私は駈けるやうにして小徑を下つて行つた。が、心の中では、何が私をそ

んなに急がせて居るか判明して居ないのだ。私の足音は私の頭脳の中を通して反響するやうに見えた。私は自分の歩いて居る道を確めるために一度も二度も立ち停つた。それ程眩惑されて居たのだ。何處から此の盲目的な理不盡な昂奮が來たか。疑ひもなく單純な肉體的原因から、私の神經の特殊な狀態から。斯くの如く私は自分自身に說明した。思索の持續した努力にも、正則な檢覈にも、思想の集中にも耐へないで、私は只神經の弄ぶが儘に成つて居た。從つてあらゆる物が幻覺の場合に於けるやうな誇張された强さを以て私に影響した。左樣いふ中にも、一つ二つの考へは他の考へを壓倒して、はつきりと明確に閃いた。それに依つて、既に二三の豫想されなかつた出來事が私の中に惹起した混亂の感を一層强めたものだ。――ヂュリヤナは今日私が『昔のヂュリヤナ』として記憶して居るものとは全然違つた女に成つて私を驚かせた。彼女は私に對して、或與へられた瞬間に於ては、私の期待するやうな態度を執らなかつた。或知られない要素が、何か知ら曖昧なものが、過剩なものが彼女の人格の中へ入込んで、彼女を變化させた。これ等の變化は只健康の病的な狀態に歸すべきものであらうか。『私は病氣ですもの、本當に病氣なんですもの』と、彼女は辯解でもするやうに繰り返し〳〵言つて居た。確に病氣はさま〴〵な變化を生ずるものでもあれば、一人の人間を殆ど認知し難い程に變へるものでもある。が、彼女の病氣といふのは抑も何であらう？元からあつたあの病氣が外科醫の手に懸つてもすつかり癒り切らないで殘つて居たのかも知れない。そして、今に成つて一層複雜な、一層不治の疾病に成つたのかも知れない。『私直に死ぬかも知れなくつてよ』と、彼女は一種の豫言とも取られるやうな、特種な强調を置いて言つて居た。彼女は一度ならず死の話を持出した。では、彼女は自分の身内に致命的な萠芽を有つて居ることを聢と知つて居るのだらうか。彼女は死の考へに依つて支配されて居たらうか。彼女が私の腕に抱かれながら示したやうな、あの深い情熱的な殆ど絶望的な熾熱を彼女の中に燃させたものは、恐らくは何か左樣云つたやうな考へであつたらう。彼女の幸福の大きく且つ急激な光は、

彼女を追掛けて居る化生の物を一層見易く、一層怖ろしいものにしたに違ひない。

『では、彼女は死ぬのか。私の腕に抱かれながら、二人の幸福の最中にある間に死ぬと云ふやうなことがあり得るのか』と、私は氷のやうな恐怖の戰慄を感じながら、一人で考へた。私はそんな危險が差迫つてでも居るやうに、『例へば、明日にも私が死んだとしたら』と言つた時、ヂュリヤナが眞理を豫言してでも居たやうに、一瞬間其場に立ち竦んだものだ。

夕の露が降りて居た。あるかなきかの微風が、何か動物でも足早に通つて居るやうな、がさ〳〵云ふ音を立てながら、茂みの中に呻いて居た。一羽又は二羽の迷兒に成つた燕が石投から投げられた石のやうに空中を切つて飛んだ。西の地平線の上には、何處かの凄じい大火の餘燼のやうな、殘んの光がなほ彷つて居た。

私は到頭石の腰掛に達して、蝙蝠傘を見出した。彼女が壓倒され、征服されて伏し沈んだのは此處であつた。此處で私はあの意味深遠な言葉を發したのだ、彼女の前にあの醉はせるやうな告白をしたのだ――『私が遠方でお前を搜してる間、お前はちやんと私の傍に居たのだ』と。私が彼女の唇から私を卽座に喜悅の最頂上へ高めて呉れたあの囁きを集めたのも此處であつた。此處で私は彼女の最初の涙を飲んだのだ、彼女の嗚咽に耳を傾けたのだ、あの曖昧な質問を懸けたのだ――『最う晩いんだね？恐らくは最う晩かつたんだね？』と。

ほんの數時間經つたばかりだ、然もそれが皆何んなに遠く見えることぞ！ほんの數時間だ、然も私の幸福は色が褪せて消え去つたやうに見えるのだ！他の意味で、然も前と同じやうに怖ろしい意味で、あの質問が絶えず私の心に還つて來た。『最う晩いのか――最う晩いのか。』私の苦痛と昂奮とは增すばかりだ。そして、此の薄暮の光と、これ等の影の默したる集積と、暗い茂みの中の疑はしい物音と、凡て此の逢魔が時の氣味惡さが私の心に裏悲しい意味を持つた。

若しそれが實際最う晩かつたら如何だ――彼女が實際自分が不治の病に罹つて居る

ことを、自分の中に死を包んで居ることを知つて居たとしたら？生きて居るのに倦きて、苦しむのに倦きて、これ以上私から望むべき何物も有たず、さりとて毒を呑んだり刃物を使つたりして自身を滅すことも爲し得ないとすれば、彼女は自分の病氣を培養し助長させるやうなことがあるかも知れない、それが展開して、深く根ざして、不治の疾病に成る迄隱して居るやうなこともあるかも知れない。一歩々々、祕密に解放の方へ、終焉の方へ導かれると云ふのが彼女の計畫であつたのだ。注意して症候に氣を附けて居たので、彼女は自分の病氣に對する知識を獲た。今や彼女は自分がそれに依つて倒れなければ成らぬことを知つて居る——確めて居る。あゝ！彼女は其愛が、情熱が、私の接吻が破壞の作業を速進させるだらうと云ふことも知つて居る。私は終に彼女の許へ歸つて來た。豫想しなかつた幸福の世界が彼女の前に開かれた。彼女は私を愛して居る、自分も測り知られぬ程愛されて居ると知つて居る。一日にして夢は二人に取つて事實と成つた。然も何んな言葉が屢々彼女の唇から漏れるのだ？死！

チュリヤナが外科的手術を受けた朝、二時間の間私を苛み苦しめたあの怖ろしい幻影が今又錯綜して私の前を通り過ぎた。私は疾病が女の體軀の中に齎し得る目も當てられぬやうなあらゆる荒廢を、解剖圖解の上で見るやうにまざ〳〵と眼の前に見せ附けられたやうな氣がした。又これよりも遠く距つた他の想出が驚くべき明瞭さを以て還つて來た。ぼんやりと影の多い部屋、開け放した窓、ぱた〳〵と鳴る帷幄、姿見鏡の前にひら〳〵と搖いで居る蠟燭の炎——惡い前兆の徵象——そして、チュリヤナは毒でも服んだやうに痙攣して身を藻掻きながら、戸棚に凭れて立つて居た。で、今や人を詰責するやうな聲が私に向つてそれ等の言葉を繰り返して居る。『お前のためだ、彼女が死なうと迄思つたのはお前のためだ。お前が——お前が彼女を死に迄逐ひ遣つたのだ。』

これ等の空想が動かし難い事實でもあつたやうに、盲目的な恐怖に、一種の恐慌に捕はれて私は家の方へ駈け出して行つた。

私が家へ着いた時、私にはそれが墓のやうな生命のないものに見えた。窓や露臺なども陰影に包まれて居た。

『ヂュリヤナ！』と、私は叫喚いた。そして、最一度彼女を見ようとしても間に合はないだらうと恐れでもするやうに、階段を上に家の中へ突進して行つた。

何が私を苦しめたか。此狂暴は何であつたか。

せい〳〵喘ぎながら、私は暗い梯子段を駈け上つて、部屋の中へ突入した。

『如何なすつたんです？』と、ヂュリヤナは吃驚して立上りながら訊いた。

『何でもないんだよ、何でもないんだよ――私は只お前が喚んだらうと思つて、駈けて來たのさ。今は何んな心持だい？』

『何だか寒いのよ、恐ろしく寒いのよ。私の手に觸つて御覽なさい。』彼女は私に兩手を差出した。兩方とも氷のやうに冷たかつた。

『身體中此通りに冷たいのよ――』

『神様！如何して又そんなに冷たく成つたんだい？お前を暖かくするには何をして上げたら可いんだい？』

『そんなに心配しなくつても可いのよ、ツリヨ。これが初めてと云ふ譯ぢやありませんからね――時とすると五六時間も續くことがあるの。如何することも出來ませんわ。只靜乎としてそれが過ぎるのを待つてる外ないの。ですが、フェデリコは如何して斯んなに晩いんでせうね？最う殆ど夜ですわ。』

彼女はそれ等の數言に全身の力を費しでもしたやうに、ぐつたりと椅子の中に落ち込んだ。

『では戸を閉めて上げやうね』と、私は露臺の上へ出ながら言つた。

『いえ〳〵、開けたまゝにして置いて下さい。寒氣のするのはそれがためぢやないのよ。新鮮な空氣には當つた方が好いのよ。それよりも貴方此處へ、私の側へ被入しやいませんか――あの足置臺を取つてらつしやいよ。』

私は彼女の傍に跪いた。彼女は氷のやうな手で可愛げに私の頭を撫で廻した、『憐れなッリョ！』と言ひながら。

『だが、ヂュリヤナや、我愛、我生命よ、何卒聞かして呉れ』と、私は最早私自身を制御することが出來ないで、突然言ひ出した。『何卒眞實の事を聞かして呉れ！お前は何か私から隠して居るのだ。私は知つてるよ、何か其處にはお前の私に白狀しないものがあるんだ。二人が此處へ來てから、二人が——幸福に成つてから、お前の心を離れない或固定觀念が、或影のやうなものがあるんだ。だが、二人は實際幸福なのかね。お前は實際幸福なのか——幸福であることが能きるのか。譯を聞かして呉れ、ヂュリヤナ！何故何時迄も私を迷はせて置くんだ。成程お前は病氣だつた、今でも健康が優れて居ない——それは眞個だよ。だが、そればかりぢやアない——斷じてない。何か其處に他の理由があるんだね——私の理解しない、私の全然知らない理由が。何卒眞實の事を言つて呉れ、縱令私がそれを聞いて平匐つて仕舞つても可いから言つて呉れ。今朝お前があんなにして泣いて居た時、私は「最う晩いのか」と言つて訊いたらう。お前は又「いえ、いゝえ——」と答へた。で、私はお前の言葉を信じたものだ。だが、それは何か他の理由から最う晩かつたのではないか。今日二人の前に開けた大きな幸福を十分味はうとしても味はせないやうな或物があるのか、私の言ふのは——お前の知つてる或物だよ、既にお前の考への中にある或物だよ。何卒眞實の事を言つて呉れ！』

私は凝乎と彼女を見詰めて居た。彼女は物を言はなかつた。そして、私はだん〳〵彼女の大きな眼の外、非常に大きく瞠いた、暗い、動かない眼の外、何物も見ないやうに思はれ出した。私の周りのあらゆる物は消失した。私はそれ等の眼が私の中に吹き込んだ恐怖の感を散らすために、私自身の眼を閉ぢなければ成らなかつた。其間の沈默は何れだけ續いたことであらう？一時間か。それとも一秒間か。

『私は病氣なの』と、彼女は終に惻ましい躊躇の後で口にした。

『だが、それは何んな風に？』と、私は其の短い言葉の響の中に私の疑念と一致するやうな告白を聞いたやうに思つたので、狂氣のやうに焦燥りながら吃つた。『何んな風に病氣なんだ？お前が死ぬかも知れないやうな病氣かい。』

何んな風に、何んな調子で、何んな身振で以て此の最後の質問を言ひ出したか、私は知らなかつた。私はそれが皆私の唇から出たか、彼女が皆それを聞いたかと云ふことも知らなかつた。

『いえ、ツリヨ、左樣言ふ積りぢやないの、いえ――いゝえ。私は只、私が斯んな風に――少し妙に成つて居ても私が惡いんぢやないと云ふことが言ひたかつたの。眞個病氣の所爲なのよ。貴方も些との間我慢して下さらなければ不可ないわ、今の儘で見て居て下さらなければ。本當ですよ、別に變つたことは何にもありませんわ。私は何にも貴方から隱して居るんぢやない。直きに快く成りますよ。快く成つてお目に懸けますよ。貴方もそれ迄我慢して下さいますか、えゝ？貴方は親切で好い人に成つて下さるの？此處へ被入しやい、ツリヨ。貴方も少し妙に成つて被坐しやるのね――少し疑ぐり深いのよ。何でもない事を貴方は心配なさるのね――眞蒼に成るのよ――何んな事を想像して被坐しやるんでせうね――ずつと、ずつと私の側へ寄つて、……――最つと――最つと――最つと……――私を暖めて下さい。あれはフェデリコぢやないでせうか。』

彼女の聲は途切れて、少し嗄れて居た。が、彼女はあの飜譯することの能きない表情で――搔き抱くやうな、優しい、心配げな――彼女が一二時間前にあの古い石の臺の上で二人一緒に腰掛けて居た時、私を慰めて、私の心を和らげようとして用ひたやうな、あの表情で以て語り續けた。私は彼女を接吻した。椅子が低く廣いのに、彼女が細そりして居たから、私にも其中へ掛けさせて、がつ〳〵頸へながら私に縋り着いた。そして、外套の端を引張つて、私の周りに被けて呉れた。斯うして二人は胸と胸と合せながら、息を交へて寄添つて居た。『あゝ、私の息が、私の接觸が彼女の中へ私

の持つて居る暖かみを悉皆移して仕舞ふことが能きたら！』と、私は心の中で考へた。そして、此移入を實現しようとして幻影的な意志の努力を試みもした。

『今夜』と、私は囁いた。『今夜私はお前を耽かり抱いて居て上げるよ。お前は最うそんなに顫へないでも可いんだよ――』

『えゝ、えゝ。』

『私はお前を見張つて居るよ。お前の見て居る夢をお前の顔の上に讀むよ。多分お前は夢の中で私の名を口にするだらうね――』

『えゝ、えゝ。』

『お前は時々寝て居ながら物を言ふ癖があつたね。それが何んなに私を喜ばせたらう！あゝ、あの聲だ！お前には解らない、お前が聞いたことのない聲だもの――私だけだ、私一人知つて居るのだ。そして、私は再びそれを聞かうとして居るんだ。お前が何と言ふだらうと思ふと、私は胸が躍るよ。多分私の名を言ふだらうね。私はお前がツヨヨのツを言ふ時のお前の口の動き方が好きで耐らないよ。それが接吻しようとして用意する時のやうに見えるものね。お前はそれを知つてるか。私は又お前の耳へお前の夢の中へ這入つて行くやうなことを囁くんだ。あの時分、私は時々朝に成つてお前が何んな夢を見たかを申てをつたものだが、お前は記憶えて居るかい。おゝ、ヂユリヤナや、今にお前も解るだらうがね、あの時分よりは一層嬉しいだらうよ。何んなに親切な看護をして、私がお前を癒して上げるか、お前も今に解るだらうよ。お前は本當に愛と優しさとを必要として居るんだよ、ねえ。』

『えゝ、えゝ』と、彼女は私の最後の幻影を勞はりながら、私自身の聲に依つて、それが夢みるやうな愛の唄の樣に彼女の心を鎮めて居ると云ふ信仰に依つて、私の中に喚び起された一種の弛緩した醉ひを增すやうにしながら、絶えず繰り返して居た。

『あれを聞いたかい』と、私は一層よく聽くために、少しく座から立上りながら彼女に訊いた。

『何です？フェデリコですか。』

『いや、好くお聽きよ。』

二人は庭園の方へ向いて耳を傾けた。

庭園はぼうッとした黄色の團塊に溶け去つて、只池の鈍い光に依つてそれを破られて居た。空のずつと外れにはなほ光の帶が殘つて居た。廣い三色の帶で、一番下が血のやうな赤、其上が黄橙色、其上が死んだ木の葉のやうな綠色である。黄昏の沈默を通して、一つの聲が笛の最初の音のやうに朗かに澄んで鳴つて居た。

それは夜鶯であつた。

『柳の木で鳴いてるんですよ』と、ヂュリヤナは私の耳に囁いた。

二人は手で觸れることの能きない夕の幕の後ろに漸次に薄れて行く三色の遠い帶に眼を着けたまゝ、耳を傾けて居た。私の魂はそれから大きな愛の啓示でも求めて居るやうに、私から離れて其響の上に彷つた。そして、私の側の憐れな女――斯うして耳を傾けて居る間、彼女の感情は何んなであつたらう？何んな懊惱の底へ彼女は墮ちて行つたらう？

夜鶯は唄ひ始めた。最初に愉快な諧調の突發が、眞珠の驟雨のやうに空中を落ちて行く澄んだ顫音の放射が來た。停唱。それから急速な、長く引張られた喉音が、樂しげな虚威張で目に見えぬ敵に挑戰するやうな力の試練があつた。第二の停唱。歌は哀歌的調子を取つた、小さい方の鍵に移つた、溜息に和らげられた、低い嘆息を漏した、捨てられた戀人の、阻喪せる欲望の、欺かれた希望の悲しさを表した。それから懊惱の叫びのやうな、急激で尖鋭な最後の訴へ――そして、消えて行つた。再び前よりも長く莊重な停唱。今や又前と同じ咽喉から出るものとは如何しても思はれないやうな、新しい聲調が來た。それ程謙遜で、臆病で、哀願的であつた。新に生れた雛の啼聲に、若い燕の囀りにさも似て居た。それから又驚くべき急速の度を以て、それ等の率直な音調が華やかな流れの奔出に、顫音の高翔に變化した、澄明な喉音で顫動し

ながら、放膽な演奏の章句に突進しながら――消えて行くかと思へば、又最高音の高唱に立ち昇つた。歌手は彼自らの歌に醉つて居るのだ。最後の調子が罷んだか罷まないか解らない間に次の調子が始まると云ふやうな、極めて短い停唱で以て、彼は其恍惚の思ひを蜜のやうに甘い、感激した、變化して已まぬ聲調の中に注ぎ出した。今低調かと思へば次には尖鋭な、今莊重かと思へば次には輕快と云ふやうに。今發作的な嗚咽と憧れの哀哭とに依つて中斷されたかと思へば、次には急激な抒情詩的爆發と全力的祈願とに依つて中斷されると云ふやうに。全庭園が息を殺して聽いて居るやうに見えた。大空も枝の中で目に見えぬ詩人が聲調の流れに自家の情緒を注いで居る柳の樹の梢まで降りて來て居るやうに見えた。花の林は騷立つて溜息を漏した。西の地平線の上には、黄色な幽光が此處彼處去りがてに彷つて居た。そして、此の今日の最後の光は物悲しく、殆ど哀愁を帶びて見えた。唯一つの星が光る露の雫のやうに顫へなから動悸を打つて居た。

『明日！』と、私に取つては多くの約束を含んで居る此言葉に依つて、内部の切願に應へながら、私は半ば無意識的に呟いた。

斯うして夜鶯に耳を藉して居る間、二人は半ば立上つて居た。そして、數分間其姿勢のまゝ殘つて居た。で、私は不意にヂュリヤナの頭が私の肩の上に重く凭りかゝるのを感じた。

『ヂュリヤナ！』と、私は恐怖に打たれながら叫んだ――『ヂュリヤナ！』そして、私が吃驚して身體を動かすのと一緒に、彼女の頭は生命のないものゝやうに後方へ落ちた。

『ヂュリヤナ！』

彼女は返辭をしなかつた。露臺から射し入る最後の薄白い光に依つて照された彼女の顏の死人のやうな蒼白さを見詰めながら、怖ろしい考へが電光のやうに私を打つた。恐怖の餘り我を忘れて、私は抵抗力のない彼女をどさりと椅子の上に倒れさせた。そ

して、彼女の名を喚び續けながら、彼女の心臓に觸つて見ようとして、顫へる指先で彼女の着物の胸を開けようと骨折つた。

『おい、私の雉鳩や、お前さん方は何處に居るんだい？』と、『私の弟の愉快げな聲が喚んだ。

十一

彼女は間もなく意識を取返した。そして、殆ど立つことさへ能きないのに、馬車に乗り込んで、出來るだけ早く自宅へ歸らうと言ひ張つた。

で、今や二人の縞羅紗に包まれたまゝ、彼女は默つて隅に凭れかゝつて居た。私の弟と私とは時々心配相に眼を見交した。馭者は馬を鞭で叩いた。そして、馬の速い平な跑歩は、此の穏やかな四月の夜に於て、朗らかな空の下に、花咲く生牆に縁取られた道の上に音高く反響した。

時々フェデリコはヂュリヤナに向つて何んな鹽梅かと訊いた。

『有難う、大分快う御座んす。』

『寒氣がしますか。』

『えゝ、少し。』

答へは明らかな努力から來た。二人の質問は彼女を苦しませるやうに見えた。到頭——フェデリコが彼女を會話の中へ引入れようとしたので——彼女は言つた。『何卒御免なさいな、話をすると私は勞れるのよ。』

馬車の幌が引上げてあつたので、彼女は膝掛の下に身動きもしないで、深い影の中に隱れて居た。一度ならず私は彼女の上に凭れかゝつて、彼女の顏を覗き込んだ——眠つて居るのか知ら、それとも又氣を失ひはせぬかと心配しながら。そして、其都度私は彼女の眼が大きく瞠いて、暗闇の中を凝視して居るのを見ては、又新に驚かされたものだ。

沈默の長い合間があつた。フェデリコも私も物を言ふ氣には成らなかつた。馬も何だか毎もの半分も駄けて居るやうには見えなかつた、私は馭者が一鞭馬に當てゝ呉れたらと心に願つて居た。

『おい急がせろよ、ヂョヴンニ！』

一行がラ・バディオラに着いたのは殆ど十時頃であつた。私の母は一行が晩く成つたので氣を揉みながら、私どもを待ち焦れて居た。

で、彼女はヂュリャナの痛々しげな容子を見ると、思はず叫んだ——

『私は最初から何うも此遠足はお前さんには過ぎると思つてましたよ。』

『いえ、阿母樣、何でもありませんのよ』と、ヂュリャナは相手を安心させようと努めながら言つた。『明日の朝に成れば屹度快く成りますよ。ほんの少し勞れた限りですものね。』

併し私の母が彼女を燈明の下で見るやうに成つた時、彼女は怖ろしさに兩手を擧げた。『あゝ神樣！神樣！お前さんの顔は誰が見たつて吃驚しますよ。如何して、お前さんは立つて居るのさへ太氣らしいよ。——エディスや、クリスチナや、大急ぎだよ、駈けて行つて寢床に暖水壺の用意をおしよ。——さア、ツリヨ、此女を二階へ抱へて行つてお上げなさい。』

『いえ〳〵』と、ヂュリャナは逆らつた。『そんなに氣を揉んで下さいますな。實際何でもありませんものね。』

『私が一つ馬車でツッシの許へ行つて、あの醫者を連れて來ませう』と、フェデリコが口を挾んだ。『半時間位の間には戻つて來ますよ。』

『いえ、フェデリコ、それには及びませんよ——私はお醫者なぞ要らない』と、ヂュリャナは殆ど腹立しげに叫んだ。『お醫者なぞ役に立ちませんよ。私は自分で如何して可いか知つて居るのよ。二階に必要なものは何も彼も揃つて居ますからね。さア被入しやいな、阿母樣。神樣！本當に貴方方は一寸しても大騒ぎをなさるのね。さア被

入しやいな、被入しやいな。』そして、彼女は突如として體力を恢復したやうに見えた。一人で五六歩歩いて行つた。が、梯子段の上では私の母と私とが彼女を支へて遣つた。部屋へ這入つた時、彼女は痙攣するやうな戰慄に襲はれた。それが數分間續いた。女どもは彼女の着物を脱がせ始めた。

『ねえッリヨ、彼方へ行つて居て下さい』と、彼女は乞うた。『又後から來て私を見て下されば可いんですよ。其間阿母様が傍に隨いて居て下さいますからね。別に心配して下さるやうなことはないのよ。』

私は次の室へ這入つた。そして、壁に沿うた長椅子の上に掛けて待つて居た。私は女どもの忙しさうな足音に耳を傾けながら焦燥の念に喰み盡されるやうな氣がした。何時私はあの部屋へ戻ることを許されるだらう？何時私は彼女と二人限りに成れるのか。私が彼女を介抱して遣るんだ、私は終宵寢床の側を離れまい。一二時間の間には、彼女も多分落着いて心持も大方快く成るだらう。私の手で彼女の髪を撫でゝ遣つたら、恐らくは好い工合に彼女を眠らせることが能きるだらう。少時經つと、彼女は半醒半睡の間に『此處へ！』と言ふかも知れない。私は私の介抱の力に異常な信仰を持つて居た。私はなほ此夜が甘い結果に終ることを望んで居た。そして、ヂュリヤナの苦痛を思ひ遣る眞只中に挾まりながら、なほ肉感的な觀念が固くこべり着いて、まざ〳〵とした一種の永續的幻影に成つて仕舞つた。寢室の帷幄の後ろに燃えて居る洋燈の火影に照されて、寢卷よりも白い顏をしながら、彼女は最初の假睡から起き上る。半ば眼を開きながら倦怠相に凝乎と私を見詰める。そして呟く。『此處へ來て貴方もお臥みなさいな。』……

間もなくフェデリコが這入つて來た。

『でね』と、彼は愛情に充ちた聲音で言つた。『好い鹽梅に、別に心配なこともない樣子ですよ。私は今梯子段の上でエディスと話をして來たんですがね。如何です、階下へ降りて何かお喫りに成りませんか。食堂には何も彼も用意が出來て居ますよ。』

『いや、有難う、私は目下何にも喰べたくないんだがね――後にして貰はうよ。私は只隣の室から何時喚びに來るかとそればかり待つて居るんだよ。』

『ぢや、御用がなけりや私は彼方へ參つて居りますよ。』

『あゝ、左樣して呉れ、フェデリコ。私も直き降りて行くよ。何うもいろ〳〵有難う。』

私は彼が出て行くのを眼で見送つた。そして、又もや私の誠實な弟が信頼の感を私に吹き込んだ。又もや私の心が彼の中に安堵を見出した。

三分間位過ぎた。私に面した壁の掛時計が振子の規則正しい搖れを以て時間を測つて居た。長針と短針とは十一時十五分前を指して居た。私は最う悚へ切れなく成つてヂュリヤナの部屋へ行かうとして立上つた時、私の母が遽てゝ這入つて來た。

『彼女も大分落着いたやうだよ』と、彼女は低い聲で言つた。『だが、今は靜穩にして置くのが肝心だよ――可哀相に。』

『這入つて行つても可いんですか』と、私は訊いた。

『えゝ被入しやい。だが、何處迄も靜穩にしてなけりや不可ませんよ。』

私が這入つて行かうとした時、彼女は私を引留めた。

『ツリヨ！』

『えゝ阿母樣、何ですか。』

彼女は躊躇するやうに見えた。『一寸お前さんに訊きたいのだがね――あの手術の以後――お前さんは全然お醫者樣と話をしたことがないのかい。』

『えゝ一度か二度會ひました。それで？』

『それぢやお醫者は――』と、言ひ懸けて、彼女は再び躊躇した――『ヂュリヤナが最一度子供を持つても別に危なげはないつて云ふやうなことを仰有つたんだね？』

私は如何返辭をして可いか解らなかつた。實際、私は醫者とそんな話をしたことがなかつたのだ。で、私は只まご〳〵しながら、『それで？』と繰り返した。

彼女は再び物を言ふ前に躊躇した。

『お前さんは未だヂュリヤナが懐胎に成つてることを知らないのかえ。』

私は胸の眞中へどゝんと一つ重い打撃でも受けたやうに蹌踉いた。

『懐胎？』と、私は最初の瞬間其意味を十分理解することが能きないで、只吃つた。

私の母は兩手に私の手を執つた。『で、如何なんだい？』

『私は些とも知りませんでした――』

『だが、お前さんの顔色は如何したと言ふんだえ？ちや、お醫者様は何にも仰有らなかつたんだね――』

『えゝ、醫者は――』

『ツリヨや、此處へ來てお掛けなさい。』

彼女は私を長椅子の上に掛けさせた。そして、私の言ひ出すのを待ちながら、可訝相に私を見詰めて居た。少時の間、私は相手を眼の前に据ゑながら、全然彼女を見なかつた。烈々たる光の炎が私の心内を照した。全局の戯曲が私の前を廻轉した。

何處から私はそれに對抗するだけの力を得たか。何が私の理性を保存して呉れたか。恐らく苦痛と恐怖の過剰其者の中に、私は自分を支へて救つて呉れる英雄的な力を發見したのであらう。

私は肉體的な感受性を、自分の周圍の認識を取戻すや否や、心配相に私を見詰めて居る私の母を見るや否や、何を措いても先づ彼女の恐怖を和らげるのが必要だと自覺した。

『私は知りませんでした』と、私は言つた。『それに就いてはヂュリヤナも何とも言ひませんし、私も全然氣が附きませんでしたからね。眞個驚いて仕舞ひました。成程醫者はそんな危險があるかも知れないと云ふやうなことを言つてました――それだから私も今のお話を聞いて狼狽したんですよ……御存じの通り、ヂュリヤナはあんなに纖弱い身體ですからね。ですが、醫者はそんなに重大だと云ふやうなことは言つてま

せんでしたよ。手術はあの通り旨く行つたんですものね。まア最少し見て居ませうよ。兎に角醫者を呼びに遣つて相談しなくちや不可ませんね――』

『左樣だよ、それが一番大切だよ。』

『ですが阿母樣、そりやア最う確かでせうね？ヂュリャナが貴方に左樣申しましたか、それとも只貴方の――』

『私は最初何うも容子が變なので氣が附いたのだがね、そんな事に間違ひッこはないよ。一兩日前迄ヂュリャナは左樣ぢやないと言つてました。少くとも未だ判明しないやうなことをね。お前さんがあの娘のことで餘まり苛々して居るものだから、彼女も此事に就いては當分の間お前に話して呉れるなと賴んで居たんだよ。だが、斯う成つてはお前に話さずには居られないよ。ヂュリャナは知つての通り、自分の健康と云ふことを全然氣に懸けて居ないもんだからね。それに、お前さんも知つてかい――あの娘は此處へ來てからも、だん〳〵快く成るどころか、一日々々と日增しに惡く成つて行くやうに私には見えるんだよ。以前は一週間も田舍に居やうもんなら、見違へる程健康に成つたもんだがね。お前記憶えてお坐でかい。』

『えゝ左樣でした。』

『斯んな場合には、前から何れだけ用心したつてし過ぎると云ふことはないもんだからね。お前は直にヴェベスチ博士へ手紙を書くが可いよ。』

『えゝ、直に書きます。』

で、私は此上自分を制御することが能きないやうに感じたので、ヂュリャナの許へ行くと言ひながら立上つた。

『あゝ行つてお坐でなさい。だが、今晩は出來るだけ靜穩にして、病人に氣を使はせては不可ませんよ。私は一寸階下へ行くが、直に又上つて來ますからね。』

『有難う、阿母樣。』斯う言つて、私は唇を彼女の額に觸れた。

『私の祝福された子！』と、彼女は出て行きながら呟いた。反對の側の戸の閾の上

に立つて、私は其のすらりとした姿の消えて行くのを見送つて居た――單純な黒い服を着た、如何にも眞直な、如何にも氣高い其姿を。

そして、私は何とも云はれない感覺に襲はれた――恐らくは此家が私の周りにばたばたと壞れ落ちるのを見たら感ずるだらうと思はれるやうな、同じ感覺に。私の內界は悉く私の眼の前にばた〳〵と壞れて、倒れて、廢趾に歸して居た。そして、私は何一つ捕まへることも能きなかつた。

十二

不幸な人間の口から、『私はあの一時間に十年歳を取つた』と云ふやうな文句を聞くのは、決して稀れではあるまい。多數の人々に取つては、斯んな事は考へ得られないやうに見えるでもあらう。が、私は理解して居る。外見は穩やかな私の母との會話の數分間に、私は十年以上も歳を取つた。人間の內生活に於ける急激な加速度は地上に於ける最も驚くべく、最も恐るべき現象である。

で、私は如何したら可いか。狂暴な衝動が私を掴んだ。私は夜の闇の中へ遠く遁れ去らうかとも思つた。駈けて行つて、一室に閉籠つたまゝ、私の不幸を殘らず實感するために好くそれを默想して見ようかとも考へた。が、私は能くそれ等の暗示に抵抗するだけの沈毅を保つた。私の性格の最も好い部分が其夜現前した。私の魂の陣痛から、私の最も男らしい性質の或物が生れた。俺の行動の一つとして私の母にも弟にも、實際家中の誰にも變に見えないやうにすることが此際必須である』と、私は私自身に言つた。

ヂュリヤナの扉の正面に、私は自分の四肢の烈しい戰慄を抑へることが能きないで立ち停つた。廊下を近づいて來る誰かの足音を聞いて、私は漸と決心して中へ這入つた。

エディス嬢が爪先立てゝ寢室の凹間から出て來た。そして、物音を立てぬやうに私

に合圖した。

『奥様は漸とうと〳〵お臥みに成つた所ですよ』と、彼女は囁いた。それから竊と自分の背後に戸を閉てながら、室を出て行つた。

天井の眞中から下つて居る洋燈は落着いた平な光を放つて居た。彼女が咲き誇つた紫丁香花の樹の下でさも優雅に着熟して居た灰色の着物が一脚の椅子の上に脱ぎ捨てあるかと思へば、他の椅子の上には紫色の外套が被けてあつた。一目これ等の物を見ると、私は遣瀬なさが胸元から込み上げて來て、再び遁げ出したいやうな氣に成つた。私はつか〳〵と凹間の傍迄行つて、帷幄を引上げた。私は寢臺を見た。私は枕の上に黒い髪の團まりを見た。が、顔は見えなかつた。私は夜具の下に屈まつて居る彼女の姿の輪廓を見た。眞實はあらゆる下劣な獣性を具へて私の前に立ち昇つた。嘔吐を催すやうな影像の列が、閉ぢようとしても閉ぢられない私の精神の眼の前を通り過ぎた――既に起つたものの影像ばかりではない、否でも應でもこれから起らうとして居るもの丶影像である。斯く刻薄假す所のない精密さで以て、私は未來のヂュリヤナを見ることを強ひられた。（あ丶、私の夢想よ、あ丶、私の理想よ。）彼女の身内に罪の結實を藏しながら、無殘な醜しい姿に成つて……何人がこれよりも怖ろしい天罰を想像することが能きるか。然もそれは皆眞實であつた――あらゆる疑ひの可能性を超越した眞實であつた。

人間の悲しみが彼の忍耐力を超過する時、彼は本能的に疑ひの中に彼の耐へ難い苦痛に對する一瞬の緩和を求める。『俺は間違へて居るかも知れない』と、彼は一人で考へるのだ。『俺の不幸は俺の考へて居る程大きなものではない、ないかも知れない。恐らく俺の苦痛は全然理由のないものであらう。』そして、此休戰の間、混亂し且つ迷亂した精神は物の眞の狀態に就いて一層精密な觀念に達するだけの餘裕を得るものだ。が、私に於いては、疑ひは一瞬間と雖も其影を見せなかつた。私は一瞬の不確實をも有たなかつた。今や極めて明晰と成つた私の意識内に起つた現象を説明することは、

私には迚も能きない。内部の暗い境地に起つて居た或秘密な自發的進行に依つて、此の怖ろしい事件に關係のある、今迄注意されずに居たあらゆる徵候が、一種の完全な、脈絡のある、決定的な、疑ひを挾む餘地のない論理的連鎖を形作りながら、今や目に見えぬ束縛を放たれて水の上に泛んで來た或物が、幾許底へ押込まうとしても押込まれて居らぬと同じやうな速度を以て、私の意識内へ闖入して來た。一つの徵候も、一つの證據もそれが割當てられた場所に缺けて居なかつた。此連鎖の環を聚めて、整理して、連結することは、私に取つて何の勞力をも要しなかつた。遠い瑣末な事實も此の新しい光に依つて照された。近頃起つた片々は更に新しく彩られた。花と花の香に對するヂュリヤナの常ならぬ嫌惡、彼女の異常な昂奮と隱すに隱されない嘔氣、不意に蒼白と成る顏色、彼女の動作に表はれた過度の疲勞、露西亞の小說の中に彼女が爪で標記を附けた章句、彼女が私の手から其本を引奪つた時の身振。それから又ヴィラリラに於ける光景――あの涙、あの嗚咽、彼女の曖昧な言葉と豫言的な微笑、彼女の半ば狂氣染みた饒舌、彼女の屢々口にした死――凡て是等の徵候が、今や私の魂の上に深く鐫られた母の言葉の周りに蠭集して來た。

私の母は言つた。『そりやア最う間違ひッこないよ。一兩日前迄はヂュリヤナも左樣ぢやないと言つて居ました、少くとも好く解らないと云ふことでした。お前さんが餘まり苛々して居るもんだから、あの娘が心配してお前には何にも言つて呉れるなと私に賴んだのだがね――』と。これ程判明した眞實はない。總てが全く確實である。

私は凹間の中へ這入つて寢床に近づいた。帷幄は再び私の背後に落ちた、中の光は一層ぼんやりとした。恐ろしさに私は息も出來なかつた。私が半ば夜着の下に隱されたヂュリヤナの顏を一層好く視ようとして枕の上に俯向いた時、血は一時に私の脈管の中で停滯した。其瞬間若し彼女が顏を擡げて私に話し懸けたら、何んな事に成つたらう。私には解らない。

彼女は眠つて居たか。彼女の額は眉毛の邊り迄しか見えなかつた。

私は一瞬間其處に立つたまゝ待つて居た。併し彼女は實際眠つて居たらうか。彼女は身動き一つしないで靜乎と横に成つて居た。夜着の下の彼女の唇からは呼吸の音一つ私の耳に聞えなかつた。彼女の顔は眉毛の邊り迄しか見えなかつた。

若し彼女が私の居ることに氣附いたとしたら、私は何としたものであらう？今は質問なぞ懸ける時でない、二人が談話なぞする時でもない。若し私が何も彼も知つてると云ふことを彼女が感附いたとすれば、其夜の間に彼女は何んな極端まで逐ひ遣られることであらう。從つて私は變らぬ愛情を佯る、全然知らない風をする、四時間前にヴィラリラであの優しい言葉を私の口から發せしめたあの感情の表現を固執する必要がある。

私はぼんやりした眼を周圍に投げながら、不圖床の上に彼女の小さな金絲で刺繍をした上靴を見附けた。傍の椅子の脊には、長い絹の靴下と靴下留めとが懸けてあつた——最近二人限りの時に、私が恍惚として見入つたまゝ、少時其眼を離し得なかつた物ばかりである。そして、直接に肉感から來る嫉妬が猛烈な勢ひで私を掴んだ。私が手暴くヂュリヤナを喚び起して、刹那の憤激が私に暗示した狂暴な言葉を彼女の面上に投げ懸けずに濟んだのは、眞個奇蹟だと云つても可い。

私は盲目的な失望から心の中に『此末は如何成るだらう』と考へながら、漸く凹間から蹣跚き出ることが能きた。

私は何處かへ行つて仕舞はうと決心した。『階下へ降りて行かう。阿母さんにヂュリヤナは眠つて居ると告げよう。そして、自分も又休息の必要があると告げるんだ。それから自分の居間に閉ぢ籠つて——夜が明けたら——』が、それ以上進むことは能きなかつた。私は閾を越す力さへないやうな氣がした。さまざまな恐怖が私を襲つて來た。私は自分の上に注がれた凝視を感じでもしたやうに、不意にぐるりと向き直りながら、凹間に面して突立つた。私の眼には帷幄が一寸動いたやうに見えた。が、それは間違つて居た。にも係らず、磁石の波のやうなものが帷幄

の間から出て來て、無理矢理私を其方へ引張つて行つた。私は身顫ひしながら再び凹間の中へ這入つた。

チュリヤナは前と寸分變らぬ姿勢で横に成つて居た。彼女は眠つて居るんだらうか。彼女の顔は眉毛の邊り迄しか見えなかつた。

私は寢床の側に座を占めて待つて居た。左樣して居る間、私は下の敷布よりも青白い、あんなにも美しく、あんなにも純潔な、あんなにも妹らしい、あんなに屢々私の唇が敬虔の念に充ちて接吻した、あんなに屢々私の母が唇に押附けた其額を見詰めて居た。

汚染の徵候なぞは少しも其上になかつた。外部の眼には何一つ變つて居なかつた。然も私の魂の眼が其の白い額の上に見る汚點は、地上の如何なる力も永遠に拭ひ去ることが能きないのだ！

最近滿悅の發作に驅られて私の發した言葉の一部が私の心に還つて來た。『私はお前の伽をして居るよ、お前の顔の上にお前の夢を讀んで上げるよ』と。そして、私は其度に『えゝ〳〵』と繰り返して居たのを想ひ出した。そして、私は自分自身に訊いた。『實際として、彼女は何んな生活をして居るのであらう？　何を彼女は爲ようと思つて居るのか。何んな計畫を立てゝ居るのか。』其處へ氣が附いた時、私は自分の苦痛を考へることを罷めた。そして、彼女の苦痛を想像することに、彼女の不幸の廣袤を理解することに耽り出した。

實際、彼女の苦痛は際限のない、猶豫のない、忍ぶに餘る絶望であらなければ成らぬ。私の刑罰は彼女の刑罰であつた。そして、疑ひもなく彼女自身のそれよりも彼女に取つては一層怖ろしいものであつた。あのヴィラリラで——庭園の小徑で、石の腰掛で、家の中で——彼女は確に私の聲に眞實の響を聞いたに違ひない、私の顔に眞實を讀んだに違ひない。彼女は私の愛の洪大無邊なることを信じた。

『私が遠くにお前を搜して居る間、お前は始終私の側に居たのだ。ねえ、如何だ、

此啓示はお前のあらゆる涙を値打して居ないか。斯んな愛の證據を握るためには、お前は最つとでも、最つとでも涙を注がうとは思はないのか。』

『えゝ、最つとでも！』

彼女は聲に全精神を罩めて、本當に神聖なものと私に見えたやうな溜息を漏しながら、此樣に答へたものだ。『えゝ、最つとでも！』

斯かる啓示のためには、彼女は喜んで一層多くの涙を注いだでもあらう、一層多くの殉教者的苦惱を嘗めたでもあらう！そして、自分の足許に一たび失つた、そして、數年間嘆き暮した男が跪くのを見て居た間、彼女は自分が純潔でないことを知つて居た。純潔でない實質的感覺を持つて居た、彼女が他人の種子を宿して居る胸の上に私の頭が横はるのを感じなければ成らなかつた。あゝ、如何して彼女の涙が私の顏の上に燒け爛れた痕を殘さなかつたらう？　如何して私は其涙を呑んで毒に中らないで濟んだらう？

一瞬間に二人の愛の全日が閃いた。私は再び二人かヴィラリラへ着いた瞬間からヂュリヤナの顏に現はれたあらゆる表情を、眼にも留らぬ程疾く消え去つたものまで、一々彷彿した――そして、私はそれ等の表情を盡く理解した。大きな光が私の上に射込んで來た。あゝ、私が『明日』に就いて、未來に就いて語つた時！私の唇から出た明日は、彼女に取つて何んなに怖ろしい言葉であつたらう！それから私は絲杉の樹に面した露臺の上の二人の短い對話を想ひ起した。あの時彼女は不意に來る死といふ觀念の上に何時迄も低徊して居た。若し自分が急に、思ひ掛けなく死んだら、私は如何するだらう――例へば、明日にも自分が死んだら如何するかと、彼女は訊いたものだ。それからずつと後であつたが、彼女は私に縋り着きながら、『いえ〳〵、ツリヨ、未來のことなぞ言つて下さいますな。只今日のことを、今の瞬間のことだけ考へて居て下さい』と叫喚いたものだ。それ等の言葉は、それ等の擧動は皆決死の覺悟を、悲劇的な結末を裏切るものではないか。彼女に取つて他に遁路が一つも殘されて居ない

とすれば、恐らくは今夜にも、延ばし難い明日の來る前に、彼女自身を滅さうと覺悟して居ることは明白だと云はなければ成らない。

彼女の差迫つた危險を考へての恐怖の最初の衝擊が濟んだ後で、私は心の中でヂュリヤナの死と彼女の過失とを較べて、何れが重大なる結果を齎すだらうかと考へ出した。此不幸が取返し難いものとすれば、卽時に大破綻の來る方が恐らく此の怖ろしい戲曲の漠然とした延長よりは優しかも知れない。そして、私の想像はヂュリヤナの新しい出產のあらゆる階段を眼の前に描いて見せた。私の姓を冒して、私の後繼者と成り、私の母や、弟や、小さな娘どもの抱擁を簒奪する其闖入者をまざ〳〵と私に見せた。『死以外に何物もこれ等の事件の致命的な進行を中斷するものはない。が、彼女の自殺は果して秘密の裡に葬られるだらうか。何んな風にヂュリヤナは自殺しようと思つて居るのか。そして、彼女の死の自發的であることが拒まれないとすれば、私の母は何と考へるだらう、私の弟は何と思ふだらう？私の母に取つては何んな怖ろしい打擊であらう！そして、マリヤは？ナタリヤは？そして、私は其後如何して生活したら可からう？

實際、ヂュリヤナなしに私の生活を思料することは私にも不可能であつた。私は總てのありし事にも拘らず此の憐れな女を愛して居た。此の忌々しい嫉妬の驀進の外には、嘗て彼女に對して憎惡若しくは嫌惡の何んなに小さな痕跡をも感じたことがないのだ。怨恨や復讐の念は一つとして私の心に泛ばなかつた。私は只彼女に對して深い同情を感じた。最初から私は彼女の墮落に對するあらゆる責任を自分の身に引請けて居た。思ひ上つた寬大な感情に支へられて、私は自分自身に向つて言つた。『彼女は私の打擲の下にあの溫和な頭を差出すことを知つて居た、苦痛に耐へることを知つて居た、默つて居ることを知つて居た。彼女は男らしい勇氣と英雄的な克己の例を私に見せて呉れた。今度は私の番が來たのだ。私は其酬ひを彼女に負うて居る。私は何んな犧牲を拂はうとも彼女を救はなければ成らない。』そして、此の氣高い精神と親切な

感情とは皆彼女から私に移つたものだ。

私は一層近く寄つて彼女を眺めた。彼女は身動きもしなかつた、彼女の顔は矢張隱されて居た。『彼女は實際眠つて居るのか』と、私は思ひ廻した。『それとも他人の疑念を惹かぬために、一人で抛つて置かれるために、只眠つて居るやうな風をして居るのか。成程、若し彼女が明日を待たないと云ふやうな計畫を立てゝ居るとすれば、其實行を容易にするためには自分の力にあるだけの手段を盡すに違ひない。彼女は睡眠を裝うて居るのだ。若し實際眠つて居るものとすれば、彼女が是程穩やかに、是程靜乎として寢て居る筈がない――あんなに迄神經の昂奮し切つて居る彼女が。一つ竊と彼女を搖り起して遣らうか――』が、私は躊躇した。『彼女が實際眠つて居るものとすれば、時として、神經の力の大きな消費の後では、激烈な倫理的爭鬪の中心にあつてすら、睡眠は假死のやうに重苦しく人間の上に落ちるものだ。あゝ、此睡眠が明日の朝まで續いて呉れたら、そして、其時再び爽快な心持に成つて、今は二人の間に避け難い會見に耐へるだけの十分な力を獲て起き上つて呉れたら！』彼女の蒼白い額を凝乎と見續けながら、私は又少し近寄つて覗き込んだ。そして、それが濕つて居ることに氣が附いた。大粒な汗が眉毛の上で顫へて居た。卽座にそれがあの麻醉性の毒の作用に伴ふ冷汗を私に暗示した。疑念が私の心中に閃いた――モルヒネ！本能的に私の眼は寢床の向側にある小さな寢臺用の卓子の上に飛んだ――世に知れ渡つた毒素の記號たる小さな黑い死の頭を其上に貼り附けた藥瓶を搜すとて。

卓子の上には、水壜と、洋盃と、燭臺と、半帛と、沈んだ灯影の中に光つて居る數本の髮針とがあつた。私は息の塞るやうな恐怖に捕はれながら、遽てゝ全凹間の中を檢査した。『ヂュリヤナは始終注射用として或分量の莫比劑を持つて居た。私は彼女が毒を服むと云ふ手段を選んだに違ひないと信じて居る。何處に其瓶を隱して置いたのか。』私の想像は層一層昂奮して來た。私は椅子の上に顫へて居た。そして、急速な討議が私の心中に行はれた。『彼女は最うそれを服んだのか。あの冷たい汗。それにして

も、何時――如何して？彼女は決して一人で居なかつた。が、小さい藥瓶の容量を頓服することは一瞬間もあれば澤山である。それから今し方、彼女が自宅へ着いて間もなく顫へ出したあの痙攣的な發作？前から自殺を計つて居たとすれば、恐らく彼女は身の周りにモルヒネを持つて廻つたに違ひない。彼女はラ・バディオラへ到着する前に馬車の中で、暗がりの中で、それを服用したんではなからうか。フェデリコが醫者を招びに行かうと言つた時も、彼女はそれを禁めた――』私はモルヒネの毒作用の症候に就いて多くを知らなかつた。が、其の不確な所からも、あの汗掻いた白い額と、ヂュリヤナの絶對にむんづら動きもしないこととは、怖ろしさに私を化石させた。私は將に彼女を搖つて見ようとした。――が、若し私が欺されて居たら？彼女が眼を開く。そして、私は、私は何と言つたら可いか。私には彼女の最初の言葉が、二人の交換する最初の一目が、私と彼女との間の最初の直接の交通が、先見することも豫想することも出來ないやうな猛烈な力で以て、異常な印象を私に與へるに違ひないと思はれた。私は自己を制御することも、自己を伴ることも能きないと、凝乎と彼女に見入られたら、迚も私の知つてることを隱し切れないと思はれた。

私は母が遺つて來はせぬかと心配すると同時に、それを望みもしながら耳を傾けた。それから――死人の顏から蔽ひを取るんだつても是程顫へはしなかつたらう――私は徐々と、極めて徐々と、ヂュリヤナの顏から夜具を引いた。

彼女は眼を開いた。

『あゝ、ツリヨ、貴方でしたか。』

彼女は極めて自然な物の言ひ方をした。

『お前は眠つて居たのかい』と、私は自分でも物の言へるのに驚きながら、そして、彼女の眼を避けるやうにしながら訊いた。

『えゝ、只今目が覺めた所なの。』

『ぢや、私が起したのだ――氣の毒なことをしたね――私は只お前の口から夜具を

除けて上げようとしたばかりだよ。好く呼吸が能きなからうと思つてね――夜具が口を塞いで――』

『えゝ、好くして下さいました。何うも暑くて、暑くて耐らないのよ。濟みませんが、上の夜具を一枚剝いで下さいませんか。』

私は立つて彼女の言ふ通りにした。だが、私は自分のして居たことに、私の口にした又耳にした言葉に――何事も起らなかつたやうに、ヂュリヤナも私も何一つ不安の原因を有つて居なかつたやうに、此の穏やかな凹間の中には姦通も、佯装も、悔恨も、嫉妬も、恐怖も、死も――あらゆる人間の苦悶が含まれて居ないかのやうに、極めて自然に行はれて居たそれ等の總ての事柄に關聯して、私の心の狀態を如何して此處に説明することが能きやうぞ！

『最う大分晩いでせうね？』と、彼女が訊いた。

『いや、未だ十二時前だよ。』

『阿母樣は最うお臥みに成りましたか。』

『未だだよ。』

一寸默つて居た後で、彼女は又言ひ出した。『で、貴方は――未だお臥みに成りませんか。貴方も隨分お勞れでせう――』

私は何と返辭をして可いか解らなかつた。此處に殘つて居ると言つたものであらうか――此處に居させて呉れと彼女に賴んだものであらうか――二人がヴィラリラに於けるあの室で安樂椅子に掛けて居た間に、私が話したやうな優しい言葉を繰り返したものであらうか。が、若し此處に殘つて居るとすれば、私は何んな風にして此夜を過したものであらう？彼女の寢床の側に坐つて番をしながら？私はそれをずつと續けることが能きるだらうか。終ひ迄外見を保つことが能きるであらうか。

『貴方は彼方へ行つて居て下さる方が好う御座んすよ、ツリヨ――今夜だけね』と、彼女は續けた。『私は最う休ませてさへ頂けば、他に何にも要らないんですもの。貴方

に居て頂けば――私は却つて好くないんですよ。貴方は彼方へ行つて下さる方が却つて好いんですよ――今晩だけね、ッリョ。』

『だが、お前は又何か欲しく成りやしないかい。』

『いえ、何にも要りませんの。加之、何か欲しく成れば、クリスチナが次の間に寢て居ますからね。』

『私は其處で毛布に包まつて長椅子の上に寢ても可いんだよ――』

『そんなに氣味の惡いのを我慢なさらなくッたつて可いぢやありませんか。貴方は大層疲れて被坐しやいますよ――貴方のお顏でも大概解りますわ。加之、貴方が其處に被坐しやると知つてれば、私は如何しても眠れないのよ。ッリョ、好い人だから私の言ふやうにして下さいな！明日の朝に成つたら直に來て私を御覽に成つても可いのよ。今は二人とも休まなきや不可ませんよ、二人とも――ぐつすりと好くね。』

彼女の聲は低く抱擁するやうであつた。少しも平常と違つた調子はない。私に此處を去れと言ひ張るのを外にしては、彼女の方に最後の決心を暗示するやうなものは一つもない。彼女は疲勞に壓倒されて居るやうに見えた。が、飽く迄穩やかである。睡たさに眼瞼が被さつて來るらしく、彼女は時々眼を閉いだ。私は如何したものだらう？彼女を一人殘して置くか。が、彼女の穩やかにして居ると云ふこと夫自體が私を不安心にした――斯樣な穩やかさと云ふものは目的の確乎として居ることからしか起らないものだ。私は一體如何したものだらう？萬事を考へ合せて見れば、私が終宵傍に居た處で何にも成るまい。彼女は用意もして居る、其手段も手許に持つて居るから、完全に企圖を遂行することが能きるのである。其手段と云ふのはモルヒネであらうか。だとすれば、其瓶を何處に隱して置いたらう？――枕の下か――寢室用の卓子の抽斗か。私は如何してそれの搜索に着手したものであらう？明らさまに『お前は自殺しようと考へて居るんだらう』と言つたとして？が、左樣したら何んな光景が其後に起るだらう？左樣言ひ出してから、餘の事を隱して置くことは不可能である。で、こ

れ等の混迷した、互に撞着するさまざまな考へが、私に殘された僅か許りの力を蕩盡して仕舞つた。私の神經はすつかり緩んだ。私の肉體的疲勞は刻々に增して行つた。私の全有機體は極端に薄弱な狀態に陷つて、あらゆる自發的機能が中止して仕舞つた。能動と反動とが何方も互に相一致しない、或は全然相會することを罷めた。私は抵抗する、努力する、若しくば何んな目的に對しても働き掛ける力を全然喪失したやうな氣がした。私自身が無能力であると云ふ、起りつゝある又は起らうとして居る總ての事が必然であつて、如何することも出來ないと云ふ感じが私を麻痺させて仕舞つた。私は此の最後の漠とした生きて居ると云ふ意識からも遁げ出したいやうな、盲目的欲望を感じた。そして、最後に、私のあらゆる感情は一つの絶望的な思想に併呑されて仕舞つた。『如何とも成らば成れ、俺も死ぬばかりだ！』

『左樣だ、ヂュリヤナ』と、私は言つた。『ぢやお前一人殘して置くよ。好くお臥みなさい。又明日の朝會はうね。』

『如何なすつたの、足が蹣跚して居るわね。』

『あゝ左樣だね、左樣なら、お就寢み！』

『お就寢みなら、行く前に接吻して下さらない、ツリヨ？』

本能的な嫌惡の戰慄が私の全身を貫いた。私は躊躇した。

其瞬間私の母が這入つて來た。

『なに、お前さんは起きて居たのかえ？』と、彼女は叫んだ。

『えゝ、今眠る所でしたの？』

『私は子供を見に行つて來たんですがね、ナタリヤは大きな眼を開いて起きて居ましたよ。あの娘は私の顏を見ると、直に『阿母さまは歸つてらしつて？』と訊くんだよ。それから阿母さまの許へ來たいと言ひ出してね——』

『何故あの娘を連れて來るやうにエディスに仰有つて下さいませんでした？エディスは最う就寢みましたか。』

『いゝえ、未だ。』

『左様なら、ヂュリヤナ』と、私は言葉を挾んだ。

私は傍へ寄つて、頭の上に俯向きながら、彼女が肘を突いて上半身を持上げるやうにしながら私に差出した頰に接吻した。

『左様なら、阿母さん、私は最う臥みますよ。睡くて倒れ相ですからね。』

『お前さんも何か喫らないのかい。フェデリコが階下で待つてるよ。』

『いえ、阿母さん、私は止します――左様なら！』

私は又彼女の頰の上に接吻した。そして、ヂュリヤナには一瞥も與れないで、其儘遽てゝ出て行つた。私は殘つた僅か許りの力を聚めながら、其室の閾を跨ぐや否や、自分の室へ達する前にぐら〳〵と立ち竦むのが怖ろしさに、廊下を駈けるやうにして走つて行つた。

劇しい心痛の結目が解ける時、緊張がだん〳〵緩み始める時、涙の爆發に先立つ戰慄に顚へ上りながら、私は寢床の上に身を投げ出した。が、何時迄も戰慄が續くばかりで、涙は出て來なかつた。私の苦痛は實際怖ろしいものがあつた。山のやうな重石が私を壓し碎すやうな氣がした――私の上に載かつて居るのではない、私の中にある重石である、恰も私の骨も筋肉も重い鉛に變つて仕舞ひでもしたやうに。然も私の頭腦はなほ考へ續けて居た、私の心はなほ眼を開いて居た。

いや、私は彼女を一人殘して來る處ではなかつた。私はあの室を去ることに同意する處ではなかつた。私の母が居なく成つたら、彼女は屹度自殺したに違ひない。彼女がナタリヤを見たいと言つた時のあの聲の響！幻覺は卽座に私を占領した。私の母があの室を去つたとする。ヂュリヤナは寢床の上に坐つて、凝乎と耳を傾ける。それから誰も居ないことを確めると、彼女は卓子の抽斗を開ける、モルヒネの瓶を取出す。斯う成つては一瞬の躊躇もあらう筈がない。彼女は思ひ切つた身振で以て瓶の藥を服み乾す。それから再び夜具の下に横はつて、待つて居る……死骸の幻影がまざ〳〵と

私の眼の前に現はれた。私は物に憑かれでもしたやうに寢床から跳ね起きて、室の中をぐる〳〵廻り出した。椅子や卓子に衝突かつて、よろ〳〵と絨氈の上に倒れた――狂人のやうな身振をしながら。

私は窓を開けた。夜は穩やかに森として居た。蛙は絶えず單調にがあ〳〵鳴き續けて居た。星は顫へて居た。私の眞正面に大熊星が輝いて居た。時は走り續けた。

私は少時の間此大きな星座を見詰めながら窓の側に立つて居た。私の搔き擾された視覺には、それがだん〳〵近づいて來るやうに見えた。何を私は待つて居たらう？私は知らない。私はすつかり混亂し、迷亂して居た。私がはつきりと認識することの能きたものは只大空の空虛なことだけであつた。不意に此の曖昧な停唱の中へ、或不明の力が私の內部意識の上に働き掛けでもしたやうに、其時迄全然解らずに居た例の質問が、『貴方は私を如何して呉れたんです？』といふ質問が落ちて來た。そして、稍消えがてに成つて居た死骸の幻影が二重の勢ひで以て戻つて來た。

私の恐怖は非常に大なるものがあつた。殆ど何をして居るかも知らないで、私は自分の室を飛び出した。そして、一瞬の躊躇もなくヂュリヤナの室へ自分の歩を向けた。廊下で私はエディス孃に會つた。

『何處から來たんだい、エディス孃？』と、私は訊いた。そして、彼女が私の容子を見て憫れたやうな顏をして居るのに氣が附いた。

『私はナタリヤさんを見たいと仰有いましたから、阿母樣のお室迄連れて參りました。ですが、如何しても自分の室へ歸らないと仰有いますから、仕樣事なしに彼處へ置いて參りましたのです。泣いて〳〵如何してもお諾きに成りませんから、阿母樣も到頭我を折つて此處に置いて行つても可いと仰有いましてね。あれで又マリヤさんもお目覺めに成らなきや可いがと思ひますよ――』

『あゝ、それぢやア――』私は口が利けなく成つた程心臟が烈しく動悸した。『あゝ、それぢやナタリヤは阿母さんの寢床の側に居るんだね。』

『左樣ですよ、旦那樣。』

『で、マリヤは……二人で行つてマリヤを見て遣らうよ。』

私は感情に息が塞るやうな氣がした。今夜だけは、少くともヂュリヤナは安全であつた！彼女が我兒を傍に置いて其晩の中に自殺を計らうなぞとは考へられない。それは問題外である。不思議にも、ナタリヤの子供らしい出來心が母親の命を救つて呉れた。神に謝す！神に謝す！

寢て居るマリヤを見る前に、私は最一つの小さな空虛の寢床を見遣つた。其處には小さな壓へ附けられた痕がなほ殘つて居た。私は其枕に接吻して、其の小さな身體に依つて殘された痕が未だ暖かか如何か觸つて見たいと云ふ妙な憧憬に襲はれた。が、エディスが其處に居たので、漸と思ひ止まつた。私はマリヤの方へ向いて、息を塡めて俯向くやうにしながら、長い間其寢顏を見詰めて居た——私に似寄つたさま〳〵な點を一つ〳〵檢べながら、額や、頰や、咽喉の上に出て居る微かな靜脈を殆ど數へる迄にしながら。彼女は枕の上に頭を反せながら横に成つて寢て居た。で、小さな咽喉が仰向けた頤の下から丸切見えて居た。米粒の樣に小さく揃つた齒が僅に開いた唇の間から光つて居た。母親に好う似た長い睫毛が頰の突先まで達くやうな陰影を投げて居た。何か尊い秀麗な花を見るやうな脆さが、極度の端麗が此兒の姿に表れて居た。私は其中に私の血が汚れずに流れて居ることを感ぜずには居られなかつた。

二人の小さな女の兒が生れて以來、何時私は是程深い、是程甘い、又是程悲しい感情を彼等に對して抱いたことがあらうか。

私は漸との思ひで此兒の寢姿から眼を離した。私は能きることなら二つの小さな寢床の間に腰掛けて、空虛の寢床の方へ頭を靠せながら、其儘夜明を待ちたかつた。

『左樣なら、エディス』と、私は其室を出ようとして言つた。私の聲は顫へて居た。

再び自分の室へ戻つた時、私は最一度寢床の上に身を投げ出した。そして、今度は聲を擧げて思ひ切り泣くことが能きた。

十三

其晩壓碎されたやうに成つて眠つた、あの鉛のやうな――殆ど獸的だと云つても可い――睡眠から眼を覺した時、私は起つた事件の集められた概念を獲るにも非常な勞力を要したものだ。

とは云へ、少しづゝ眞實が――冷たい、裸にされた、避け難い眞實が、前夜の撞着する昂奮に依つて謂はゞ突碎かれたやうな私の精神の前に現はれて來た。が、あらゆる私の最近の苦悶も、今私の心を充して居る絶望に較べては物の數でもなかつた！――私は生きて行かなければ成らない！何人かが私の前に深い洋盃を差出して、『若しお前が生きて行きたいと思ふなら、お前の心臟の中のあらゆる血を壓搾して此洋盃の中へ注ぎ込むが可い、最後の一滴までも！』と言つて居るやうな氣がした。何とも名狀することの能きない嫌惡の情が、嘔氣が、反感が、私の存在の奥底から湧き出して來

た。然も私は生きて行く外なかつた。此朝に成つても生の事實を其儘受け容れる外なかつた。何を措いても、私は先づ處置しなければ成らぬ！

私の實際の目覺め方と、昨日ヴィラリラで夢想し希望して居たそれとの間の對照が一層私の苦悶を增大した。『迚も私には能きない』と、私は一人で考へた。『斯んな物の狀態を平靜に受け容れるなぞと云ふことは、迚も能きない。私が起き上つて、着物を被て、此室を出て行つて、再びヂュリヤナに會つて平氣で物を言ふなぞと云ふことは迚も能きない。私が阿母さんの前に外見を續けて行くなぞと云ふことは、そして、ヂュリヤナとの最後の會見に對する好い機會を待ちながら、其會見に於て二人の將來の生活に對する條件を定めるなぞと云ふことは、考へるだけでも迚も耐らない。全然不可能に屬することだ。――それぢや、如何したら可いのだ？――私のあらゆる苦痛の完全にして卽座の破壞！私はあらゆる苦痛から遁れなければ成らぬ――私自身を解放しなければ成らぬ。其他には何にもない、何にも殘されない。そして、其事の容易さ

を默想しながら、急速の處置を、火器の音を、彈丸の卽座の効果を、それに續く暗黑を想像しながら、私は全身に亘る緊張を感じた――苦しい、而も安堵の、殆ど愉快の感の混つた緊張を感じた。其他には何にもない、何にも殘されない。おゝ、是以上何にも知らなくて濟むと云ふ樂しさ、あらゆる心痛も煩悶も搔き消されて、あらゆる事の終焉！

其時扉口を敲く音がして、弟の聲で叫喚くのが聞えた――

『阿兄さん、未だ起きないのですか。最う九時ですよ。這入つても可う御座んすか。』

『あゝ、お這入り、フェデリコ。』

『何時だか知つてますか』と、彼は扉を開けて這入りながら訊いた。『九時過ぎですよ。』

『昨夜晩くまで眠られなかつたんだよ、恐ろしく勞れちやつてね。』

『で、最う心持は好いんですか。』

『あゝ、最う好いんだ。』

『阿母さんも起きてますよ。嫂さんはすつかり快く成つたやうだと言つてお坐でしたよ。窓を開けて上げませうか。素張しく好い天氣ですせ。』

彼は窓の扉を開け放した。新鮮な空氣が室の中へ流れ込んだ。そして、帷幄が帆のやうに風を孕んで膨れながら、其間から蒼空の一端を視かせた。

『見えますか。』

晴れた朝の光は昨夜の懊惱が私の顏の上に殘した徵候を照し出したに違ひない。弟は思はず聲を擧げた。『如何したんです、阿兄さんも昨夜は餘程加減が惡かつたんですね？。』

『何うも勞れ過ぎて少し熱が出たやうだよ。』

フェデリコは朗かな正直さうな眼で私を見詰めて居た。其瞬間、私は將來に於けるあらゆる虛僞と胡魔化しの重苦しさを私の魂の上に感じたやうな氣がした。あゝ、

若し弟がそれを知つたら！

が、毎も左樣であるが、此日も弟の傍に居ると云ふことが、私を虜にしたあらゆる惡鬼を追ひ拂つて呉れた。昂奮劑を口にした後で感ずるやうな、一種の假作的精力が私に生氣を與へた。『弟が私の地位にあつたら如何するだらう？』と、私は思ひ廻した。私の過去、私の敎育、私の性質の眞髓其者が最初から此比較を妨げて居た。が、少くともこれだけは確實であつた——同じやうなものであれ、又は違つたものであれ、不幸な出來事に際會しても、彼は意志と品性の人として行動したに違ひない、勇敢に其不幸に面接したに違ひない。そして、何人を犠牲にするよりも、必ずや進んで彼自身を犠牲にしたに違ひない。

『一寸私に觸らせなさい』と、彼は私の傍へ近寄りながら言つた。そして、手掌で私の額に觸つて見た。それから私の手頸に指を置いて脈を取つて見た。『如何したんです、こりやァ不整な脈ですね。』

『最う起きるよ、フェデリコ、隨分晩いからね。』

『午後から私は河沿ひの森へ行く積りですがね。阿兄さんが行く氣なら、オルランドに鞍を置かせて置きますよ。あの林は記憶えて被坐しやるでせう？ 嫂さんが快くないのは眞個殘念ですね、一緒に連れて行つて上げたものを。炭燒小舍の仕事も見られますよ。』

デュリヤナの名を口にした時、彼の聲は一層愛情に充ちて、一層暖かく、殆ど眞の同胞と云つても可い位に成るやうに見えた。あゝ、若し彼がそれを知つたら！

『ぢや、左樣なら。ツリヨ。私は仕事に懸りますよ。何時から阿兄さんは私の手助けをして下さるんですかい。』

『今日からでも——明日——お前の好い時に。』

彼は笑つた。『隨分熱心ですね。まア見て居て上げますよ。左樣なら。』

そして、彼は確乎した、快活な步調で、日時計の上に彫られた格言、『時は恩寵深

きものなり』を實行しようと思ひ詰めながら出て行つた。

十四

私が室を出た時は十時であつた。明け放した窓や露臺から流れ込みながら、ラ・バチイオラの別莊に充溢して居た四月の日光の光焔が私を怖氣立たせた。斯んな隈なき光の下に、私は如何して假面を被つて居ることが能きやうぞ？

私は思ひ切つてヂュリヤナの室へ這入る前に、先づ母を搜しに行つた。

『隨分ゆつくりお臥みだつたね』と、彼女は言つた。『心持は何んなだえ？』

『大きに好う御座んす。』

『でも、顔色が好くないよ。』

『昨夜少し熱がしたやうですからね。ですが、最うすつかり好いんですよ。』

『最うヂュリヤナの許へお出でかい。』

『えゝ、未だ。』

『あの娘は起きようと云ふんだよ、お前。最うすつかり心持は快く成りましたなぞと言つてね。だが、あの娘の顔を見ると最う――』

『私はこれから行つて容子を見て來ますよ。』

『それからお前さんは一刻も早くお醫者樣へ手紙を書かなきや不可ませんよ。ヂュリヤナの言ふことは構はないで可いからね――今日中にお書きよ。』

『阿母さんは彼女にお言ひでしたか――私が聞いたと？』

『あゝ、お前さんにも話したと言ひましたよ。』

『私は行つて來ますよ、阿母さん。』

私は香菖蒲の根に香つて居る大きな麻布壓搾器の前で母と別れた。二人の女がカサ・エルミルの（エルミル家）矜りとも云ふべき眞白な麻布を其中に堆積して居た。マリヤはエディス嬢から洋琴のお稽古をして貰つて居るらしく、半諧音の音諧が一つ〳〵急

速に且つ平等に續いて居た。召使の中でも最も忠實な、頭が禿げて、老齢のために少し腰の曲つたピエトロが、老人の手の顫へるので、盆に載せた洋盃をがちや〳〵鳴らしながら、傍を通り過ぎた。私の周圍のあらゆる物は、此の空氣と光の滿潮の中に、嬉々とした平和の相貌を占めて居た。到る處に名狀し難い善良の感が――謂つて見れば、ラールとペネート（註曰、羅馬の神話にある竈の神）の微かな打消し難い微笑の或物が漲つて居た。

斯んな感情が是程深く私の心に浸透したことは嘗てなかつた。ヂュリヤナと私とが餘儀なく守らされて居るあの秘密、而も未だ死んで居ないあの卑陋な秘密を取卷くに、是程多くの平和と、是程多くの善良とを以てするとは！

『で、これから如何するのだ？』と、私は自分の脚が自分の意志の衝動に從ふことを拒みでもするやうに、あの怖ろしい室の方へ歩みを向けることが能きないで、道に迷つた旅人のやうに廊下を彷ひながら、一人で考へた。『これから如何するのだ？二人の間に胡魔化しは最う役に立たない。いよ〳〵二人が面と面と向き合はなければ成らぬ時が來た、二人が此の怖ろしい事件に就いて語り合はねば成らぬ時が來た。が、其決鬪は今朝起つては成らない、起ることは能きない。其結果は豫想を超えて居る。そして、今は前よりも一層二人の行動が私の母や弟は勿論、家内中の何人にも目立たないやうに、不可解と見えないやうにする必要がある。昨夜の私の昂奮や、心痛や、憂悶やは、悉くこれをヂュリヤナの狀態のあり得べき危險の考へに歸することが能きる。加之、他人の眼には、それからして一層私を彼女に親切な、優しい、注意深い良人と見えさせたに違ひない。此際、私は飽く迄慎重に振舞はなければ成らぬ。何んな事があらうとも、今日はヂュリヤナとの見苦しい諍ひを避けなければ成らぬ。私は彼女と二人だけに成るあらゆる場合を避けなければ成らぬ。一方に於て、私は直ちに彼女をして彼女に對する私の此態度を決定した所以の感情を、私の行動を導く計畫を了解せしむるやうな手段を講じなければ成らぬ。で、若し彼女が飽く迄自殺の決心を

翻さなかつたら如何しよう？若し彼女が自分の計畫の決行を數時間延ばしただけだとしたら、そして、好い機會を待つて居るだけだとしたら如何しよう？此の最後の考へが不意に私の躊躇に終りを置いて、私を行動に强ひた。私は拳骨で毆つて戰場へ逐ひ遣られる東方の兵卒のやうなものであつた。

私は音樂室へ這入つて行つた。マリヤは私の姿が眼に入るや否や、急に稽古を罷めて、自由に成つた嬉しさに、喜びの聲を揚げながら私の方へ駈けて來た。彼女は羽の生えた天使の嬌やかさと、敏捷と、輕さとを持つて居た。私は兩腕に抱き上げて、彼女に接吻した。

『何處かへ連れて行つて下さらない？』と、彼女は訊いた。『私最う飽き〳〵したの、エディスさんが何時迄も〳〵此處に引留めて置くんだものね。私最う可厭で耐らないの。何處かへ連れて行つて頂戴な！ Let us take a walk before breakfast. (一緒に朝飯前の散歩をしませうよ)。』

『何處へさ。』

『Where you please, it is the same to me. (阿父さまの好い所へ、私は何處だつて構はないのよ)。』

『だが、阿母さまの許へ行かうね。』

『あゝ、昨日は阿父さまも阿母さまもヴィラリラへ被往しつたのね、私達にお留守番をさせて置いて。如何しても連れて行かないと仰有つたのは、阿父さまでしたわね——阿母さまは好いと仰有るのに、可厭ァな阿父さま！ We should like to go there. Tell me how you amused yourselves. (私達も彼處へ行きたいわね。貴方方は何んな好い事して被坐しつたの、話して頂戴な)。』

此兒が自分の國のでない言葉で小鳥のやうに囀るのを聞いてるのは耳に快いものであつた。そして、二人が一緒にヂュリヤナの室へ行く道すがら、此の音樂的な囀りが私の心配に充ちた考へに流れるやうな伴奏を成して居た。私が躊躇して居たので、マ

リヤは『阿母さま！』と喚びながら、小さな拳で入口の扉を毆つた。

ヂュリヤナは私が居るとは夢にも知らないで、自分で其扉を開けた。彼女は私を見た時、幽靈か、さなくとも何か怖ろしいものでも見たやうに躍り上つた。

『貴方でしたか』と、彼女は殆ど聞えない位の低い聲で呟つた。そして、左樣言つてる間に、見る〳〵唇の色が白く成つた。怖ろしさに飛び上つた後で、彼女は急に石のやうに固く成つた。

二人は闖越しに互の顏を眺め合つた——凝乎と眺め入つた——そして、一瞬間互に相手の魂に迄見入つた。周圍のあらゆる物が消えて仕舞つた。此一瞬間に、二人の間にはあらゆる事が言はれた、あらゆる事が了解された、あらゆる事が決定された。

其後起つたことに就いては、私は委しく知らない、はつきりとは記憶えて居ないのだ。私は少時の間黑幕にでも閉ぢられたやうに、周圍に起つて居る一切の事物に對する意識の中斷したことを知つて居る。想ふに、或患者の場合に起り得るやうな意識の任意的抽出に何處やら似て居る一種の現象であつた。私の官能は晦まされた。私は起りつゝある何物をも見ることも聞くことも能きなかつた。言はれたことの意味をも把捉することが能きなかつた。それから少時して私の感覺が戻つて來た。私は周圍の事件と人物の上に注意を向けることが能きるやうに成つた、それ等の物を聰明に理解し檢査することが能きるやうに成つた。

ヂュリヤナは椅子に掛けて、ナタリヤを膝の上に載せて居た。私も腰掛けて居た。マリヤは一人から一人へ絶間なく駈け廻りながら、息を繼ぐ間もなく饒舌つたり、妹を調戯つたり、偶に點頭いて呉れる外に、何人も返辭もしないやうな、さま〴〵な質問を懸けたりして居た。私の聞いた斷片の中で、マリヤは妹に言つて居た——

『あゝ、ナタリヤさんは昨夜阿母さまと一緒に寢たのね、左樣ぢやないの？』

『えゝ、私は小さいから』と、ナタリヤは答へた。

『左樣。ぢやア今夜は私の番よ、好くつて？ ねえ阿母さま、可いでせう？ 今夜阿母

さまの寢床へ來ても好う御座んすか。』

ヂュリヤナは返辭もしなければ微笑もしなかつた。彼女は只考へに心を奪はれて居るやうに見えた。兩腕をナタリヤの腰の周りに廻して居たが、母親の胸に肩を靠せ懸けて居る其兒の膝の上で組んだ兩手が、それが載かつて居る子供の室内着よりも白く見えた。そして、其手だけでも悲哀と苦痛の世界を具現するかと思はれる程、痛々しげに痩せて、勞れ果てゝ居た。ナタリヤの頭は恰度母親の顎に達いて居た。そして、ヂュリヤナは自分の唇を其兒の捲髪の中に埋めて居た。で、一目ぢろりと彼女を見遣つた時、私は彼女の顏の下半部を見ることも能きなければ、又彼女の口の表情を見ることも能きなかつた。彼女の眼は決して私のそれと出會はなかつた。加之、私は彼女を見遣る毎に、伏目に成つた、稍赧味を帶んだ眼瞼を見た。そして、其度に心の底迄搔き亂された——それに蔽はれた瞳の凝視が眼瞼越しに輝いて居るやうな氣がして。

彼女は私の方から言ひ出すのを待つて居るのではなからうか。彼女の敢て口にし得ない言葉があの隱れた唇に始終上つて來て居るのではなからうか。

到頭、非常な努力で以て、私は此の無爲の狀態から私自身を引摺り出すことに成功した。無爲の狀態——其中では意識の異常な明晰と朦朧とが兩々相並んで居るのだ。そして、私は言つた。(想ふに、私の言葉は既に始まつて居た對話の續きであるやうな、既に言はれたことの添加的言葉であるやうな印象を與へたに違ひない。)私は低い聲で次の樣に言ひ出した——

『阿母さんはお醫者のヴェベスチ博士に手紙を出せと仰有るんだよ。私も左樣しますと約束して置いた。で、今日中に出さうと思つて居るがね。』

彼女は眼も上げなかつた、返辭もしなかつた。マリヤは無邪氣な子供心に吃驚して母親を見詰めて居た。それから私に眼を移した。

私は出て行かうとして立上つた。

『午後から私はフェデリコと一緒に河添ひの森へ行く積りだがね。歸つて來たら、

今晩又會はれるかね。』

彼女は矢張返辭もせずに靜乎として居たので、私は口にすることの能きないあらゆる意味を籠めた低い聲で再び繰り返した。『歸つて來たら、今晩又會ひに來ても可いかね。』

そして、ナタリヤの捲髪の中の唇が『えゝ』と吐息した。

十五

さまゞな互に撞着する動搖の烈しさの中に、悲しさの最初の爆發の中に、差迫つた危險の威嚇の下に、私はなほ最一人に就いて考へることを止めなかつた。そして又最初の瞬間から私の舊い疑念の正當に關して疑惑の影だも抱かなかつた。卽座に、私自身の心中では、最一人がフィリッポ・アルボリョの影像を取つて現はれた。そして、ヂュリヤナの寢室で私を襲つた嫉妬の最初の一擊から、彼の嘔氣を催すやうな影像がさまゞな忌はしい幻影の中で彼女のそれと絡ひ交せに成つて居た。

で、今私がフェデリコと一緒に曲り紆つた河――あの陰氣な土曜日の午後長い間見詰めて居た――に添うて、林の方へ馬上で行く間、最一人が始終私どもの後から隨いて來た。フィリッポ・アルボリョの姿が私の憎惡のためにまゞ〳〵と生氣づけられながら、私と弟との間に這ひ込んで來た。それを見ると、私は實在の感覺を、肉體的な嫌惡の情を、私が決鬪の場に臨んで攻擊の合圖を待ちながら敵手と相對して立つた時に時として經驗したやうな、一種の粗暴な心の戰きを感じたものだ。

眼の前に弟の居ると云ふことが私の苦痛を幾層倍にもした。フェデリコと比較すると、最一人の男の姿は――過度に精練された、神經質な、女々しい――憐れな程度に侏儒化された。厭はしい卑陋なものと私の眼に映つた。弟の例に依つて私の心に吹き込まれた力と男らしい單純との新しい理想の影響の下に、私は相手が私自身の系統に屬して居たにも係らず、又彼の文學的述作を見ても明白であるやうに、二人が一

種の知的特性を共通に有つて居たにも係らず、此の複雜で曖昧な人間を嫌つたばかりでなく、頭から輕蔑さへした。私は彼を彼の作品に表はれた人物に似た男として想像した――心の最も悲しむべき疾病に依つて影響された、いびつに成つた、虛僞に充ちた、殘酷に穿鑿好きな、解剖と故とらしい皮肉の習癖に依つて惡性にされた、最も熱烈な、最も自然な魂の働きを固陋な、融通の利かない概念に變ずることを絶えず仕事として居る、あらゆる人間を單に心理的思索の對照として觀察することに慣れた、他を愛することも能きなければ、寛大な行爲に出ることも、自己棄絶も、自己犧牲も爲し得ない、表裏反覆で固められた、淫佚な、皮肉な、卑陋な。

此男のためにヂュリャナは誘惑されたのだ――確に愛されたのではない。彼の用ひた術策は『秘密』の飛頁に書いてある題寄の辭に明かであつた。これこそ、私の知つて居る限りでは、此小說家と私の妻との間の過去の關係の唯一の記錄的證據物件であつた。彼に取つて、彼女は只肉感的情熱の目的物に外ならなかつたのだ。それだけは確かである。象牙の塔を圍んでそれを占領すると云ふことは、一般に墮落させられないものとして稱讃された女を墮落させると云ふことは、それ程希れに尊いものの上に自己の有する誘惑力を試驗すると云ふことは、隨分勞苦の多い企圖ではあるが、同時に又誰でも遣つて見たく成るやうな計畫でもある。そして又、あんな狡猾な藝術家に取つては、あの『加特力主義』や『アンヂェリカ・ドニ』を書いたやうな氣艱かしい心理學者に取つては、何の點から見ても應はしい計畫であつたに違ひない。

長く其事を考へて居れば居る程、事實は一層獸的な生の姿で私の前に現はれて來た。フィリッポ・アルボリョは必ずや永く且つ組織的な良人の無視に苦しめられて來た女が――何んなに所謂精神的な女であらうとも――一種の感傷的な憧憬、取留めもない欲望、漠とした詩的倦怠のために搔き擾される時期の一つに、ヂュリャナの上へ遣つて來たに違ひない。そして、それ等の憧憬や、欲望や、倦怠やは、實際に於て、一層低級な動物的情慾の自ら包む假面以上のものでもなければ以下のものでもないのであ

る。自分が覗ひを着けた女の特殊な心理狀態を推察することに長けた手練者として、アルボリヨは彼女を處理する最も有効にして確實な手段を採用した。卽ち一方では理想に關して、高い精神的目的に關して、神秘的な親和力や結合に關して議論を上下すると共に、一方では他の最つと肉的な神祕力を利用することを怠らなかつた。畢竟、頭と手とが此の微妙で錯雜した仕事を操る上に一致したのだ。そして、ヂュリヤナは——象牙の塔は、展性の强い金と精妙に鍛へられた鋼鐵とで出來上つた人間は、唯一最高の女性は——あの黴の生えた喜劇に彼女自身を委ねたのだ、昔からの係蹄に懸ることを自ら許したのだ、女の脆さと云ふ舊い平凡な法則に從つたのだ！そして、感傷的な會話は到頭耻づべき抱擁に終つたのだ。

私の魂は忌はしい嘲りの聲に裂かれた。私は腹の中に、それを喰つて死ぬ人間を笑はせながら殺すと云ふ、一種の毒草に依つて惹起された痙攣を感ずるやうな氣がした。私は馬に拍車を當てゝ、河添ひの土手に沿うて駈け出した。

土手は隨分危險であつた。所々極端に狹い箇所があるかと思へば、或點では地滑りのする恐れがあつた、又或點では大きな横に生びた樹々の枝のために邪魔されたり、巨大な木の根に地面を横切られたりして居た。私は自分自身を曝して居る危險を好く承知して居た。が、私は馬を引留めようとはしないで、却て一層速力を增させるやうにした。敢て死んで仕舞ひたいと云ふやうな心持を起した譯ではない、只此の危險な昂奮の中に私の耐へ難い苦痛から一時の休息を求めようとしたのだ。私は前に此種の無鐵砲の實効を體驗して居た。十年以前、私が大使館附としてコンスタンチノープルに滯在した時、月明の夜、或不幸な最近の戀愛事件の惱ましい想出から遁れたさに、私は石塔の隙間もなく立つて居る或回々教徒の墓場へ馬を乘入れた。幾度となく馬から振落されて粉碎される危險を冒しながら、私は半ば地の底へ沈み懸けた墓石の間を駈け廻つたものだ。

『ツリヨ、ツリヨ、停れ！』と、フェデリコは遠方から叫喚いた。『停れ！』

私は一つも彼に注意を拂はなかつた。一再ならず、私が木の枝に頭を打突けずに濟んだのはほんの奇蹟に過ぎなかつた。一再ならず、狹い小徑の上で、私は如何しても泡立つ下の河の中へ眞逆樣に落ち込む外ないと考へた。が、私の背後に最一匹の馬の轟きを聞いて、フェデリコが全速力で私の後を追掛けて來るのを見出した時、私は彼のために心配した。そして、急に烈しく馬の手綱を引緊めた。憐れな馬は後足で棒立ちに成つた。あはや水の中へ飛び込まうとでもするやうに、一瞬間棒立ちに成つて居た。それから又前脚を降して、四肢を顫はせながら靜かに立つた。私は恥かしさに度を失つた。

『貴方は氣でも狂つたのですか』と、フェデリコは死人のやうに眞蒼な顏をして私の傍へ近づいた時叫んだ。

『そんなに氣を揉ませたかね。御免なさいよ、私は全然危險だなぞとは思はなかつたんだからね。只一寸馬を試して見ようとしたんだが、其間に如何しても停められなく成つてね。何うも此馬は少し咬ひ着き氣味で御し憎いよ。』

『此馬が御し憎い――オルランドが？』

『お前は左樣思はんかい。』

彼は不安らしい面持で急に私の顏を見詰めた。私は努めて微笑しようとした。彼の蒼い顏が――彼としては異常なことである――私を悲しませ、私の心を動かした。

『如何して貴方があの樹の一つに頭を打突けずに濟んだか、又は如何して河の中へ落ち込まずに濟んだか、私は考へて見ても解らない位ですよ――』

『そして、お前は？』

私に追ひ着くために、彼は同じ危險若しくは一層烈しい危險を冒して居るのだ。彼の乘つてる馬が好くない處へ、私に追ひ着くために全速力で駈けさせなければ成らなかつたからだ。二人は自分達が踏破して來た道筋を振返つて見た。

『眞個奇蹟ですよ』と、彼は言つた。『アッソロの谿から安全に出て來られると云ふ

のは殆ど不可能と云つても可い位ですからね。阿兄さんはそれを知らないのですか。』

二人は下の陰慘な流れに見入つた。深く、油狀を呈して、急潭で、渦や人を騙すやうな暗流に充ちたアッソロの谿流は、それをして一層凄じく見えしむるに止まる沈默の中に、白堊のやうな兩岸の間を流れて居た。周圍の氣合も此の二心と威嚇の光景を反映して居た。午後の空は濛氣に蔽はれて、未だ春に觸れない赤褐色の叢林の上に、死んだやうに薄白い、勞れたやうな光を棚引かせて居た。枯葉は新芽と、萎んだ小枝は若い綠の枝と入れ交つて、死んだものと新しく生れたものとが密に編まれた一團まりに成つて居た。そして、澁面作つた流れの上にも、象徵的な對照を見せて居る矮林の上にも、空は薄白く勞れ果てたやうに懸つて居た。

『一度飛び込みさへしたら、あらゆる考へも、あらゆる苦惱もそれ迄だ。私は其上自分の不幸な肉の重荷を擔ぎ廻る必要がないのだ。が、左樣すれば、恐らく私の弟も自分と一緒に破滅の淵へ引込んだに違ひない——あの尊い生命の姿も、あの立派な男の子も共に。私は彼の救はれた同じ奇蹟に依つて救はれたのだ。私の愚は彼を生命の危險に曝した。そして、美にして善なるものの世界が彼と一緒に死滅したかも知れない。如何なる運命の鍵が私を愛する諸人の上にそんな不幸を齎すやうに私を逐ひ遣つたことであらう?』

私はフェデリコを見遣つた。彼は考へに沈んで、飽く迄眞面目に成つて居た。私は進んで彼に問を懸ける氣に成れなかつた。却て彼を悲しませたのを悔る念に壓倒されて居た。何を彼は考へて居るんだらう? 何んな思索が彼の不安を養んで居るのだらう? 恐らく彼は私が敢て白狀し切らない心の傷を隱して居ることを見拔いたのではあるまいか、固定觀念の拍車が私を驅つてあんな致命的な疾驅に赴かせたことを?

二人は一列に並んで、押默つたまゝ、川の土手に添うて進んだ。それから林の中の徑を分けて這入つた。それが可成廣い徑であつたので、二人は再び馬首を並べて進んだ。二疋の馬は鼻嵐を吹いたり、內密話でもして居るやうに首を並べたり、互に口の

泡を交へたりして居た。

時々私は偷むやうにフェデリコの方を見遣つた。彼は何時見ても同じやうに眞面目臭つた嚴しい顏をして居た。『若し私が此處で彼に眞實の事を打明けたら』と、私は一人で考へた。『彼は屹度私の言ふことを信じなからう。彼にはヂュリヤナの――自分の嫂の――墮落を信ずるやうな心持には成れないのだ。實際、私の母と彼とヂュリヤナに對する何方の愛情が深いか私にも解らないのだ。彼は始終卓子の上に死んだ妹の寫眞とヂュリヤナのそれとを同じ愛の憧憬から同じ寫眞立に二つ並べて懸けて居るではないか。今朝も彼が彼女のことを口にした時、何んなに彼の聲が優しかつたことぞ！』で、不意に、二人の對照から例の汚點が前よりも一層深く、一層憎むべきものに見えて來た。そして、一方にはあの狂人染みた疾驅の昂奮が猶私の血管の中に殘つて居たので、他人との粗暴な接觸に於て屢々私の中に目覺された家の血に傳はる戰鬪的な本能に依つて、私は地上の何物も私がフイリッポ・アルボリヨと決鬪の場で出會ふことを禁めることが能きないやうな氣がした。『俺は羅馬へ行つて彼奴を搜すんだ。そして、如何しても俺と決鬪せずには居られぬやうに彼奴を侮辱して遣るんだ。それから彼奴を殺して仕舞ふか、さもなければ一生不具にして遣るやうに全力を盡すんだ。』

私は彼を臆病だと判斷した。私は擊劍教習所で始めて彼と出會つた時、彼が師範から眞當面に胸を衝かれてさも醜しい態度を見せたことを記憶えて居た。私は又私の仕合に對する彼の好奇心を想ひ出した。未だ嘗て危險に面したことのない人間の有つて居るやうな、ぽかんと眼を開けた子供らしい好奇心であつた。私は又自分が擊劍を使つてる間、彼が眼を離さずに凝乎と私を見詰めて居たことを想ひ出した。自分の優越の感が、相手に勝つことが能きるといふ確さが、私の精神を輕くした。幻影のやうに、私は彼の生ッ白い可厭な肉體の上に赤い血がぽた〳〵と滴るのを見た。往日私が他の人間と對抗した時經驗した實際の感覺の斷片が、今私の喜んで組立てようとして居る想像の光景の委曲を充す補けに成つた。そして、私は遠い牧場の中で彼が血を流しな

から身動きもしないで擔架の上に横はつて居るのを見た。其間、二人の外科醫が眉を顰めながら屈んで彼の姿に見入つて居る。

幾度私は――世紀末の詭辯家であるとは云へ、理想主義たる私は――カール五世の目の前にゴレッタであの勇敢で猛烈な勳功を立てたペネドーのライモンド・エルミルの後裔であることを自ら祝いだか知れない！私の性質の知的方面の過度の發展も、私の感情の移り易いことも私の存在の根柢を、私が先祖から承け繼いだあらゆる習癖の刻印されて居る隱れた地盤を變改することは能きなかつた。平衡の取れた私の弟に在つては、思想は常に行爲を伴つて居た。私に於ては思想が勢力を占めて居た。と云つて、行爲に對する私の能力が減された譯ではないから、時々それが非常に猛烈な勢ひで表に現はれて來た。實際、私は意識的に猛烈で情熱的な男であつた。斯かる人間に在つては、心の正則な活動を保つに必要な協同作用と云ふことが、腦の或中樞の滋養過多に依つて不可能にされて居るのである。自己解剖に於ては極めて澄明でありながら、私は又原始的で不羈な性質のあらゆる衝動を有つて居た。私は是迄も一再ならず不意な犯罪的誘惑に襲はれたものだ、一再ならず殘忍な本能の自發的叛亂に脅かされたものだ。

『彼處に炭燒夫どもが居ますよ』と、弟は馬に一鞭呉れながら言つた。

斧の音が林の中から聞えて來た。そして、私どもは樹々の間に立ち昇る煙の螺線塔を見ることが能きた。炭燒の殖民團が忝しく私どもを迎へた。フェデリコは仕事の進行に關して人夫どもに訊ねた。彼等に助言もすれば、忠言も與へた。熟れた眼で炭燒竈の檢査もした。彼等は忝謙な態度で彼の言葉に耳を傾けた。仕事は急に一層容易に、一層快活に、一層誠意を籠めてされるやうに成つた。火も一層赫々と燃え出した。人夫どもは彼方此方駈け廻つて、煙が餘りに濃く出る所へ土を投げ入れたり、熱のために罅割れた裂目へは土塊を塡めたりした。竈番どもの粗い聲と混りながら、咽喉から出る叫喚き聲が木伐人足から聞えて來た。森の奥から倒れる木の低い鳴動が聞

えて來た。其合間々々に鶫が鳴いた。そして、大きな森林がそれの生命に依つて養まれた火を默つて見卸して居た。

仕事の監督を續けて居る弟を其儘殘して置いて、私は自分の前に幾筋も向うへ延びて居る道の何れとも馬の選ぶが儘に任せながら、何處ともなく彷ひ行つた。いろんな音は私の後ろにだん〳〵微かに成つて、反響も消えて仕舞つた。深い沈默が高い樹の下を支配した。『何等かの決心に來るためには、俺は如何したら可いか』と、私は考へた。『明日の私の生活は、又其後の生活は如何成るんだ？私は母の家で此秘密を抱きながら何時迄生活を續けられるだらうか。私の生活をフェデリコのそれに適應させることが果して能きる事だらうか。此の廣い世界に誰が、又何物が信仰の火花なりとも私の魂の中に再燃させて呉れることが能きるだらうか。』人間の勞働の最後の徵かな響まで罷んだ。私を取卷く沈默は十分であつた。『働け、善を爲せ、そして、他人のために生活せよ——私は今なほこれ等の言葉の中に生活の眞の意義を發見することが能きるだらうか。何日ぞや、私の弟が此問題に就いて話して居た時、私は彼の言葉を理解し得たと思つた。私は眞理の敎義が彼の口から私に啓示されたんだとも信じた。彼に從へば、眞理の敎義は律法や箴言の中に存するのではない、單に又專ら人間が自分の生活に與へる意義の中に存するのである。私はそれを理解したやうに思つた。そして、今や又暗黑の裡に投げ返されて仕舞つた。私は再び盲目に成つた。私は何一つ理解しない。此の廣い世界に於ける誰が、又何物が私の失つたものを償つて呉れることが能きるだらう？』末來は只怖ろしい、希望のないものに見えた。これから生れやうとして居る人間の漠とした影像がだん〳〵生長して、吾々が時として夢魔の中で見る怖ろしい不恰好な物のやうに擴がつて行つた。そして、私の視覺の全野を占領した。斯う成つては最早後悔も、悔恨も、消し難い記憶も、何れだけ重い精神上の負擔と雖も問題ではない、只一個の生ける存在が問題なのである。私の未來は柔靭で惡性の生命の滲み込んだ一個の人間と結び着けられて仕舞つた。他人と、闖入者と、一個の憎

むべき人間と鎖で結び着けられて仕舞つた――其人間に對しては私の精神ばかりでない、私の肉體が、血の一滴々々が、身體の纖維の一筋々々が獸的な、烈しい、宥和し難い憎惡を死に到る迄、いや、死の彼方迄も感じなければ止まないのである。『誰が精神と肉體と兩つながらに對するこれよりも怖ろしい苛責を想像することが能きるか。數多ある暴君の中の最も白地に殘忍な者でもよもや是程非人間的な反語を發明することは爲し得まい。それを能くする者はひとり運命のみである。ヂュリャナが彼樣した祕密を胸に包んで居る間に、私は、憐れな馬鹿よ、夢を見て辛抱したり、理想に渴を癒したりして居た。少年時代の無邪氣な感情に還つては、花を聚める以外に何事も爲し得なかつた。（おゝ、あの花、あんな子供らしい臆病からおづ〳〵捧げられた、あの厭はしい花！）そして、あんな感傷的な法悅の一幕があつた後で、私はあの嬉しい消息を受取つた――誰の手から――現在の母の手から！そして、其後で私は寛大な昂奮の下に、誠心誠意、一つの高尙な役割を引受けた、オクターブ・フウリエー（佛蘭西の

作家、一八二二――一八九〇）の描いた人物の一人のやうに默つて私自身を犠牲にして、最一度遁げ出したいやうな欲望が私を摑んだ。『妙だ！』と、私は不思議な戰慄を感じながら考へた。私は此時迄馬が勝手に打捨つて置かれて、河へ導く小徑へ這入り込んだことを氣附かずに居た。で、殆どアッソロの流れが私を引戻したとも見えるのだ。

一瞬間私は河の方へ進んで行かうか、それとも此處から引還さうかと惑ひながら立ち停つた。が、私は水と不吉な考へとの誘惑を振落した。そして、馬を返した。

壓潰されるやうな倦怠の感が內部の爭鬪に繼いで私の上に落ちて來た。私の魂は急に憐れな、搗き碎かれたやうな、萎縮したものと成つて仕舞つたやうな氣がした。私は私自身に對する、ヂュリャナに對する、悲しみが其烙印を捺したあらゆる人間に

對する、敗けた者が勝利者の寛假せざる手の下に顫へるやうに、生活の手暴い把握の下に顫へて居るあらゆる人間に對する憐憫の情に溶けて行つた。『一體我々は何であるか。何を知るか。何を願ふか。何人も嘗て自分の愛するものを獲なかつた、これからと雖も獲なからう。我々は善を求める、德を求める、靈感を求める、我々の全精神を充すやうな情熱を、我々の不安を鎭めるやうな信仰を、我々が全力を擧げて衞るやうな理想を、我々が喜んで死ぬことの能きるやうな事件を求めて居る。而も總てこれ等の努力の結果は空しい疲勞である、浪費され力と失はれた時間との感覺である……』そして、此瞬間生活は私に取つて迫かな、混亂した、茫漠として單調な幻影のやうに見えた。狂氣、白痴、貧乏、盲目、あらゆる疾病とあらゆる災難。我々の存在の最內部に於ける自覺されない、原始的な、獸的な、力の絕えざる動搖。始終肉體的條件に左右せられて居る精神の最高にして一時的な、變り易い示顯。目にも立たないやうな瑣末な原因から惹起される卽座の變容。最も高尙な行爲の中にも這入り込んで居る

避け難い利己主義。不確かな目的に向けられた多くの道德的精力の浪費。永遠だと信じられて居た愛の賴み難なさ、こればかりは變らないと思はれて居た德操の脆さ、最も健全な筈の意志の弱さ——人類のあらゆる汚辱とあらゆる不幸とが、其瞬間私の前に立ち昇つた。如何して我々は生きて行くことが能きるか。『如何して我々は愛することが能きるか。』

木を打つ斧の音が林の中に反響した。其都度短い、皺嗄れた叫びがそれに伴つた。此處彼處拓いた空地に圓錐形や四角な金字塔形に積んだ大きな木の堆積が煙の柱を上げて居た。煙は木の幹のやうに眞直に濃く靜かな空へ立ち昇つて居た。

私は馬を一番近い木の堆積へ向けた。そして、其處にフェデリコの姿を見附けた。彼は馬を降りて、綺麗に鬚を剃つた身丈の高い老人と話をして居た。

『あゝ、到頭歸つて被入しやいましたね』と、彼は私が乘込んだ時聲を懸けた。『又迷兒に成つてお仕舞ひぢやないかと心配してましたよ。』

『いや、別に遠方へ行つた譯ではないんだよ。』

『此處にヂョヴンニ・ディ・スコルヂョが居ますよ、立派な人物です』と、彼は老人の肩に手を載せながら言つた。

私は其男を見遣つた。不思議に優しい微笑が皺の寄つた其口の上に現はれた。私は嘗て人間の額の下に斯んな悲しげな眼を見たことがない。

『左樣なら、ヂョヴンニ、勇氣が肝心だよ』と、私の弟は時として、火酒のやうに、人の精力を高上させる力のある聲で附け加へた。『最うそろ〳〵ラ・パディオラへ歸らなくちや成りませんよ。大分晩く成つたから、衆皆私どもを待ち遠しがつて居るでせうよ。』

彼は其老人に別れの挨拶をしながら再び馬に乘つた。二人は馬首を並べて其處を出發した。最初竈の傍を通るとて、彼は今夜の仕事に關して人足どもに最後の命令を與へたものだ。

空はだん〳〵二人の頭の上に開けて來た。泛べる霧の幕は散るかと思へば、又閉じた。で、蒼空は絶えず薄白く成つたり、又は輝き渡つたりした。恰度昨日ヴィラリラでヂュリヤナと私とが理想の國のやうな光に蔽はれた庭園を見卸して居た時刻に近かつた。森は一刷毛づゝ金色に染められ出した。鳥は枝の中で人には見えず鳴いて居た。

『阿兄さんはあの老爺を、ヂョヴンニ・ディ・スコルヂョを好く御覽なすつたかい』と、フェデリコは間もなく訊いた。

『あゝ』と、私は答へた。『あの眼とあの微笑とは何時迄も忘られ相にないね。』

『あの男は聖者ですよ』と、フェデリコは續けて言つた。『何人もあの男程好く働いたり、苦しんだりした者はありませんよ。子供が十四人もありましたがね、熟んだ果物が木から落ちるやうに、一人々々親爺を捨てゝ出て行つて仕舞つたんです。主婦さんと云ふのが又恐ろしく喧ましい女でしたが、其奴は死にました。今ぢやあの男一人限りですよ。子供達はあの男の持つてる物を何も彼も剝いで取つた揚句、あの男一人

抛り出したんでさ。罰當りと云はうか、恩知らずと云はうか、ありたけの事を仕盡したんですね。それも見ず知らずの他人が爲るんぢやない、血や肉を分けた子供の非道を靜乎と悚へて居るんだから耐りませんよ、解りますかい。あの男が始終可愛がつて助けて來た人間どもの中で、あの男自身の血が毒に變つたんです。それでも、あの男は矢張其奴等を愛して居るんですよ。其奴等を呪つて遣らうなぞとは考へたこともありますまい。で、若し其奴等があの男を一人で打捨つて置いて死なせたとしても、臨終の時にや屹度其奴等を祝福して遣るでせうよ。人間にあれ迄にして變らない善があると云ふことは、眞個不思議だ、殆ど信じられないぢやありませんか。あれだけ苦しんで來た後で、未だ阿兄さんの御覽に成つたやうな、彼樣いふ微笑を有つて居るんですからね。ッリョ、あの微笑を忘れないのは、眞個貴方のためにも好う御座いますよ――』

十六

審問の時が、あれ程待ち焦れた、而も恐れて居た時が間近に迫つて來た。ヂュリヤナは覺悟をして居た。彼女は斷乎としてマリヤの出來心を斥けた、私を待ちながら一人自分の室に殘つて居た。

私は何と彼女に言つたものか。彼女は又私に何と言ふであらう？ 私は彼女に對して何んな態度を取つたものであらう？ 前から考へて置いたあらゆる計畫も、あらゆる考へも消えて仕舞つた。そして、耐へ難い心痛の外何一つ私に殘らなかつた。誰が此會見の結果を豫想することが能きやうか。私はすつかり去勢されたやうな氣がした――私は最早自分の行爲の主人でもなければ、言葉の主人でもない。私は只少し觸つても沸き立つやうな、曖昧で矛盾した感情の驀進を意識して居た。私は嘗て此時程明瞭に、絶望的に、私を苦しめる內的分裂の意識を、あらゆる統御に反抗しながら、永遠の鬪

爭に於て爭つて居る、角力つて居る私の性質の融和しない諸要素の意識を有つたことがない。左樣した私の精神の動搖に、一日中絶間なく、私を苦しめて居たあの影像から生せしめられた感能の特殊な昂奮が加はつて居た。人間の有つて居る最も下等な、最も汚ならしい感覺を搔き擾す力のある此昂奮の感情を、私は餘りに好く知つて居た。何物もそれに抵抗する力のない此の貪慾な欲望を、一箇月間あの憎むべく擯斥すべき女の、テレザ・ラッフォーの兩腕の中に私を抑留して置いたあの怖ろしい感能の熱病を、私は餘りに好く知つて居た。そして、ヂュリャナと面接する際には、私の眞面目に考へて置いた計畫を實行するためには、私に取つて是非とも必要な、同情だの、憐憫だの、精神の力だのと云ふ感情は、今や只到る處に陰鬱な水溜りだの、ともすれば壞れ易い陷穿だのゝ隱れて居る沼地の上に立ち迷ふ靄のやうに、力なく動くに過ぎなかつた。

私がヂュリャナの許へ行かうとして自分の室を出た時は、夜半に間もない頃であつた。あらゆる物音が罷んだ。ラ・バディオラは深い沈默の中に沈んで居た。私は耳を欹てた。そして、私は夜の靜けさを通して私の母の、弟の、小さい娘どもの——純潔で邪念のない人々の——穩やかな寢息を聞くやうな氣がした。前の夜眠つて居るマリヤの顏を見たと同じやうに、再びそれが私の眼の前に現はれた。其他の人々の顏も亦私の前に現はれた。そして、私は各自の顏の上に平和と休息と善良との表情を見た。私の心は不意に涙含ましい優しさに溶けて行つた。昨日私が一瞬間其影を捕へた、そして間もなく消えた幸福が、再び非常な光彩を帶びて私の幻影の中に閃いた。若し何事も起らなかつたら、私があの儘無知と瞞着との中に殘つて居たら、今宵は何といふ樂しい夜であつたらう！私は神聖な喜びへでも行くやうにヂュリャナの許へ行つたに違ひない。又私の愛の昂奮を取卷く此沈默よりも甘く娛しいものが他にあらうか。

私は昨宵母の口からあの思ひ懸けない啓示を受取つた室を通り過ぎた。あの時あの時間を知せて吳れた時計の刻む音も聞いた。そして、如何いふ理由か知らないが、時

計の規則正しく刻む音が私の苦痛を一層大きくした。如何いふ理由だか知らないが、私はなほ二人の間を距てゝ居る空間を通して、私の昂奮に優るとも劣らないヂュリヤナのそれを感ずることが能きるやうな氣がした。そして、だん〳〵近づくに伴れて、同じ加速度で高まつて行く二人の心臟の鼓動を手に取るやうに感じたものだ。私は扉を敲かないで、其儘直にそれを開けた。そして、這入つて行つた。ヂュリヤナは其處に居た。片手を卓子の端に懸けたまゝ、身動きもしないで、石のやうに硬く成つて、私の前に突立つて居た。

私は今なほそれを悉く目の前に見ることが能きる。それ以來、何一つ私の記憶から逸したものはない。何一つぼんやりして來たものもない。實在の世界はすつかり消え失せた。二人の自我の外に何一つ殘つて居なかつた。二人とも息を塞めたまゝ、一語も言ひ出すことが能きない。而も私は、私だけは芝居の舞臺でも見て居るやうな、妙に澄明な頭に成つて居た。此舞臺の効果に一際趣きを添へながら、一本の蠟燭が卓子の上に燃えて居た。其の搖々する炎は、俳優の一人が戲曲の中の絶望若しくは威嚇の素張しい身振をした後で、空中に漂ふやうな漠とした恐怖の感を四邊に放散して居るやうに見えた。

最後に、此沈默とヂュリヤナの石像のやうな不動の姿とに耐へられなく成つて、私が言葉を發した時、漸と此の不思議な印象が破られた。私の聲は私の期待したとは全然變つて居た。心にもなく低い顫へ聲に成つて、殆どおづ〳〵して居た。

『お前は私を待つて居たんだね？』

『えゝ』と、彼女は眼を伏せたまゝ答へた。

彼女の腕も、卓子の端に載せて居た手も、木彫のやうに硬く成つて居た。そして、私は彼女が全身の重みを托して居る其の脆い支柱が刻々に崩折れて、其儘床の上に伏し沈みはしないかと、そればかり恐れて居た。

『ぢや、私の來た理由も知つて居るんだね？』と、私は一つ〳〵言葉を胸の中から

引摺り出しながら、飽く迄緩々と續けた。

彼女は返辭をしなかつた。

『あれは眞實だね』と、私は續けて言つた。『あれは眞實だね――私が阿母さんから聞いたことは？』

矢張返辭はない。彼女はあらゆる力を聚めて居るやうに見えた。此場に臨んでも、私が彼女の『否』と答へることを絶對的に不可能と迄考へて居なかつたのは、不思議と云ふ外ない。

到頭返辭があつた。私はそれを聞いたと云ふよりは、寧ろ彼女の白く成つた唇の上に其言葉が形作られたのを見たと云つた方が可い。――『眞實です。』

私は信ずる、其打撃は私がそれを母の口から受けた時よりも、一層大きな力で以て私の上に落ちて來た。私は悉くそれを知つて居た。私は過ぐる二十四時間の間それの確實な知識を持つて生きて來た。然も此の明白で精密な確認は、恰も此の動かし難い眞實が其時始めて私に打明けられでもしたやうに、私を打倒した。

『眞實ですと！』と、私は本能的にそれを大きな聲で私自身に語りながら、そして、生きながらはつきりした意識を持して深淵の底に落ち込んで居たら、そんな氣持がするだらうと思はれるやうな、一種の感覺に襲はれながら繰り返した。

ヂュリヤナは眼を上げて、一種の痙攣的な努力をして私の眼を見据ゑた。『ツリヨ』と、彼女は言つた。『私の言ふことを聽いて下さい。』

彼女は喘ぐやうにした。彼女の聲は咽喉で塞つたやうに見えた。

『聽いて下さい――私は自分の爲べきことを知つてます。私は今の此の思ひを貴方にさせないためには、何んな事でも爲ようと決心して居ました。併し運命は左樣させて呉れない、私は如何しても今の此時迄生き延びて、一番怖ろしいことを、私が狂氣のやうに恐れて居たことを堪へ忍ばねば成りませんでした。あゝ、貴方も解つて下さるでせう――私は死ぬよりも何千倍それを恐れて居たか知れない。ツリヨ、ツリヨ、

貴方から見下げ果てた奴と思はれるのは――』

彼女は息を塞らせた。殆どそれ儘に窒息するかとも思はれた。彼女の聲は聞いて居る方で胸の奥の繊維が斷ち切れるやうな肉體的感覺を持つ程に張り切つて居た。私は卓子の傍の椅子に腰を卸して、兩手に頭を抱へたまゝ、相手が後を續けるのを待つて居た。

『私は斯う成る前に死なねば成らんのでした。ずつと前に死ななくつちや成らんのです！何んな事があつても此處へ來なかつた方が――貴方がヴェニスからお歸宅に成つた時最う此世に居なかつた方が、何の位好かつたかも知れない。あの時私が死んでさへ居れば、貴方も斯んな可厭な事は何にも御存じなくて濟んだのでせう。貴方は私を哀しんでも下さいましたらう、恐らくは永久に崇拜しても下さいましたらう。昨日仰有いましたやうに、私は永遠に貴方の大きな、唯一の戀人に成り濟しても居られたでせう。私は死を恐れたんぢやない――それは貴方も御存じでせう――今でもそれを恐れては居ません。ですが、子供達のことや阿母樣のことを思ふと、つい氣後れがして一日々々と延ばして來たので御座います。そりやア眞個生死の鬪ひでした、ツリヨ、長い、超人的な生死の鬪ひでした。其間に私は一つどころぢやない、千も萬も生命を消費しました。それでも未だ私は生きて居るんです！』

彼女は一瞬間言葉を途切らした。そして、又後を續けた。『私のやうな斯んなやくざな身體をして居て、如何してそんな苦しみに堪へて行かれるだけの力があるんでせうね？私の不幸は其處迄私を追懸けて來るんですよ。もし、私は貴方と一緒に此處へ參ることを承知しました時も、斯んな風に考へて居たんですよ。「だん〳〵病氣は惡く成るに違ひないから、彼處へ行つたら直に寢床に就いて仕舞ひませう。そしたら二度と起上ることはあるまい。私は病氣のために天然自然に死んだやうに見えるだらう。貴方は何にも御存じあるまい、何一つ疑ぐられることもあるまい。萬事がそれでお終ひに成るのだ――」で、左樣成るどころか、私は今も斯うして起きて居る、貴方はすつか

り御承知に成る。何も彼も失はれた、取返しの附かないやうに成つて仕舞つた。』

彼女の聲は極めて低く且つ躊らひ勝ちであつた。而も私には耳を劈くやうな鋭い聲よりも、一層小刻みに斬り苛まれるやうに聞えた。私は額に手を當てがつて見た。そして、顳顬の邊りが烈しく脈打つて居るのに、思はず退避いだ。私の掌の下に動脈が露出しにでも成つて居るやうな氣がしたのだ。

『唯一つの私の願ひは貴方に眞實の事を知せたくないと云ふことでした――それも私自身のためではない、貴方のために、貴方の心の平和のために。私が始終何んな恐怖に脅かされて居たか、何んな煩悶を通つて來たか、迚も貴方にはお解りに成りますまい。此處へ着いてから昨日迄と云ふもの、貴方は希望を有つて被坐した、夢を見て被坐した、比較的幸福な日を送つて被坐した。ですが、私は始終阿母樣を傍に置いて、此平和な家の中で、何んな生活を送つて居たと想つて下さいます！昨日ヴィラリラで、私の心を搔き拐るやうな甘い事を澤山仰有つた中に、「お前は何にも知らない、何にも氣が附かずに居た――」といふお言葉がありましたね。あゝ、それは違つて居ます！私は悉皆知つて居た、何も彼も察して居ました。そして、貴方の眼の中に優しいお心を讀み〳〵した時、私は却て落膽したやうな心持がして居た。聽いて下さい、ツリヨ。私は眞實の事を話して居るんです、眞實の事ばかりを。私は此處に、貴方の前に、死んで行く女として立つて居ます――死んで行く私に嘘はない筈です。何卒私の言ふことを信じて下さいまし――私は決して自分を辯護しようとか、罪を免れようとか云ふ考へはないのですから。今は萬事が終りました。ですが、一つだけ貴方に申上げたいことが御座います。そして、それは眞實の話です。お目に懸つた最初の日から私が何の位貴方を愛して居たかと云ふことは、貴方も御存じで御座いませう。長の年月の間私は盲目的に貴方に身を捧げて來ました。私の幸福な年月ばかりでない、貴方の愛の冷めた不幸な年月の間も矢張左樣でした。貴方もそれは知つて被坐しやいませう、ツリヨ。貴方は始終御自分のお所好なやうに私を扱ふことが能きました。私は

何時でも貴方のお友達にも、妹にも、奥様にも、戀人にも成りました――貴方のお望みなら何んな犧牲でも拂はうと覺悟して居りました。ですが、ッリヨ、私が斯んな事を言つて貴方を責めるために長い間の私の心盡しを並べ立てゝ居るんだなぞとは、夢にも思つて下さいますな――左樣ぢやない、決して左樣ぢやない。私の胸には貴方に對する苦い心持なぞ藥にしたくもない、好う御座んすか――えゝ、一滴たりとも。只私の心盡しと情愛とを言はせて下さいまし、一度でも中斷されたことのない、少しの間でも止んだことのない私の愛を話させて下さいまし、好う御座んすか――決して止んだことのない私の愛を。そして、最近の數週間程貴方に對する私の情熱が昂まつて居たことはありませんの。昨日貴方はいろんな事を私に仰有いましたがね。あゝ、此の數日の間私が送つて居た生活を貴方にお話することが能きたら！私は悉皆知つて居た。何も彼も察して居ました――それで居て、私は貴方の前に冷やかな振をして居なければ成りませんでした。私が貴方の胸に身を投げ懸けて、眼を瞑つたまゝ、貴方のお所好なやうにして頂かうかと思つたことも、一度や二度では御座いません。それ程私は左樣いふ心持を抑へるのに勞れて、弱く成つて居ました。何日かの朝、あの土曜日の朝でした、貴方が花束を持つて私の部屋へ這入つて被入した時、私は貴方を見ました、貴方の顏は私が昔から好く知つて居るお顏でした――あんなに光のある眼をした、晴やかで、親切で、絶えず微笑して居るお顏でした。で、貴方がお手の引搔き傷をお見せに成つた時、私は突如貴方の手を掴んでそれに接吻したいやうな、遣瀨のない衝動に襲はれました。其時自分で自分を抑制する力を私に與へて呉れたものは何でしたらう？私は自分がそれに値しないことを感じたからでした。そして、私は閃光のやうに貴方が花束と一緒に私の前に捧げて被坐しやるあらゆる喜びと幸福を見て取つたのでした――私が永遠に斥けなければ成らぬあらゆる喜びと幸福を。あゝ、ッリヨ、そんな壓迫に抵抗しながら破裂もせずに居たとすれば、私の心臟も餘程强いんですね！私の生命は何處かしぶとい所があるんですよ。』

彼女は最後の文句を反語と憤怒との中間の何とも名狀し難い調子で發音した。私は顏を上げて彼女を見ることを敢てしなかつた。彼女の言葉は私に耐へ難い苦痛を與へた。然も私は彼女が言葉を切つた時、ぶる〳〵顫へて居た。私は彼女の力が急に盡きて、後を續けられなく成りやしないかと、それを恐れて居た。そして、私は彼女の口から最つと他の懺悔を、彼女の魂の生活の最つと他の告白を待つて居た。

『貴方がヴェニスからお歸りに成る前に死なゝかつたのは』と、彼女は續けた。『私の誤りでした、大きな誤りでした。ですが、あの可哀相な小さい娘ども――あれ等を捨てゝ如何して行かれませう？』

彼女は一瞬間躊つた。

『それから貴方も、貴方を殘して行くことも私には辛かつた――貴方は屹度私のために後悔なさいませう。世間は貴方を惡く言ひますよ。世間は兎に角、阿母樣には如何したつて隱して置く譯に參りませんからね。阿母樣は屹度私が如何して死ぬ程の理由があつたかお訊ねに成るでせう。左樣すりや、二人が今日迄秘し隱しにあの方から隱して來たこともすつかり打明ける外ありますまい。あゝ、お氣の毒な聖者よ。』

彼女の聲は堰き留められた涙に塞つて、だん〳〵微かに、だん〳〵顫へて來た。私の咽喉にも同じやうな團塊がぐつと閂へて居た。

『私はそれを考へました。それから又貴方が私を此處へ連れて來ようとお言ひ出しに成つた時、私は最う阿母樣に値しないものに、あの方の接吻に値しないものに、あの方から娘よと喚ばれる値打のないものに成つたことを痛切に感じました。私は未來に何等の希望も有つて居ません。死より外に遁れる道のないことも能く存じて居ます。一日々々私の頸玉に着いた繩が緊つて行くことも知つて居るんです。それで居て、私は一日々々と無駄に日を送つて居ました。間違ひなく死ねる手段も手近に持つて居ながら、如何しても最後の決心が着き兼ねて居ました。』

彼女は言葉を切つた。不意の衝動に驅られて、私は眼を擧げた。そして、凝乎と彼

女を眺め遣つた。彼女はがた〳〵と身を顫はせ出した。私の凝視に依つて、彼女の上に課せられた苛責はまざ〳〵と目に見えた。で、私は再び頭を垂れて、元の姿勢に復した。

此間彼女は始終立つて居たが、其時漸と下に腰掛けた。

沈默の合間があつた。

『貴方はお考へに成るの？』と、彼女は到頭痛ましいやうなおづ〳〵しさで以て訊いた。『魂がそれに一致しなかつた場合でも、過失は同じやうに大きなものだとお考へに成るの？』

過失と云ふ言葉を口にしたことが、今迄鎮まつて居た私の胸の奥の暗い淵を再び搔擾すに十分であつた。苦い膽汁のやうなものが私の口頭まで込み上げて來た。殆ど心にもなく私は彼女に皮肉を浴せた。

『可哀相に！』と、私は半ば皮肉な微笑を泛べながら言つた。

私が卽座に鋭い悔恨の念に襲はれた程痛ましい苦悶の表情がヂュリヤナの顏に表はれた。私はこれ以上殘酷に彼女を傷けることが能きないのを悟つた。そして、此瞬間、是程柔順な、服從的な女に對して、そんな反語と云ふやうな武器を用ひるのは、卑劣の中でも最も卑劣な仕業であることを悟つた。

『宥して下さい』と、彼女は死ぬ程打たれた女のやうな眼附をしながら言つた。（實際、私には自分が時として傷いた獸に見たことのある優しげな、悲しげな、殆ど子供らしい表情を彼女の眼に見たやうに思はれた。）――『宥して下さい。貴方は昨日魂の話をなさいましたわね……屹度貴方は今「そんな事は悉皆女が自分の罪を宥されようと思ふ時に言ふこッた」とお考へに成つたに違ひない。ですが、私は決して自分の罪を宥して頂かうとしたんでは御座いません。貴方にして見りや私を宥すことも忘れることも能きないと云ふことは好く承知して居ます。それから遁れる道は一つもないと云ふことも知つて居ます――ねえ、聽いて下さいましたか。私は只貴方の阿母樣か

ら默つて受けた接吻に對して宥して頂かうと思つただけですよ……』

彼女の聲は層一層低く弱々しげに成つて行つた。然も私の耳には耳を劈くやうな鋭い聲よりも一層痛ましく響いた。

『私の額には悲しみの重荷が懸つて居ます。私のためではない、ツリヨ、其の悲しみのためばかりに、私は貴方の阿母樣の接吻を額に受けたのです。で、私自身はあの方の接吻に値しないとしても、其悲しみは値して居るんです——貴方は私を宥して下さるでせうね。』

私は同情と憐憫の衝動に襲はれた。が、私はそれに服從することが能きなかつた。私は成るたけ彼女の顏を見まいと思つた。が、私の眼はあの怖ろしい事實の證據でも發見しようとするやうに、知らず識らず彼女の身體を搜し廻つた。私は苛々しい痙攣に落ちないために、何か知ら狂人染みた行爲に出ないために、懸命の努力を盡さなければ成らなかつた。

『私は一日々々と計畫の實行を延ばして居ました。それが此家の人々に何を意味するかと考へると、私は如何しても氣後れがしました。斯うして眞實の事を隱し遂げる希望は、貴方に知らせないで置かれる希望は 悉く消えて仕舞ひました。此處へ着いてから幾日と經たない間に、阿母樣が私の身體の容子を覺つてお仕舞ひなすつたんですものね。貴方も記憶えて被坐しやいませう、あの日窓の側で私がハイヤシンスの香を嗅いで昏倒しさうに成つたことを？ あの時の私の恐怖を想像して下さいませ！ 斯う成つては私は自殺することも能きない、私が死んだら貴方は阿母樣から眞實の事を聞きに成るでせうからね。一體、私の犯した過失の結果は何處迄伸びるんで御座いませう！ 晝も夜も、如何かして貴方に知らせないで置かれる術はないかと、私は頭腦を搔き拐つた。土曜日に、貴方が來週の火曜日にヴィラリラへ行かないかとお訊ねに成つた時も、私は破れかぶれで運命に身を任せながら、機會ばかりを信賴しながら、深く考へても見ないで承知をしたのでした。私はそれが私の此世に生きて居る最後の日

だと思ひ詰めました。左様した考へが私を昂奮させたのです。一種の狂氣のやうに私の上に働いたのです。あゝ、ッリヨ、昨日貴方が私に仰有つて下すつたことを考へて見て下さい。そして、其上で私の心の中の苦しみが何んなであつたかお解りに成つたら言つて見て下さい――ねえ、貴方にもお解りに成りますか。』

苦し紛れの此質問で私の魂の底まで貫かうとでもするやうに、彼女は斯う言ひながら前へ乗出して來た。

『貴方が是迄あんな風に私に仰有つて下すつたことは一度もありませんでした』と、彼女は組合せた手を堅く握り詰めながら、續いて言つた。『私も貴方のお聲にあんな風な調子を聞いたことは一度もありませんでした。あの舊い石の腰掛の上で、貴方が『恐らく最う晩いんだね？』とお訊ねに成つた時、私は竊と貴方のお顔を見た。そして、慄然として仕舞ひました。えゝ、最う晩う御座んすと、私に返辭が成りませうか。一擊の下に貴方の心臓を打碎くやうなことが私に能きませうか。そんな事をしたら、二人は如何成りましたでせう。加之、私は法悦の最後の瞬間に一身を投げ出したかつたのでした、私は狂人でした。私は自分の死と情熱的な愛との外に何物も見なかつたのでした。』

彼女の聲は妙に皺嗄れて來た。私は今や彼女を見詰めて居た。そして、殆ど彼女が彼女であることを認めなかつた。それ程彼女は變つて仕舞つて居た。顔の筋が痙攣つて、下唇が烈しく顫へて居た。眼は熱病のやうな光に燃えて居た。

『私が昨日あんな事をしたからとて』と、彼女はざら〳〵した苦い聲で訊いた。『貴方は私を責めますか、私を輕蔑しますか。』

彼女は兩手で顔を隠した。それから一寸言葉を切つた後で、何とも云はれない困憊と、情熱と、恐怖の調子で以て――彼女の胸の何んな底の方から出て來るか解らないやうな聲音で以て、彼女は附け加へた。『私が昨宵毒を服むことを躊躇したのは、只それが爲でしたよ――貴方に依つて私の血の中に殘されたものを掻き擾したくない爲ば

かりでしたよ。』

彼女の手は膝の上に落ちた。彼女は斷乎と弱い心を振り落した。次の言葉を口にした時、再び聢かりした聲に成つて居た。『私が此時迄生き延びたのも運命の仕業で御座いませう。運命は阿母樣のお口から眞實の事を貴方に知らせました――貴方の阿母樣のお口からですよ。昨夜此處へ被入した時、貴方は悉皆御存じでした。そして、默つて被坐しやいました。そして、阿母樣の前で、私の差出した頰に接吻して下さいました。何卒死ぬ前に一度貴方のお手に接吻させて下さいまし――私は最う其上お願ひすることは御座いません。私は貴方のお言葉通りにしようと思つて、今迄此處に貴方を待つて居ました。貴方の仰有ることなら、何んな事でも從ふ覺悟で居ります――何卒仰有つて下さい。』

『お前は生きて居なければ不可ないよ。』私の返辭は斯うであつた。

『いえ、それは能きません、ツリヨ、そればッかりは能きません！』と、彼女は叫喚いた。『私が生きて居たら何んな事に成るか、貴方はお考へに成つたんですか。』

『左樣だ、それも考へて見た。だが、お前は矢張生きて居なくちや不可ないよ。』

『あゝ、怖ろしいこと！』

彼女は、疑ひもなく、自分の身内に保つて居る最一つの生命に對して、さも嫌惡の情に堪へないやうな、本能的な動作をしながら烈しく身顫ひした。

『お聽きなさい、ツリヨ、貴方は最う何も彼も御存じです、私の自殺は最う貴方に私の耻を隱す役には立ちません。貴方は何も彼も御存じです、それで居て私は貴方の前に立つて居ます、お互に顏を見合つて居ることも能できます！問題は最うすつかり違つて來ました。私は最う自殺するために貴方のお眼を避けようとするやうな考へは持つて居ません。それ所か、私は此家の人々に少しも疑念を抱かせないやうな、最も自然な方法でそれを實行するために、貴方に手傳つて頂きたいと思つて居ます。私は二種の毒藥を持つてます――モルヒネと昇汞水とです。

が、二つとも役には立ちますまい。毒を服んで死んだことを隱すのは容易でないでせうからね。私の死は何處迄も自發的でないやうに、偶然の出來事の結果のやうに見えなくちや成らんのですよ。解りまして？左樣してこそ、二人の目的は達せられるのです――永遠に二人の間の祕密として殘りますよ。』

此時は最う彼女も落着いた表情で、口早に話して居た――今更死の約束するのでもなければ、馬鹿げた計畫を實行するために私を强ひて共犯者に成らせようとするのでもない、寧ろ一つの有益な實行的計畫に加はらせようとして私を勸說して居るやうな態度である。私は其儘彼女に後を續けさせた。一種の符呪が私を其場に縛り着けて仕舞つた。そして、相手の顏を見詰めたまゝ、此の脆弱な、血の氣のない、病に搦まれた、而も强烈な道德的意識のために感奮した女の言葉に耳を傾けさせた。

『お聽きなさい、ツリヨ。私に一つ考へがあるんです。フェデリコは今日の貴方の向う見ずを、今日貴方が河添ひの土手で爲すつた冒險を、委しく私に話して呉れました。そして、私は怖ろしさに身顫ひしながら考へました、何んな悲しみの衝動がそんな風に自分の生命を危くするやうな道へ貴方を逐ひ遣つたことだらうと。そして、私は繰返してそれを考へながら、貴方のお心持がすつかり解つたやうな氣がしました。電光のやうにはつきりと私の前に見えたのですよ。私の魂は又幻影のやうに貴方の未來の苦しみ迄見ました。何人も除いて差上げることの能きない苦しみです、日に日に增して行つて、日に〳〵耐へ難く成つて行く苦しみです。あゝ、ツリヨ、貴方は最う屹度それを豫想なすつたに違ひない。そして、迚も耐へられないとお考へに成つたに違ひない。ですけれども、此處に唯一つ貴方を、私を、二人を、二人の愛を救ふ道がありますよ――左樣、何卒二人の愛だと言はせて下さいまし。何卒今も昨日の貴方のお言葉を信じさせて下さいまし、そして、私は今嘗て貴方を愛したことがない程愛して居ると繰り返させて下さいまし。そして、私が今死なねば成らぬと云ふのも、貴方が再び私を見ては成らないと云ふのもそれが爲ですよ、それが爲に外ならないので

すよ。』

彼女の聲に響いて居た、其瞬間彼女の全身から輝くやうに見えた道徳的向上は、眞個素張しいものがあつた。戰慄が頭の頂邊から足の爪先迄私を貫いた。一時的な幻影が私の精神を占領した。一瞬間、私は實際私の愛と此女の愛とが測り知られぬ程の理想的な高さに高められて、人間の災禍も達かなければ、罪惡のためにも汚れない、初期の純潔を取戻したやうに空想したものだ。が、勿論避け難い反動がそれに續いた。そんな意識狀態は私を見捨てた。私は最早それを知らなかつた。

『私の言ふことを聽いて下さいまし』と、彼女は話聲の漏れるのを恐れでもするやうに聲を低めながら續けた。『私はフェデリコにそんな林だの、炭燒夫だの、其他あの方のお話しに成つたいろんな場所を是非見たいものだと云ふやうな話をして置きました。處が、明日の朝あの方は又カサル・カルドーレに行かなければ成らない相ですから、私達と一緒に被入しやる譯には行かないのよ。私達は二人だけで出懸けませう。

フェデリコは私がファヴィラに乘つて行つても可いと仰有いました。二人が河添ひの土手へ出た時、私は貴方が今朝爲すつたやうなことを致しますよ。左樣すりや、何んな事でも起りますよ。フェデリコは一度アッソロの流れへ落ちたら助かりッこはないと仰有いましたよ。貴方はそれを承知して下さるでせうね？』

彼女の言葉には終始一貫した脈絡があつたけれども、彼女は一種の熱病の影響の下にあるやうに見えた。消耗性の紅潮が彼女の頰の上に表はれた。彼女の眼は妙な光を帶びて居た。

陰慘な河の幻影が急速に私の眼の前を過ぎた。

彼女は再び私の方へ乘出して來た。『貴方はそれを承知して下さるでせうね？』

私は椅子から立上つて、彼女の兩手を執つた。私は彼女の熱に泛かされたやうな昂奮を鎭めようとした。苦痛と無限の憐憫との高潮が私の上に押寄せて來た。私の聲は優しく親切で、感情に顫へて居た。

『ヂュリヤナや！そんなに自分で昂奮するもんぢやないよ。お前は餘りに多く心を苦しめた。悲しみと煩ひとがお前の頭の蝶番を滅茶々々にして仕舞つたんだよ、ねえ。勇氣を出さなくちや不可ない、飽く迄勇敢に事に當らなくつちや。最うそんな事は一切考へないが可いよ——そして、只子供達のことだけ考へて居るが可い。私は甘んじて此刑罰を受ける覺悟をした。眞個、私はお前に加へたあらゆる凌辱に對しても、それ位の罰は受けるだけの値打があるからね。私は最う覺悟をした、甘んじてそれに耐へるよ。だが、お前は飽く迄生きて居なくちや不可ない。ヂュリヤナや、屹度約束をおしよ、マリヤやナタリヤのために、お前が阿母さんに對して有つて居る愛のために、昨日私がお前に言つたことのためにもだよ——何んな事があつても死ぬやうな氣は出さないと約束してお呉れよ。』

彼女は頭を垂れたまゝ默つて居た。それから不意に私に執られた手を離しながら、私の手を掴んでそれに接吻し出した。私は手の皮膚の上に彼女の唇の暖かみを、彼女の涙の暖かみを感じた。私は其手を引込めようとした。が、彼女は私の手に絶り着いたまゝ、掛けて居た椅子から滑り落ちて私の前に跪いた。そして、嗚咽しながら、口の端の痙攣に魂を搾木に懸けるやうな何とも言はれない苦痛を見せながら、涙に濡れた顔に凝乎と私を見上げた。私は彼女を立たせることも能きなければ、物を言ふことも能きなかつた。感情の驀進に息を塞らせられて、此の痛ましい口許の痙攣に壓倒せられて、あらゆる憤怒もあらゆる矜持もすつかり奪ひ取られて仕舞つた。生命の盲目的な恐怖の外に何物も感じなかつた。私は私と私の前に倒れて居る女との中に人間の苦痛の外、人類の永遠の不幸の外、避け難い犯行に對する呪ひの外、肉の重荷の外、我々の存在の根柢に深く彫られて居る宿命の恐怖の外、我々の愛の肉體的な悲哀の外何物も見なかつた。そして、私は自分も亦倒れ伏したいと云ふ、此の苦しみ悶えて居る、又私をも彼女と共に苦しみ悶えるやうにした此の不幸な女と同じ平面に成りたいと云ふ本能的な衝動から、其場に膝を突いて倒れて仕舞つた。私も亦聲を擧げて

泣き出した。そして、再び私達は久し振で二人の涙を交へることが能きた。其涙は燒けるやうに熱かつた。あゝ、それも二人の運命を變ずるには何の力もないのである！

十七

無益な涙を流した後で、効果のない絶望の發作の後で、それに附隨して起る乾いた荒寥と痴呆の感を如何して言葉に移されやうか。それは全然不可能であると云つて可い。涙は分秒の間に過ぎ行く表現の形式である。あらゆる危機は過ぎるもの、あらゆる過剰は必然的に短いものである。そして、其後では自分ながらげつそりして、謂はぼ乾き切つたやうな氣がして、前よりも一層自分の無力をまざ〳〵と感じさせられて、如何ともし難い實在の前に啞然として、落膽して立つものである。

私は先づ泣くことを止めた。そして、ヂュリヤナと私自身との態度の意識を、二人の周圍の意識を取返した。二人は未だ膝を突いたまゝで居た。ヂュリヤナは未だぶるぶる身を顫はせて獣欲り上げて居た。蠟燭の炎は時々風にでも吹かれるやうに横に流れながら、卓子の上に燃えて居た。森とした室の中に、何處からかチクタクと刻む時計の音が微かに聞えて來た。生命は絶えず流れて居た。時は飛んで居た、私の魂は空洞として孤獨であつた。

二人の烈しい感情が過ぎた時、一度二人の悲しみの醉ひが醒めた時、私達の態度は最早何の意味もなかつた、其の存在の理由を失つた。私は起上らなくちや成らない、ヂュリヤナも立たせなくちや成らない、何とか彼女に言はなければ成らない、如何かして此一場に幕を卸さなければ成らない。が、私は妙に何をするのも可厭な氣がした。私は肉體的にも精神的にも、極めて僅かな努力にも堪へられないやうな氣がした。斯んな狀態にあると云ふことが、何んな事でも起るが儘にして置かなければ成らない、それを變ずるだけの力がないので、成るが儘に成つて居る外ないと云ふことが、私を苛々させた。私は再びヂュリヤナに對して一種の鈍い憤怒の情を起した。

私は蹶くと立上つた。そして、ヂュリヤナにも同じやうにさせた。時々彼女から漏れる嗚咽が其度に私の據所のない憤怒を増して行つた。

して見れば、二人の人間を結び着ける、即ち二つの利己主義を近寄らせる感情の底にも、常に或憎惡の種が隱されて居ると云ふのは眞實であらうか。そして、此の避け難い憎惡の種が我々の最も優しい法悅をも、最も善い衝動をも腐らせて仕舞ふと云ふのは眞實であらうか。我々の魂の最も美はしいものも其中に隱れたる腐敗の種を藏して居る。そして、それは如何したつて頽廢せねば止まぬものである。

『落着かなけりや不可ないよ、ヂュリヤナ』と、私は言つた。（そして、私は其聲が慳貪に響きはしないかと心竊かに恐れたものだ。）『お前は今やお前のあらゆる力を必要とする狀態にあるんだ。さア此處へ來てお掛けなさい。少許水でも飲んぢやァ如何だね？氣附嗅藥でも取つて來て上げようか。何でも言つて御覽よ。』

『それぢやァ何卒少許お水を、凹間の中の小卓の上に御座いますから。』

彼女の聲は未だ涙に顫へて居た。そして、彼女は大きな姿見鏡の前の低い長椅子に腰掛けながら、半帛で顏を拭いて居た。彼女の嗚咽は未だすつかり止んで居なかつた。

私は洋盃の水を取りに凹間へ這入つて行つた。薄明りの中に最う寢床の用意が出來て、被蒲團の隅の折返されて居るのが見えた。長い白の寢衣は枕の傍にたぐねてあつた。

私の鋭敏な嗅覺は直に白の麻布から出る微かな香を捕へた。昔から好く知つて居る菫と香菖蒲の香である。此寢床と熟れた香水の匂が私の官能を動かした。私は急いで水を洋盃に注いで、遁げるやうに凹間を出た。

彼女は長い間かゝつて二口許り飲んだ。其間私は彼女の前に立つて、凝乎と唇の動く容子を見て居た。

『有難う、ツリヨ』と、彼女は言つた。そして、半ば飲み差しの洋盃を私に返した。私も咽喉が乾いて居たので、其儘ぐいと殘餘の水を飲んで仕舞つた。一寸した此の豫

想しない行爲が少なからず私の狼狽を增した。私は少し彼女から離れて長椅子の上に腰掛けた。二人ながら自分々々の思ひに沈んで、二人ながら默つて居た。

長椅子と二人の姿とが正面の鏡の中に映されて居た。互に顏を見合せないでも、二人は相手の顏を見ることが能きた——蠟燭の灯が薄暗く且つ絕えず搖めくので、ぼんやりとしか見えないけれども。私はヂュリヤナの姿を見詰めたまゝ、凝乎と朧げな鏡の底に見入つて居た。左樣して居る間に、ヂュリヤナの姿はだん〳〵神祕めいた外貌を、時代のためにぼやけた女の肖像の裏寂しげな魅力を、幻覺から生れた人物の假作的な生命を帶びるやうに成つた。そして、だん〳〵此の遠い影像が實際の女よりも一層生きて居るやうに私には見えて來た。だん〳〵私は其影像の中に男を魅する肉感的な女を、情婦を、不誠實な女を見るやうに成つた。

私は眼を閉ぢた。最一人の男が私の眼の前に現はれた。

『先刻から』と、私は心の中で考へた。『此女は未だ一度も直接には自分の墮落に、墮落した事情に言ひ及ぼさない。只一言意味のありさうな事と云つては、「貴方は魂がそれに一致しなかつた場合でも、過失は同じやうに大きなものだとお考へに成るの？」と言つたばかりだ。が、それはほんの言葉に過ぎない！そして、此女はそれに依つて何を言はうとしたのだらう？單にそりやァ何んな犯罪でも、何んな破廉恥な行爲でも、それを辨解したり、又は酌量して貰はうとする場合には、何時でも用ひられる極めて微細な區別に過ぎないぢやないか。これを要するに、此女とフイリッポ・アルボリョとの間には、あの拒むにも拒まれない肉の關係の外に、何んな關係が成立して居たのだらう？そして、何んな事情の下に此女は男に身を許したのか。』私は烈しい好奇心に襲はれた。暗示は私自身の經驗から幾許でも提供された。さま〳〵な影像が作られるかと思へば、變化した。後から〳〵急速に且つはつきりと繼起した。私はずつと以前に見たことのあるヂュリヤナを見た。一人開け放した窓の側で、膝の上に一冊の書物を載せながら、精も根も勞れ果てたやうな眞蒼な顏をして、今にも氣を失ひさうな容

子をして居る。それで居て、彼女の大きく瞳いた眼の中には、無理矢理抑へ附けられた或物から生ずるやうな、何とも名狀することの能きない昂奮が泳いで居る。斯う云つた倦怠の發作の最中に、彼女は私の家の中であの男から襲撃されたのではないか。そして、一種の無意識の間に手込めに遭つたのではないか。目が覺めて見ると、彼女は恐怖と嫌惡の情に壓倒されて仕舞つた。そして、相手の男を逐出したまゝ、斷じて再び會はないのではないか——又私は十一月のあの朝姿見鏡の前に立つて居る彼女を見た、彼女が面紗を結び着けようとして居た時の嬌やかな態度を見た、彼女の着物の色を見た、下の『街の日光の當つた側』の鋪道の上に彼女の輕い足音を聞いた。あの朝彼女は男と密會するために出懸けたのではないか。

私は名附け樣のない苦悶に惱んだ。總てを知りたいと云ふ渴望が私の魂を搔き拐つた。私の肉體的想像は迚も怺へ切れない程私を苦しめた。私のヂュリヤナに對する憤懣は層一層烈しく成つた。それに伴れて、私の嫉妬もいよ〳〵毒々しく成つて來た。

私は自分が或厭はしい衝動から免れる唯一の道は此場を遁げ出す外ないと迄感じた。而も私の意志は麻痺したやうに見えた。私は私の行爲の主人ではなかつた。私は二つの撞着する力——拒斥と牽引と、二つとも純粹に肉體的な力——に引留められて、其儘其處に腰掛けて居た。

最一人の男は一たび現はれて以來執拗に私の前に留まつて居た。眞個、それはフィリッポ・アルボリヨであつたのか。私の推察は正しく中つて居るのか。私は間違つてやしないのか。

私は不意にヂュリヤナの方へ振向いた。彼女は私を見詰めて居た。そして、私の將に訊ねようとした質問は私の咽喉に塞つて仕舞つた。私は眼を床に落して、頭を垂れた。が、少時して又自分の身體から生きながら肉の一片を裂いて取るやうな、同じ痙攣性の努力で以て、私は次の樣に訊いた——

『で、其男の名前は？』

私の聲は顫へて嗄れて居た。それが私の癪に觸つた。

此の想ひ懸けない質問に、ヂュリャナは思はず飛び上つた。が、返辭はしなかつた。

『返辭をしないのか』と、私はむら〳〵として來る肝癪を無理に抑へながら、押して訊いた。前の夜、凹間の中で、何も彼も枯して通る一陣の風のやうに、私の魂の上を掃いて通つたあの盲目的な憤怒の情である。

『おゝ、神樣！』と、彼女は發狂したやうに呻いた。そして、座褥に顏を隱しながら、長椅子の上に突伏して仕舞つた。『おゝ神樣、神樣！。』

が、私は飽く迄知らうと決心した。何んな事があつても彼女から告白を捻ぢ取らうと決心した。

『お前は記憶えて居るね』と、私は續けて言つた。『あの朝早く、左樣だ、十一月の朝だ、不意にお前の部屋へ這入つて行つたことを記憶えて居るね。えゝ、如何だい？私は何故這入つて行つたか知らない——多分お前が唄つて居たからだらうよ。お前は確かオルフォイスの一節を唄つて居た。お前が何處かへ出懸けようとして居た時よ。私はお前の寫字檯の上に一冊の書物を見附けた。それを開けて見ると、飛頁の上に題寄の辭があつた。それは小說だつたよ、『秘密』——記憶えて居るね？』

彼女は座褥の中に身動きもしないで横はつて居た、物も言はなかつた。私は彼女の上に俯向いて行つた。私は熱病の發作の前のやうに顫へて居た。

『あの男かい』と、私は囁いた。

彼女は返辭をしなかつた。が、不意に絕望的な努力で以て、むつくり顏を擡げた。彼女は正氣を失つたやうに見えた。一度私の上へ身を投げ懸けて來るやうな風を見せたが、其儘又退き込んだ。

『堪忍して下さい！堪忍して！』と、彼女は突走るやうに口を切つた。『私を死なして下さい！貴方が今私に加へてお坐に成る苛責は死ぬより何の位辛いか知れない。私はあらゆる事に堪へて來た——これからも堪へませう——ですが、そればッかりは、

そればッかりは。私が生きて居れば、一時間々々々が二人に取つて殉教者の苦しみです。それが毎日々々怖ろしく成つて行くばかりですよ。そして、貴方は私をお憎しみに成りませう、貴方のあらゆる憎しみが私の上に注がれるんですよ。私はそれを知つてます、知つてます。最う貴方のお聲にそれが出て居ます。少しは私を可哀相と思つて下さい！そして、左樣成る前に、何卒私を死なして下さい！』

彼女はすつかり氣が狂つたやうに見えた。彼女は私に取縋りたいと云ふ狂氣染みた衝動に驅られて居て、而もそれを敢てしなかつた。そして、私に手を觸れまいと、可哀相に兩手を握り合せたり離したりしながら坐つて居た。其間烈しい戰慄が頭の頂邊から足の爪先迄絶えず貫いて居るのである。

私は兩手に彼女を摑んで引寄せた。『ぢや、私は永久に何にも知らないで居るんだね？』と、自分も相手の通りに半分狂人染みながら、咬ひ縛つた齒の間から言つた。殘忍の本能に驅られて、女の腕を摑んで居る私の拳は思はず力が入つた。

『私は貴方を愛して居ます、始終貴方を愛して來ました——始終貴方の所有でした、貴方一人の所有でした只一度心の緩るんだあの一瞬間のために、私は斯んなに苦しんで居るんです——お聞きでしたか——只の一瞬間ですよ。これだけは嘘僞りのない眞實です。貴方もそれを眞實だと思つて下さいますか。』

彼女は座褥の上に仰向けに倒れて仕舞つた。私の唇は彼女の泣聲を窒息させた。

十八

確に犯罪の最初の考へが私の心に泛んだのは其時であつた。

私は再びヂュリヤナのあの苦い言葉を想ひ出した、『私の生命は何處かしぶとい所があるんですよ。』が、私の考へて居るのは彼女の生命のしぶとさではなかつた、彼女の胎内に藏せられて居る最一つの生命のそれであつた。それに對して、私は苛々させられるのだ、それに對して、私は今陰謀を始めたのだ。

私の敵愾心はいよ〳〵烈しく成つた。私は一種の千里眼のやうな眼で以て、二人の未來を想像に描いて見た。ヂュリヤナは男の兒を、我が由緒ある舊家の嗣子を生むかも知れない。私の子でもない其兒は恙なく成長して行く。そして、私の母や弟の愛を簒奪する、私の肉の肉たるマリヤやナタリヤにも優つて可愛がられる。習慣の力は能くヂュリヤナの悔恨をも殺して、彼女は憚る所なく母としての感情に一身を委ねるやうに成る。そして、私の子でもない其子は、彼女と彼女の勤勉な撫育に護られて、ずん〳〵大きく成つて行く、强壯にも成れば、美しくも成つて行く。小さな專制君主のやうに我儘に成つて、家中の大將に成る。――だん〳〵これ等の一般的な幻影が特殊化して行つた。二三の奇怪な想像が實人生のやうな光景と行動とを取つた。其子の姿は際限もなく變化した。仕業だの、身振だのは始終變つて居た。或時はそれを痛せた、蒼白い、押默つた、大きな頭を胸の上に垂れた子供のやうに想像した。或時は又圓々と肥つて薔薇色をした、快活でお饒舌な、可愛らしい惡戲や追從の所好な、特に

私の方へ懷いて來る、憎氣のない好い子供のやうに想像した。或時は又其の反對に、飽く迄神經質で癇癖の强い、少し猫ッ被りで、鋭い才氣のある、好くない本能ばかり有つて居て、姉達にも辛く當れば動物にも殘酷な、愛情といふものゝ微塵もない、幾許訓練しようとしても手に負へない子供にも成つた。だん〳〵此の最後の概念が他を壓倒して、永久にそれ等のものを搔き消して仕舞つた。一定の典型として自家の地盤を固めた、假作的な生命を此中に取入れた、最後に名前迄採用した――ずつと以前から嗣子の名前として定められてあつたもので、卽ち私の父の名ライモンドである。

此の小さな幽靈は私の憎惡の直接の所生であつた。そして、私に對して私が彼に對して持つて居ると同じ敵意を持つて居た。それこそ、私が戰はうとして居た敵であつた。彼は私の犧牲であつた、私は彼の犧牲であつた。私は彼から遁れることが能きなかつた、彼も亦私から遁れることが能きなかつた。私達は二人ながら鐵の檻の中へ入れられた敵同志であつた。

彼の眼はフィリッポ・アルボリヨのそれのやうに灰色であつた。其眼のさま〳〵に變る表情の中でも、一つが、幾度も繰返された想像の光景の中で、最も強く私を動かした。其光景と云ふのは次のやうなものであつた――私は何の考へもなく一つの暗闇に包まれた、妙に森閑として室の中へ這入つて行つた。私は其處に誰も居ないと信じて居た。不意に振返つて見て、ライモンドの居ることに氣が附いた。例の灰色の眼で意地の悪相にぢろ〳〵私を見詰めて居るのだ。私は不意に強烈な犯罪の誘惑に襲はれた。ともすれば呪はれた小さな者の上に飛び懸つて行き相に成るのが恐ろしさに、私は遽てゝ其室から遁げ出した。

十九

私とヂュリヤナとの間に一つの約定が結ばれた――彼女は生きて行かねば成らぬ。私達は二人とも虚僞と隱蔽の生活を續けた。酔漢のやうに、私どもは二重の生活を送つた。一つは平和な、總てが溫情と、優しい親思ひと、純な愛情や仁慈な行動から成立つた生活である。最一つは昂奮した、熱に浮かされたやうな、騷々しい、不安な、希望のない、一つの固定觀念に支配された、永久怖ろしい不幸に追懸けられて居るやうな、未だ知られない大破綻に向つて突進して居るやうな生活である。

成程、或稀れな瞬間に於ては、私の魂もそれ等の不吉な呪ひから遁れて、それを掴まうとして何千となく差伸べられた惡魔の手から放たれて、從來も偶には瞥見したことのある高い理想の絶巔へ高翔の翼に羽搏つこともないではなかつた。私はあのアッソロの河添ひの森の中で、ヂョヴンニ・デイ・スコルヂョの話に伴れて、弟の言つた妙な言葉を想ひ出した。『阿兄さん、あの微笑を忘れないと云ふのは、貴方のために好い事なんですよ』と。そして、あの老人の皺ばんだ口許に表れた微笑が私には深い意味を有つやうに見えた、全然特殊な印象を私に與へて、神の眞理の啓示でもあるやうに私の精神を向上させた。

で、又それ等の稀れな瞬間に於て、最一つの微笑が始終私の前に現はれた――ヂュリヤナが未だ病氣で枕に着いて居た時分、始めてヴィラリラ行を聞かされて、不意に彼女の口許に表れたあの子供らしい微笑である。遠い平和な午後、私が嘘八百の嬉しい企劃で憐れな恢復期の病人を喜ばせた時の想出が、あの朝彼女が始めて病床を離れて室の眞中で笑ひながら息も絶え〳〵に私の腕に倒れ懸つた時の想出が、あの神々しい態度で以て、愛と、寛恕と、夢と、忘却と、あらゆる美しいものと善いものとを捧げた時の想出が、無限の絶望的な悲しみと良心の苦痛とを以て私を胸一杯にした。アンドレア・ボルコンスキイが公女リザの死顔の上に讀んだといふ、あの柔順な、而も怖ろしい質問を、私は絶えず妻の生顔の上に讀んで居た。『貴方は私を如何して仕舞つて呉れたのか。』一として非難らしい言葉は彼女の口から出なかつた。彼女の罪を輕減するためにも、彼女は決して私の數ある汚行の一つをも私の顔に投げ附けるやうなことをしなかつた。彼女は自分の拷問者の前に柔順な頭を垂れて居た、一滴の苦味をも自分の言葉に混へなかつた。で、それにも拘らず、彼女の眼は絶えずあの質問を私の前に繰り返して居た。『貴方は私を如何して仕舞つて呉れたのか。』

左樣いふ時、妙な犠牲的熱望が私の中に燃え上つて、私をして進んで私の十字架を抱かせようとしたものだ。犢罪の洪大なことが私の勇氣に値して居るやうに見えた。私は自分の中に力の饒多と、英雄的な精神と、迷ひを解かれた心とを持つて居るやうに感じた。で、あの惱みに頸垂れた妹の許へ行く道すがらも、私は一人で考へた。『今日は一つ彼女を慰めるやうな優しい言葉を、彼女の不幸を緩和するやうな同胞らしい同情の言葉を懸けて遣らう。左樣すりや、彼女の心も引立つて來るだらう』と。が、彼女の前へ出ると、私は一語も口へ出なかつた。私の唇は睦と封印を附けられて、私の全精神は惡魔の呪の下に置かれた。あらゆる内部の光明は、何處から來るか解らない氷のやうな風に吹き消されでもしたやうに消えた。そして、其暗闇の中に、私の好く知つて居て、而も抑へることの能きない例の鈍い憤怒がそろ〳〵動き始めた。

それは私の墮落の確かな徵候であつた。私はヂュリヤナの眼を避けるやうにして、二語三語譯の解らぬ辨解を吃りながら、安全を求めるために、其室から遁げ出した。

二十

彼女が他人の前で胡魔化す力は殆ど信じられない位のものがあつた。彼女は實際微笑することに成功した！彼女の健康に對する私の人に知られた心痛は、私が時々隱すにも隱されない憂鬱の發作に罹つた時でも、十分辨解の辭を供して呉れた。私の心痛が母や弟にも傳はつて、其結果ヂュリヤナの期待も從來の場合に於けるやうなお祭騷ぎの心持では扱はれないことに成つた。それに關する談話さへ避けられ出した。あゝ、それが切めてもの幸ひであつた！

間もなくヴェベスチ博士がラ・バディオラへ遣つて來た。彼の訪問は一同を安心させた。彼はヂュリヤナの健康が甚く衰へて居ることを言明して、神經系統の障害、貧血、消化機能の一般的衰頽等の症狀を擧げた。が、其他の點では總てが正則に進行して居る。若し患者の一般的狀態がおひ〳〵好く成つて行きさへすれば、別段憂ふるやうな危險はなからうと云ふのだ。其他彼は過去の場合に非常な抵抗力の實を示したヂュリヤナの特殊な體質の上に大分信賴して居た。彼は患者の攝生法と體力を附ける食事とを處方した。田園の滯在を推稱した。そして、規則的な睡眠、適度の運動、精神の安靜の勸說に特に力を置いた。

『特に貴方の御注意を望まなければ成りませんよ』と、彼は私に向つて眞面目に言つて居た。

私は一人心の中で落膽して仕舞つた。私は救濟の最後の希望を彼の上に置いて居た。そして、今やそれが外れて仕舞つたのだ。醫者の來る前に、私は彼が母親の命を救ふためには子供を犧牲にしなければ成らないと言つて呉れたらと待ち望んで居た。左樣成れば、ヂュリヤナは安全であらう、恢復もしやう、私も救はれやう、新しい生活の

借地權を手に入れたやうな氣にも成らう。私は又忘れることが能きる、少くとも諦めが着かうと云ふものだ。時は多くの傷痍を癒す。そして、仕事は多くの悲しみを慰めて呉れる。其間に、私は心の平和を取返して、私自身を變化する。そして、弟の例に倣つて、男に成つて、他人のために生活し、新しい信仰を懷抱することも能きやう。此不幸其者の中から、私は失はれた自尊心を恢復することも能きやう。他人に優つて苦しむ運命を與へられた者は、又他人に優つて苦しむだけの値打がある。これは弟の福音の中から拔き出した句ではないか。して見れば、悲哀の中に向上の段階があるのである。例へば、チョヴンニ・スコルヂョの如きも選ばれたもの丶一人である。あのやうな微笑を持つて居る彼は、神聖な賜物を持つて居るのである。私と雖もあのやうな賜物に値しない筈はない。――私は斯く希望し且つ思索した。あらゆる私の犢罪の熱望にも拘らず、私は私の苦痛の輕減を望んで居た。

正直のところ、私は苦難に依る自己の更生を望んで居たけれども、同時にそれを恐れて居た――實際の苦痛に面することを死ぬ程恐れて居た。私の魂は最早力が盡き果て丶居た。私は救濟の眞直な道の瞥見もした、基督教的景仰のために昂奮もした。それで居て、私は又確實な破壞に導く側道へ外れて仕舞つたのだ。醫者に向つて、彼の安心させるやうな豫想に對する不信を表白すると共に、私自身の心痛を告白しながら、私は自分の提議を暗示するやうな工合に話を運んだ。私は何んな犧牲を拂つてでもヂュリヤナの身の安全を熱望して居る、必要の場合には、些の悔ゆる所なくして第三兒の希望をも捨て得ると云ふことを相手に解らせるやうにした。私は何んな事でも隱して貰はぬやうに相手に願つた。

彼は再び私を安心させるやうに言つた。そして、縱令何んなに險惡な症狀を呈しやうとも自分としては器械的療法に訴へることは出來ない、現在のやうな患著の健康狀態では、そんな事をすれば容易に生命に係るやうな結果を齎すからと說明して聞かせた。で、目下の手當として肝要な事は、患者が來るべき試煉の日に取返された力と安

心とを以て當り得るために、一般的健康狀態の改善にあることを繰返して注意した。

『何うも奥樣には特に精神上の慰安が缺けて居るやうですね。私は舊いお馴染だ。あの方が非常に氣を遣つて來られたことも知つて居ますよ。何卒あの方の氣が引立つやうに貴方からして上げて下さい。』

二十一

醫者の保證に安心して、私の母はヂュリヤナに對する彼女の愛情に充ちた配慮を倍加した。最早彼女の優しい夢や豫想をも隱さうとはしなかつた。彼女は孫を待ち設けた、小さなライモンドを。今度こそ確かだと彼女は言ふのだ。

私の弟も亦ライモンドを期待して居た。マリヤとナタリヤとは、未來の遊び仲間に對する美しい無邪氣な質問で以て、私を、彼等の母親を、お祖母樣を壓倒して仕舞つた。

で、斯く優しい豫言や、幸福な前表や、可愛らしい希望で以て、一同は知られない、而も未だ形を成さない人間の出現を先觸れして居た。

ある日ヂュリヤナと私とは二人だけ楡の樹の下に腰掛けて居た。恰度私の母が二人を殘して去つた處なのだ。例の愛情に充ちた談話の間に、彼女はライモンドのことを持出して、亡く成つた父の遠い記憶を想ひ起しながら、小さ名のモンヂノ（我邦でお久さんをちやァちやんと喚ぶやうなもの）とさへ喚んで居た。ヂュリヤナと私とは努めて微笑するやうにした。彼女は自分の夢や希望が矢張私達のそれであると想像して居た。そして、私達が其夢の後を續けるやうに、二人だけ殘して去つたのだ！

日沒後の頃合であつた。空氣は朗かに且つ穩やかであつた。木の葉は二人の頭の上にそよともせずに垂れて居た。時々燕の群が羽音とがや〳〵云ふ鋭い叫聲を立てながら、空中を切つて飛んだ——ヴィラリラのやうに。

二人は見えなく成る迄祖母の姿を眼で見送つた。それから振返つて、互に顏を見合

せた――默つて、少し周章しながら。二人の不幸の餘りに大きいのに壓せられて、長い間何方からも沈默を破らなかつた。そして、私はヂュリヤナと私とが人類全體から切離されて、只二人だけの世界に住んで居るやうな氣がした。それは決して幻影から生れた感覺ではない、實際で且つ深いものである。私は思はず身顫ひした。そして、再び眼を伴侶の顏に上げた。其顏の上には私自身の苦痛の反映があり〳〵と見えた。彼女から見た私の顏にも同じやうな苦痛の色が出て居たに違ひない。

少時の間二人とも二人の不幸の深さを測らうと努めて、それに限りのないことを發見した後で、彼女は低い聲で言ひ出した――

『貴方は斯うして二人が生涯の間續くもんだと考へて被坐して？』

私は唇を開かなかつた。が、心の中では斷乎として返辭をして居た。『いや、斯んな事が續いては耐らない。』

『貴方がね』と、彼女は續いて言つた。『一言仰有りさへすれば、萬事を其場で留めることが出來るんですよ――貴方も自由に成れるんですよ。私は何時でも覺悟してます。それを記憶えて居て下さい。』

私は矢張物を言はなかつた。が、心の中で考へて居た。『死なねば成らぬのはお前ぢやアないよ。』

彼女は再び絶望的な愛着に顫へる聲音で後を續けた。『私には貴方を慰めて差上げることが能きない。貴方にも私にも慰めと云ふものはないのですよ――永久にないのですよ。ねえ、貴方は二人の間に何時かは或者が挾まると云ふことをお考へに成りましたか。阿母樣のお祈禱をお聞きに成つたら――何卒それを考へて下さい、考へて下さい！』

が、私の魂は只一つの陰慘な考への鞭の下に顫へて居た。

『宅の者達は今からそれを愛して居るよ』と、私は言つた。

私は躊ひながら、ぢろりとヂュリヤナの顏を見遣つた。再び其眼を落して、頭を低

く垂れながら、私は自分ながら唇の上に消えて仕舞ふかと思はれるやうな弱い聲音で、彼女に訊いた。『お前はそれを愛して居るのか。』

『あゝ、如何して貴方はそんな事を私にお訊きに成るんです？』

が、私は強ひてそれを訊かずに居られなかつた――私自身開いた傷口へ指を突込みでもしたやうに、肉體的に苦痛を感じて居たけれども。

『お前はそれを愛して居るのか。』

『いえ〳〵、私は心から嫌つて居ます。』

私は本能的な喜びの動悸を感じた――此告白に依つて、私はあの自分の秘密な考へに彼女の承諾、殆ど彼女の共犯を得でもしたやうに。が、彼女は眞實を答へたらうか。それとも、彼女は私に對する憐憫から嘘を吐いたに止まるのか。

更に深く突込んで訊いて見たいと云ふ、彼女を強ひて根こそぎ告白させて仕舞ひたいと云ふ殘忍な欲望が私の上に襲つて來た。が、彼女の顏を見ると左樣も能きなかつた。加之、一方では彼女に對して感謝するとは云はない迄も、幾分か心を和らげられたやうな氣もした。彼女が身顫ひしながら告白した嫌惡の情は、或意味で彼女が自分の胎内に保つて居るものから彼女を引離して、私の方へ一層近く連れて來たやうに、私には思はれた。そして、私は彼女に私の此心持を了解させて遣りたい、それに依つて、二人に取つては永遠に宥和し難い敵でもあるやうに、其兒に對する彼女の憎惡の念を強めさせて遣りたいと云ふやうな氣もして居た。

私は彼女の手を執つた。『お前は幾分か私の苦しみを緩めて呉れた』と、私は言つた。『私はお前に感謝して居るよ。お前にも解つてるだらう――』私は自分の犯罪的な企圖を基督教徒らしい希望の假面の下に包まうとした。『天は恩惠の深いものだ――これで私達にも未だ救はれる道が殘つてるかも知れないからね。私の言ふことはお前にも解つてるだらう。いや、餘計な事は言ふに及ばない、二人とも神樣にお願ひするのが一番だよ。』

それは子供の死に對する祈禱であつた、呪詛も同じであつた。斯うしてヂュリヤナをも神樣がそんな恩惠を垂れて下さることを祈るやうに誘ひながら、私は怖ろしい事件に對して彼女を準備した。そして、一種の精神上の共犯に彼女を引入れた。私は左樣言ひながら次の樣に考へて居たのだ。『斯う言つてさへ置けば、左樣いふ行爲に對する暗示がだん〳〵彼女の心の中へ入つて行つて、終ひには彼女を捲込んで仕舞ふかも知れない――此汚辱から、恐怖から私を救ひ出すと云ふ考へに騙られて、彼女が其の怖ろしい事件の免れ難さを容易に自覺して來ると云ふことは、そして、烈しい力の衝動の下にそれ程極端な犧牲をも敢てし得ると云ふことは、極めてあり得べきことである。彼女は今も自分が死なうと覺悟して居ることを繰返して證言したではないか。彼女の死は勿論其子供の死を含んで居る。して見れば、彼女が宗教上の偏見なぞのために、罪惡の恐れのために阻止せられると云ふことはない。一方彼女は自分の生存が此世に有用である、自分を愛して呉れる人々、又自分が愛して居る人々に取つて必要であることを知つて居る。彼女は又私の子でもない其子供の生存が二人の生活を耐へ難いものにすると云ふことも知つて居る。彼女は二人が再び結び着くことの能きると云ふことも、二人が宥恕と忘却との中に或種の慰樂を見出し得ると云ふことも、二人の間に別の闖入者さへ現はれなければ、時の經つ間には二人の傷痍が癒されるのを待つことが能きると云ふことも知つて居る。これ等の問題を彼女が篤と考へさへすれば、無用な呪ひも、驗のない祈禱も卽座に決心と行爲とに變改することが能きると云ふものだ。』斯く私は考へ運らした。彼女も亦默つて考へに沈んで居た――頭を垂れて私の手を自分の手の中に握つたまゝ。其間大きな楡の樹の影は二人の上に落ちて居た。

何を彼女は考へて居たらう？夕方のそれとは違つた影が彼女の上に落ちたのか。

私は自分の前にライモンドの姿を見た――灰色の眼をした、執拗けた、狡猾な兒ではない、一寸壓へても其の弱い〳〵息の根を留めることが能きるやうな、小さな、和らかな赤兒である。

御告の祈り（舊教で基督の化身の記念として、朝、午、夕に祈るもの）の最初の鐘の音が靜かな空氣を破つて聞えて來た。ヂュリヤナは私の手から手を引いて、胸に十字を畫いた。

二十二

四箇月が過ぎた、それから五月目も、ヂュリヤナの容子は急速に變つて行つた。彼女はそれに依つて、何か厭ふべき不具にでも成つたやうに、私の前に氣を置いて居た。

私は最早斯んな憐れな生活を引摺つて行くのに耐へないで、策も方便も盡き果てたやうな氣がした。毎朝、私は寢不足な睡眠から目を覺すたびに、誰かが私の前に深い洋盃を突附けて、『お前が今日も飲まうと思ふならば、生きて行かうとするならば、お前は此中へ心臟の血を最後の一滴迄も注ぎ込まなければ成らない』と言つて居るやうな氣がした。そして、何とも云はれない嫌惡と嘔氣の身顫ひが朝起きるたびに私の存在の根柢から震撼させた。然も私は未だ生きて行かねば成らない！

日々は殘忍な緩やかさで以て匐ふやうに進んだ。時は最早流れなかつた、ぽたりぽたりと重苦しく滴つた。

私は自分の前になほ夏の全體と秋の一部とを持つた——永劫を持つた。私は弟の聢りした信仰の炎に依つて、私の弱い信仰を燃え立たせようとしながら、大きな耕作業を助けるために、自ら強ひて、毎も彼と連れ立つて出るやうにした。來る日も〳〵私は牧羊者のやうに馬の脊にあつた。私は手の勞働に依つて、容易い單調な仕事に依つて、へと〳〵に勞れようとした。私は土の子等との、單純な、氣さくな人々との日日の接觸に依つて、私の心の鋭い刄を鈍らせようとした。此人達の間には、父から子に傳へられた道德的法則が身體の機能と同じやうに自然に行はれて居るのである。私はヂョヴンニ・スコルヂョのあの聲を聞かうとして、彼の不幸に就いて訊ねようとして、最一度あの悲しげな眼とあの微笑とを見ようとして、一再ならず彼を訪問した。

が、彼は沈默家で、私に對して少し含羞んでも居たので、何を訊いても言葉少なに曖昧な返辭を與へるに過ぎない。自分の話をすることも、不平を言ふことも、自分が取懸つて居る仕事を中斷することすら心に染まぬらしい。彼の痛せた、骨張つた、日に燒けた手は決して働くことを罷めなかつた。恐らく勞れるとは何んな事だと云ふことも知らぬらしい。

ある日、私は思はず叫んだ。『だが、お前は全然自分の手を休めない積りかい。』

此の苦しい試みに堪へて來た人は微笑を泛べながら自分の手を眺めた。少し離して日光の中に擧げながら、最初は手の甲を、次には掌を見た。其の考へ深い凝視、其微笑、其態度が荒れた輝だらけの手に王者のやうな威嚴を與へた。田野の勞働に粗されれ、それの蒔いた善と、それの分前を取つた大事業とに依つて神聖にされて、それ等の手は今や橄欖の葉で飾られる値があつた。

老人は胸に十字を畫いた。そして、矢張微笑しながら答へた。

『旦那樣、神樣の思召次第で最う直きですよ。私の棺の中で此手が斯んな風に組合せられた時にや——これも休むことが能きますよ。』

二十三

が、あらゆる療法は無効であつた。私の仕事は私の氣を引立てゝも呉れなければ、愉快にしても呉れなかつた。それも其筈である。私の勞働は餘りに過度で、不平均で、不規則で、熱にでも泛かされたやうで、屢々打克ち難い無精と、困憊と、興味の喪失とに依つて中斷されたものだ。

『それぢや私の生活の法則を實行したことには成りませんよ』と、弟は忠告した。

『貴方は一週間に七箇月分位の精力をお出しに成る。左樣かと思ふと、すつかり惰けてお仕舞ひに成るが、それは又最一度狂人のやうに成つて仕事にお懸りに成るためなんでせう——それぢや本當に生きる道ではありません。我々の仕事は落着いて、協同的

に、調和的に實行されなけりや不可ない――それが實効を擧ぐるためにはですね。お解りに成りましたか。何うも私どもは豫め方法を定めて置く必要がありますね。が、勿論貴方のはあらゆる初心者の失敗ですよ――熱心が過ぎるんですね。其間には貴方も落着いて被坐しやいませうよ。』

次の時に彼は私に言つた。『貴方は未だ平衡が取れないやうですね。未だ足の下に固い土を感じられないのですよ。だが、心配することはありません、早晩貴方も自分の生活を支配するに足る眞の法則を發見されることでせうよ。其時が來れば、貴方の眼は不意に思ひ懸けなく開かれることでせう。』

それから又彼は言つた。『今度は安心して被坐しやい、嫂さんは貴方に男の兒を――ライモンドを授けて呉れますよ。私は最う其兒の名親も考へて置きました。貴方の息子はヂョヴンニ・ディ・スコルヂョの手で洗禮を受けさせるに限りますね。あれより好い名親は決してありません。ヂョヴンニは其兒にあの男の善と力とを吹き込んで呉れませう。ライモンドが物が解るやうに成つたら、直にあの立派な老人の話をして聞かせませうね。そして、貴方の息子は私どもに如何しても能きなかつたことを代つて仕遂げるやうに成りますよ。』

彼は始終此問題に歸つて來た。ライモンドの名は絶えず彼の唇の上にあつた。彼は其子が成長して、長い間自分の夢想して居た理想的人間の型――模範――に成るだらうと豫言した。そして、彼は自分の一語々々が劍の刃のやうに私の心臓を劈いて、私の憎惡を前よりも一層苦く、私の失望を一層烈しくすることは知らないで居た。

家内中の者は皆何にも知らずに競爭して私を傷つけようと聯合して居た。私が彼等の一人に近づく時は、何時でも手に命に係るやうな刃物を持つて居ながら、而も其の怖ろしさを知らないで居る人間にでも近づくやうな、何とも云はれない恐怖と戰慄とを以てした。私は絶えずそれで突かれることを恐れて居た。そして、能きるだけ側の者から遠く離れて、孤獨の中に僅かな安堵を求めようとした。が、此處でも私の最惡

の敵と面を合せる外なかつた――私自身と。

私は潛に自分がぢり〳〵と死んで行くやうな、私の毛孔から生命がだん〳〵蒸發して行くやうな氣がして居た。時として今は遠い過去と成つた私の暗黑時代と同じやうな心の狀態が還つて來た。時として私は無益な幻影の世界に取殘された自分の生活の孤獨の外に何物をも意識して居なかつた。長い間、私は壓潰されるやうな生活の重荷と、頭の中に一つの緩々とした動脈の打搏の外に何物をも感じなかつた。

此後には私自身に對する反語と皮肉の突貫が、周圍のあらゆる物を破壞したい、引倒したいと云ふ烈しい欲望が、天帝に對する褻瀆的な嘲笑が、私の性質の最も汚ない滓の醱酵が續いた。私は最早抑制とか、憐憫とか、愛情とか、親切とか云ふものゝ何を意味するかを知らないやうに見えた。私の中のあらゆる善の泉は、惡魔の符呪にでも懸つたやうに閉ぢられた、乾上つた。ヂュリヤナの中に、私はあの獸的な事實――彼女の不誠實の結果を外にして何物をも見なかつた。私自身の中に、私は只瞞された良人を、感傷的な駄小說の笑ふべき主人公を見た。私自身の毒々しい嘲笑は私の行爲の一つをも、ヂュリヤナのそれをも容赦しなかつた。悲劇は鈍な、粗大な喜劇に一變した。何物も私を引留めなかつた。あらゆる繫縛は解かれた。そして、私は心の中で考へた。『何故斯んな所に愚圖々々してそんな憐れな役を演じて居るのか。俺は行かう――世の中へ、元の自由と放蕩の世界へ歸つて行かう。俺は遊蕩の中に此の悲しみを溺らすことも能きる、勝手に墮落することも能きる、それで可いぢやないか。俺はあるが儘の俺に成るんだ――泥濘の中に轉つて居る獸に。畜生ッ！』

二十四

斯う云つたやうな發作の一つの間に、私はラ・バディオラを去つて、心の散亂を求めて羅馬に行かうと決心した。

托辭は容すく發見された。斯んなに長く不在にしようとは思はなかつたので、私達

は一時的な條件の下に都の家を殘して來た。で、私どもの滯在が無限に引延ばされるためには、さま〳〵な整理をして來る必要があつた。

で、私は母や、弟や、ヂュリヤナに出立の思ひ立ちを打明けて、十分に其の必要を說明した。そして、數日の間に必ず用事を果して歸つて來るとも約束した。

出立の前の晩、夜晩く私が持つて行く物を整理して鞄の蓋をしようとして居た時、不圖扉を敲く音を聞き附けた。

『お這入り』と、私は言つた。

ヂュリヤナが這入つて來た。『お前だつたのか？』と、私は思はず聲を擧げた。そして、急いで彼女を出迎へた。

彼女は梯子段を上つて來たので、少し息を切して居た。私は彼女を座に着かせて、恰度用意のしてあつた、檸檬の薄い片を入れた冷たいお茶の洋盃を侑めた。彼女の一番所好な飲料である。彼女はそれに唇を附けるか附けないで、其儘私に返した。彼女の眼は苛々した昂奮を裏切つて居た。

到頭、彼女はおづ〳〵した聲で言ひ出した。『ぢや、いよ〳〵被往しやるんですね。』

『あゝ』と、私は答へた。『知つての通り、明日の朝出懸ける積りだよ。』

沈默の長い合間が續いた。明け放した窓を通して快い涼風が通つて來た。滿月は窓の敷居越しに流れ込んだ。蟋蟀の合唱は、稍ざら〳〵した笛の音のやうに、遠方から聞えて來た。

『何時お歸りに成りますか。眞實の事を仰有つて下さい』と、彼女は不意に昂奮した聲音で訊いた。

『そりやア判らないよ』と、私は答へた。

再び沈默が續いた。輕い微風が時々帷幄を戰がせた。室の中へ入つて來る風は一息毎に夏の夜の魔力を翅に載せて來た。

『ぢや、最う私を捨てゝお仕舞ひに成るんですね？』